# 第８章　陰田荒神谷遺跡の調査

## 第１節　位置と環境（第４、332、333図・写真図版１、67）

荒神谷山（標高約83m）は、ドウド山（標高約160m）から北に延びる尾根を形成している山の一つである。伯耆国と出雲国の国境となっていたこの尾根は、現在でも鳥取県と島根県の県境をなしており、この荒神谷山からも東西へ尾根が派生し、谷地形を形成している。

荒神谷山頂上からは、北には中海および日本海、弓ヶ浜半島、島根半島を、東には米子市街、霊峰大山を望むことができる。また眼下に、西には、カンボウ遺跡、石田遺跡を、東には、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡を俯瞰することができ、荒神谷山と同じ尾根線上には、北から陰田48～51号墳（島根県側の呼称－国吉古墳群）、陰田52～54号墳、国吉遺跡が点在している。

本調査地は、米子市陰田町字荒神谷山および小犬田堤ノ下に所在している。標高約４～30m、荒神谷山の南東の谷地形とそれを中心とした荒神谷山の東側から南側の裾部斜面、および南東部に位置する北東に向かって延びた尾根である。谷地形は奥で摺鉢状に膨らみ、途中、南北から張り出した尾根に狭まれながら下流で扇状に広がり、調査地東辺は陰田小犬田遺跡と接している。

## 第２節　調査の経過と方法（第333図・写真図版67）

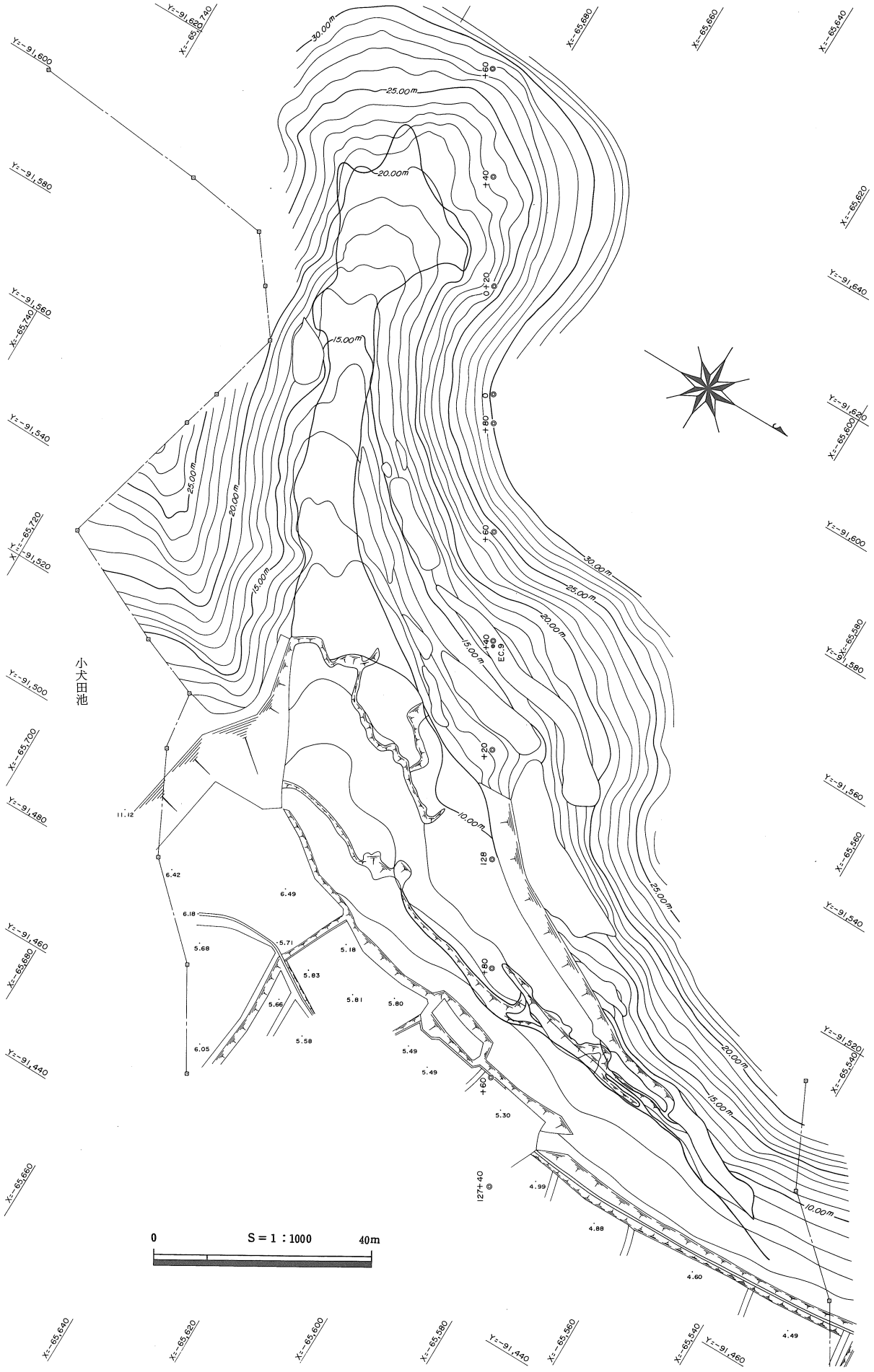
陰田荒神谷遺跡の調査範囲は、平成６年度に米子市教育委員会による事前の試掘調査の結果をもとに決定した。調査面積は9,824㎡である。

本調査地は、地形が陰田ヒチリザコ遺跡と酷似しており、テラス状遺構の存在が考えられた。遺跡の時期は、陰田小犬田遺跡ａ区で出土している流れ込みの遺物より、古墳時代後期から奈良時代が中心となると予測した。現況で、段状地形が確認でき、テラス状遺構（ＳＳ－２～５、７～９）の存在を推定した。また陰田小犬田遺跡と接しているなだらかな傾斜面上にも遺構の存在を予測した。谷奥部のゆるやかな斜面には、広範囲にわたるテラス状遺構の存在が考えられた。調査地南東に位置する尾根（以後「Ａ－１区」と称する）には古墳の存在を予測した。

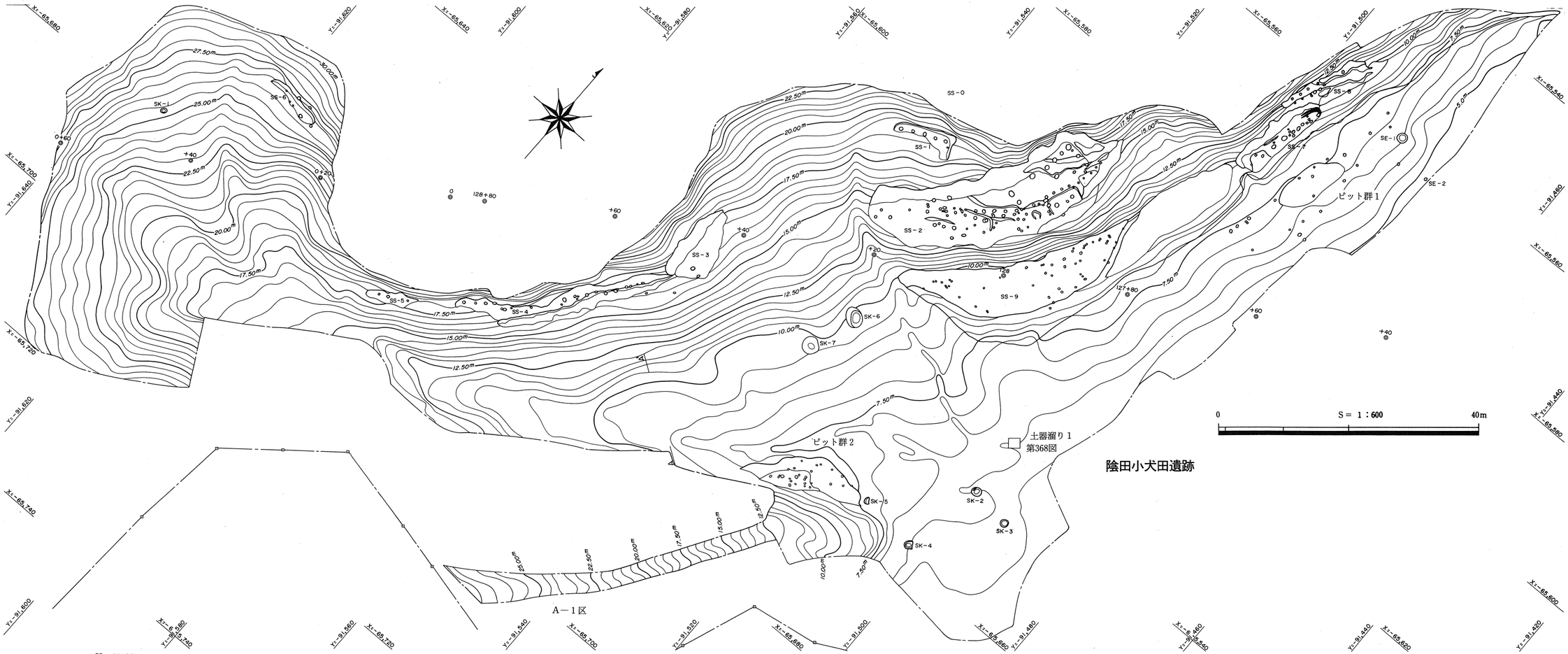
平成７年４月より調査に着手。本遺跡は地形的に出水が多く、用水路への泥水流出を防ぐために、沈砂池を設置、泥水を浄化した後、排水した。調査はまず、重機による表土除去を行った。遺構は、荒神谷山の急峻な斜面にテラス状遺構を、斜面が緩やかになる裾部で土坑・土器溜り・ピット群・井戸を検出した。これら遺構は、それぞれ写真撮影、実測を行い、ラジコン・ヘリコプターにより全体写真の撮影を行った。沈砂池および管理上危険箇所の埋め戻しを行い、11月に調査を終えた。

また、本遺跡において、遺構の実測、遺物の実測および取り上げには、トータルシステム（遺跡調査システムＳＩＴＥII）を用いた。この際に基準となる点（基準点１）〔Ｘ＝－65,568.9121　Ｙ＝－91,495.9942〕から、任意の杭を増設した。

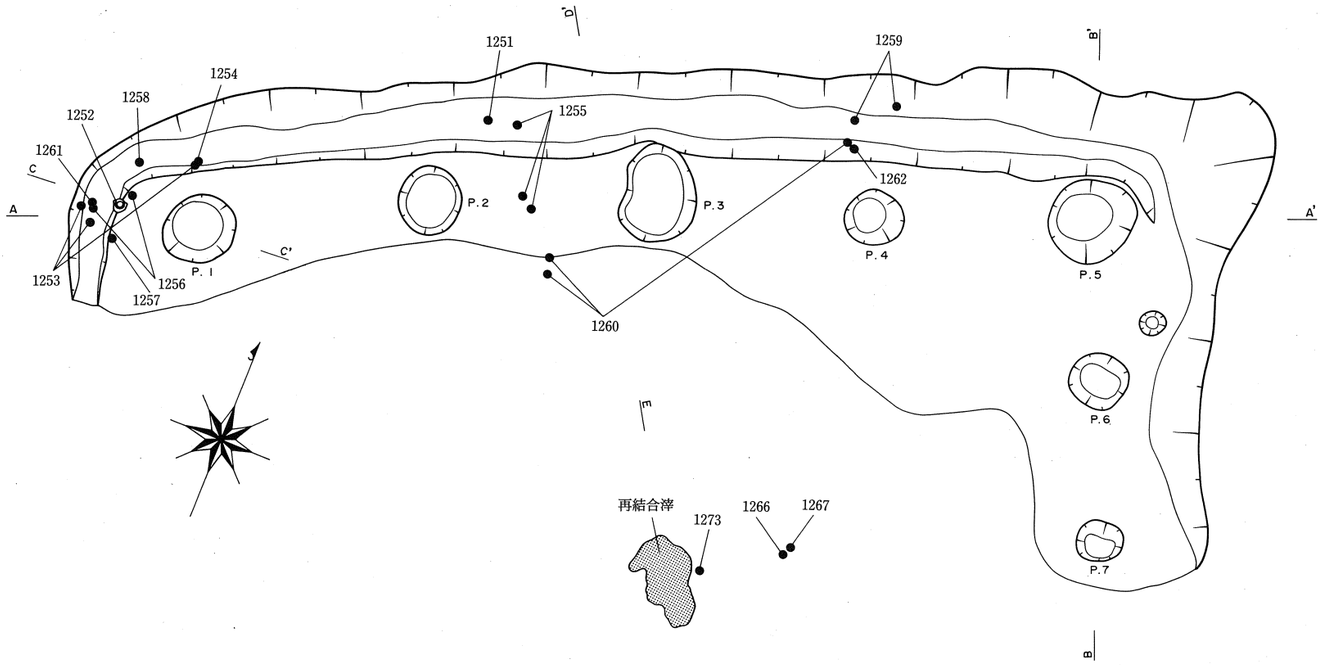
なお、６月に鳥取県立皆生養護学校による体験学習が行われた。また10月には現地説明会を行い、多数の方々に参加していただいた。

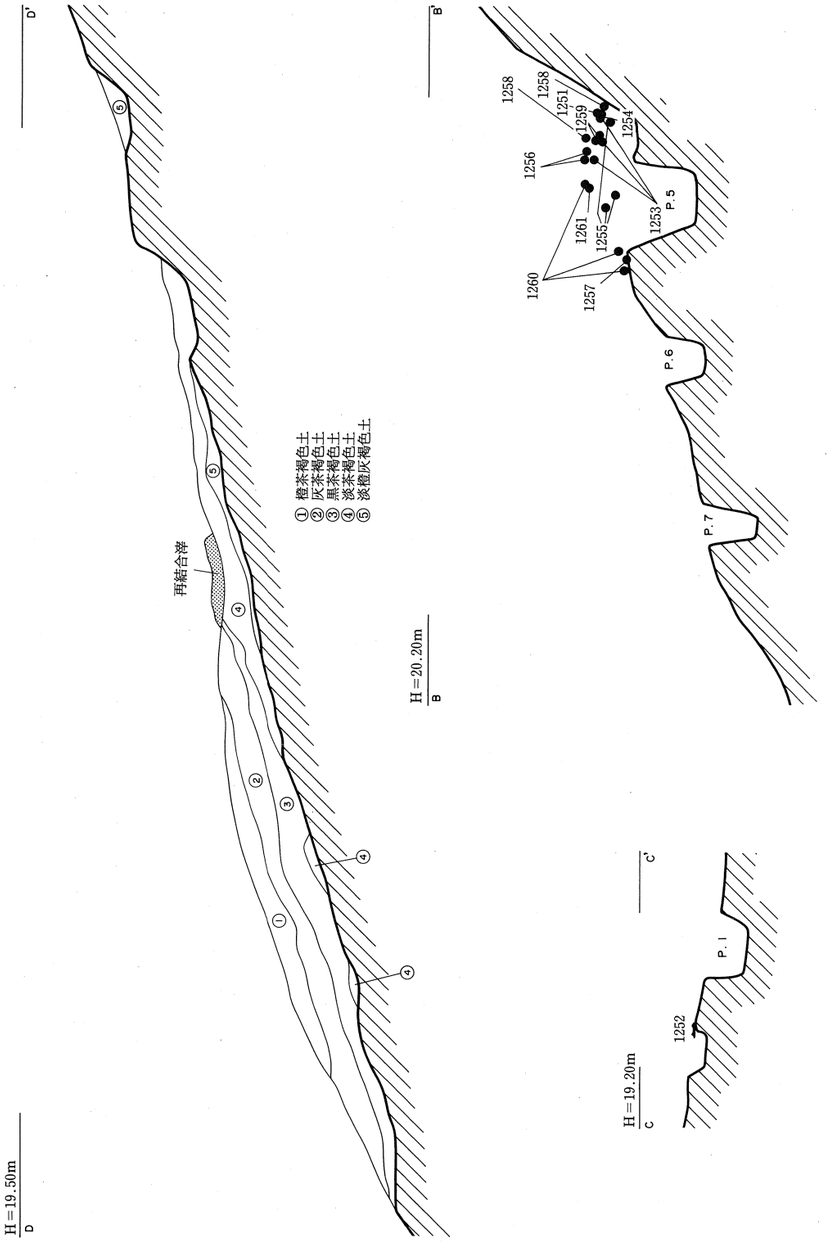


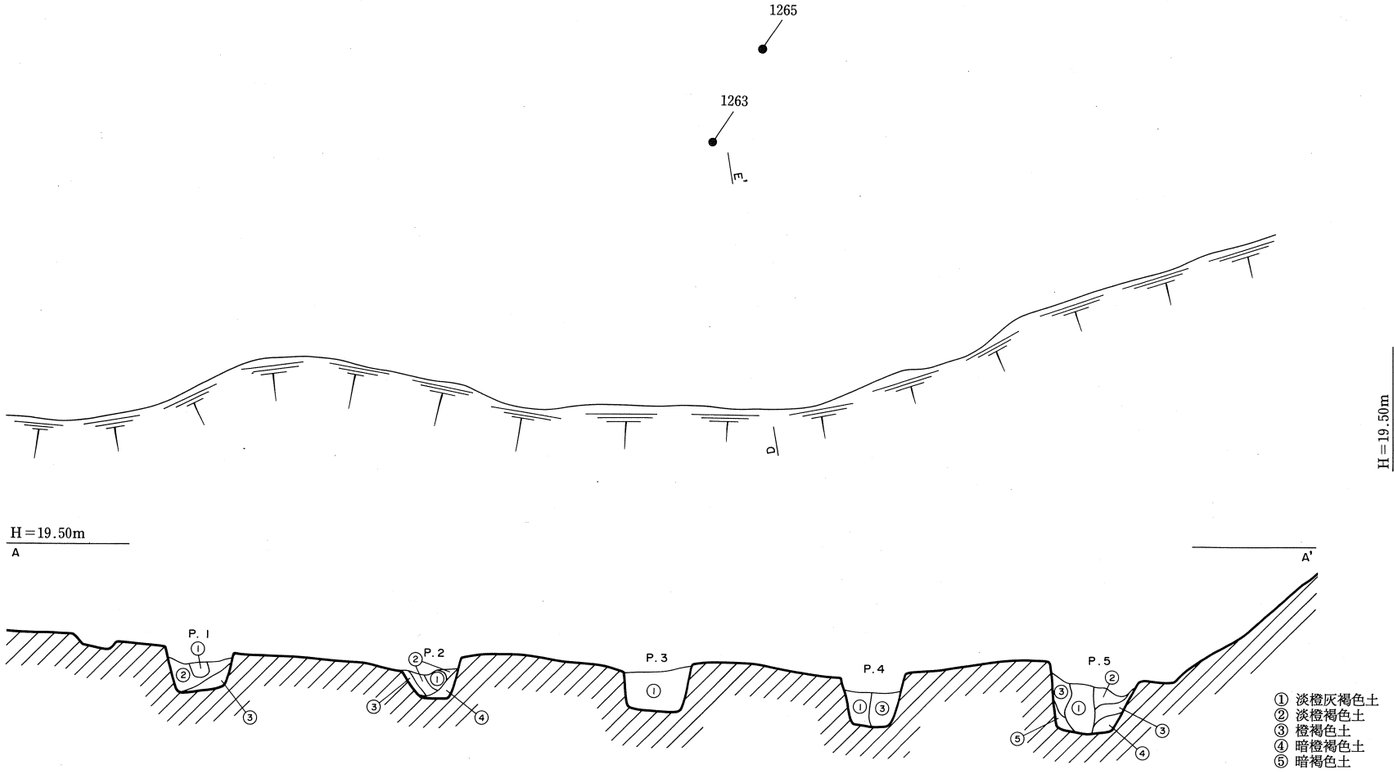

第332図　調査前地形実測図



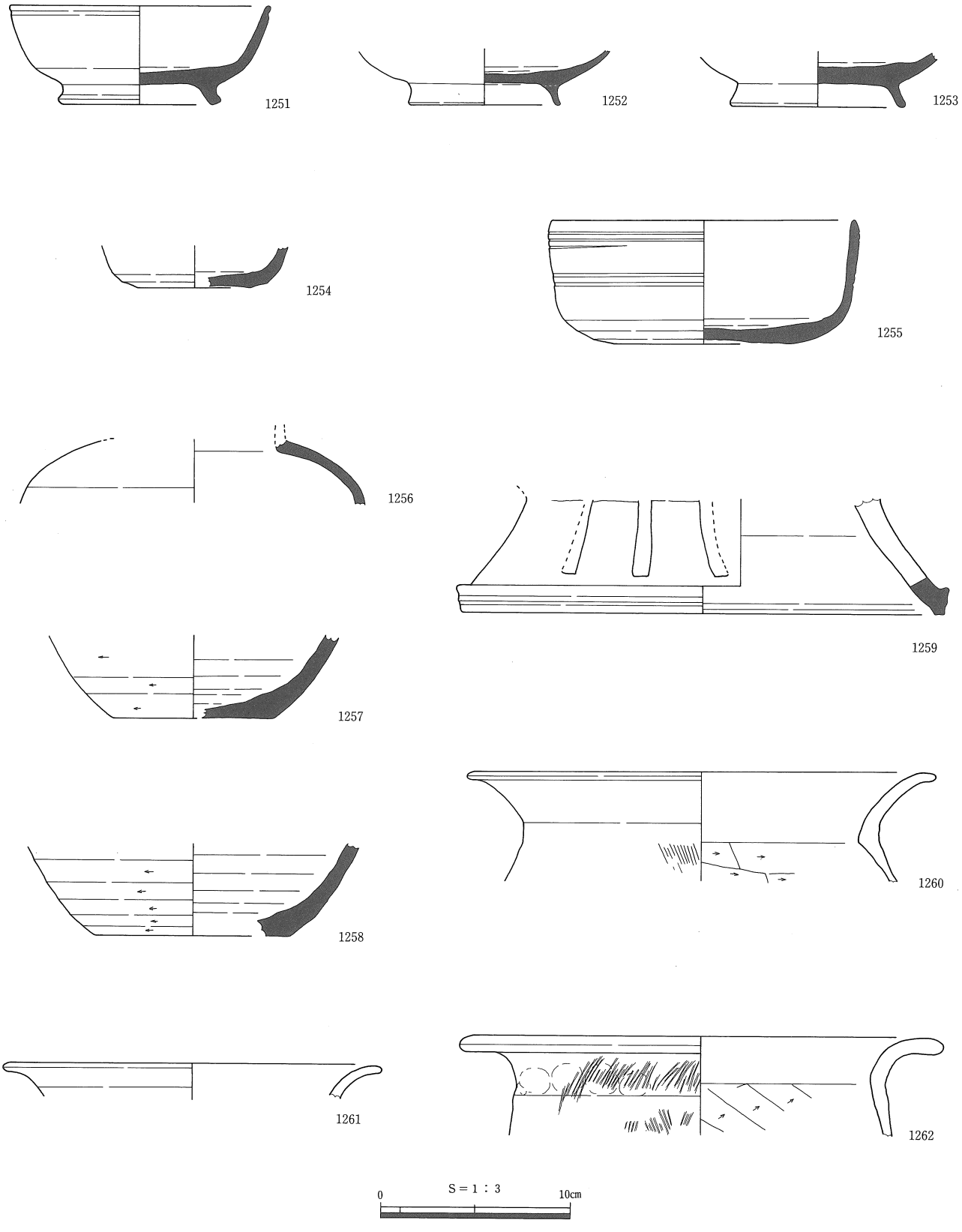

第333図　全体遺構実測図



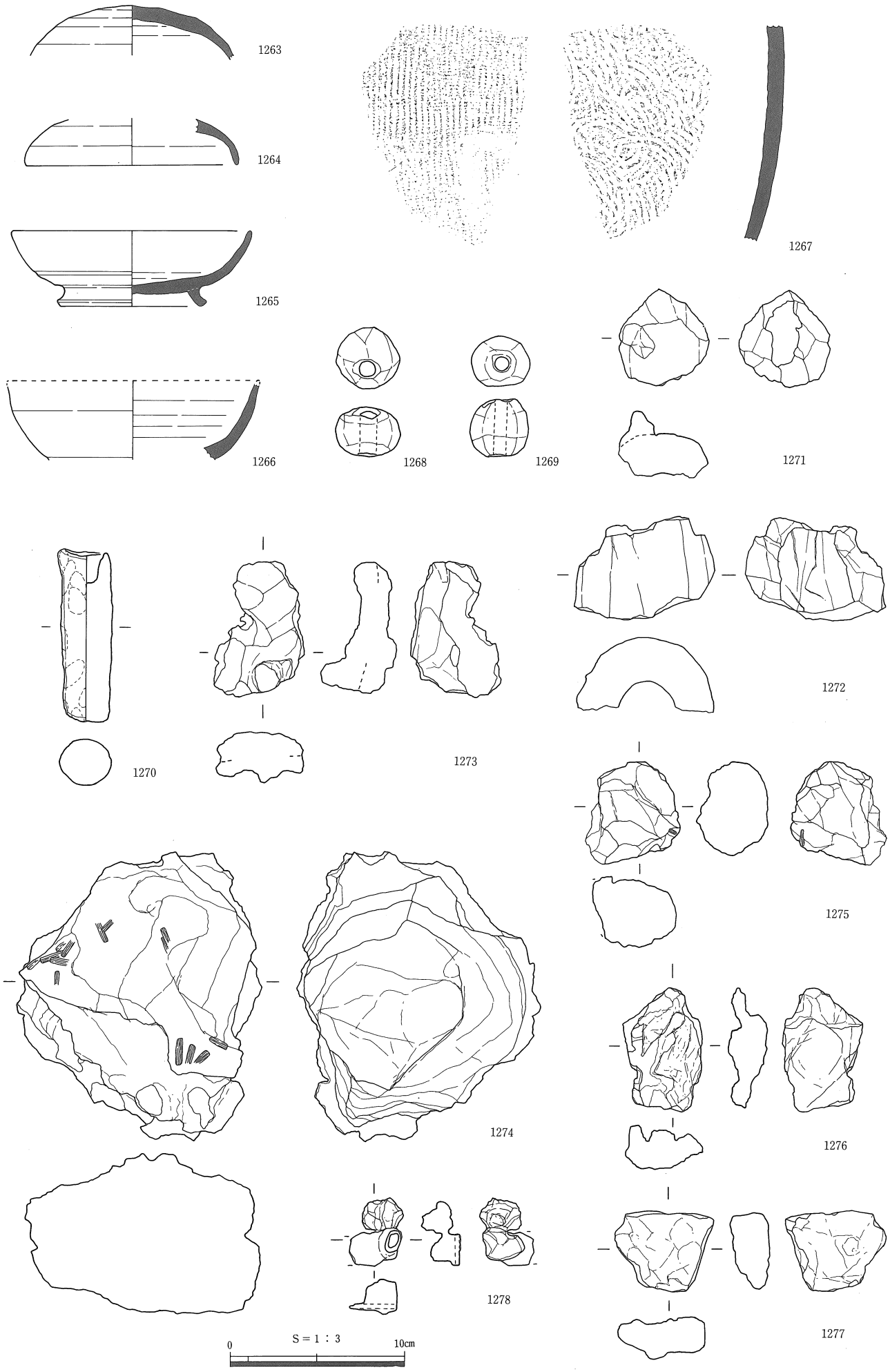



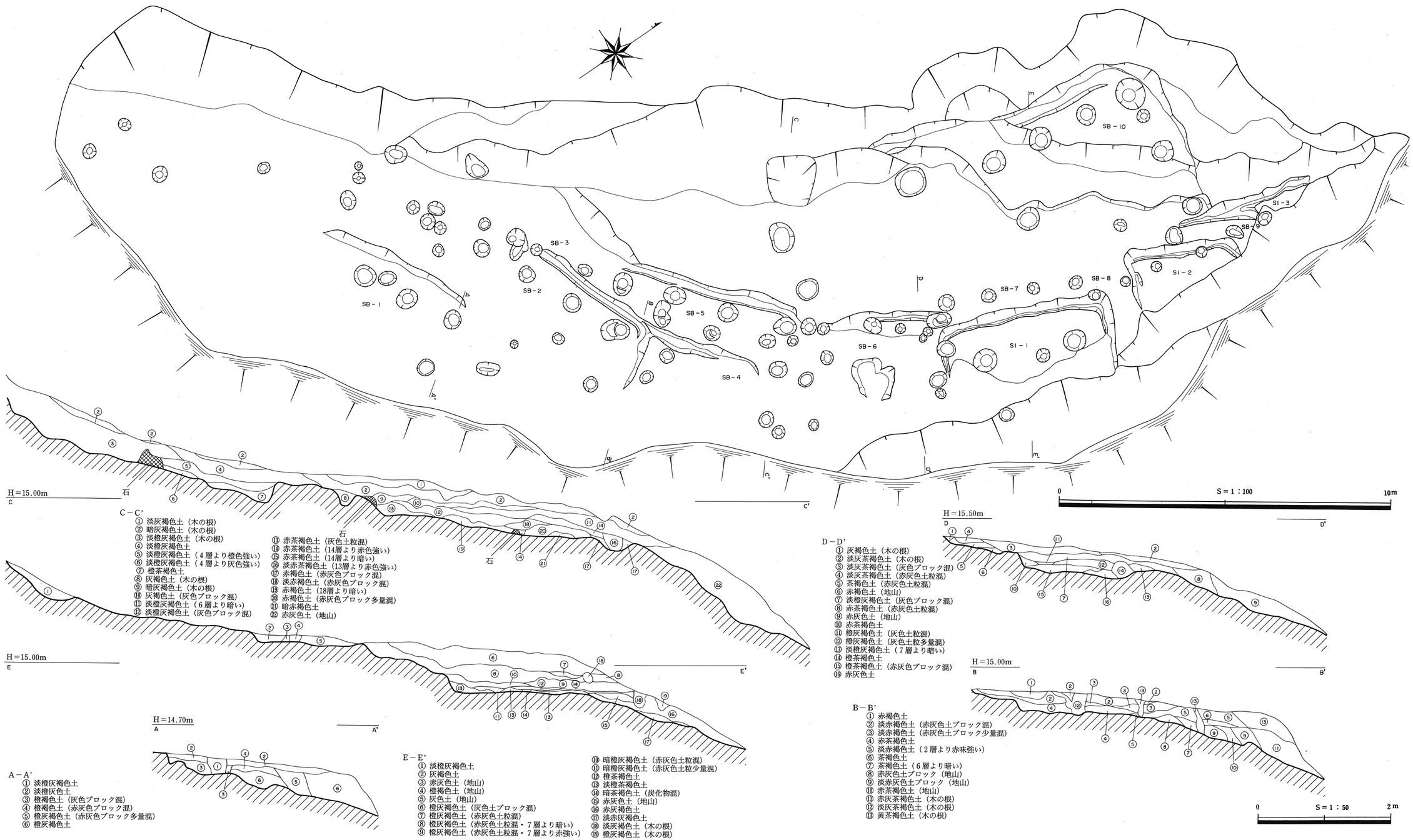

第334図　ＳＳ－１実測図




第335図　ＳＳ－１出土遺物実測図




第336図　ＳＳ－０出土遺物実測図







C－C'
① 淡灰褐色土（木の根）
② 暗灰褐色土（木の根）
③ 淡橙灰褐色土（木の根）
④ 淡橙灰褐色土
⑤ 淡橙灰褐色土（4層より橙色強い）
⑥ 淡橙灰褐色土（4層より灰色強い）
⑦ 橙茶褐色土
⑧ 灰褐色土（木の根）
⑨ 暗灰褐色土（木の根）
⑩ 灰褐色土（灰色ブロック混）
⑪ 淡橙灰褐色土（6層より暗い）
⑫ 淡橙灰褐色土（灰色ブロック混）
⑬ 赤茶褐色土（灰色土粒混）
⑭ 赤茶褐色土（14層より赤色強い）
⑮ 赤茶褐色土（14層より暗い）
⑯ 淡赤茶褐色土（13層より赤色強い）
⑰ 赤褐色土（赤灰色ブロック混）
⑱ 淡赤褐色土（赤灰色ブロック混）
⑲ 赤褐色土（18層より暗い）
⑳ 赤褐色土（赤灰色ブロック多量混）
㉑ 暗赤褐色土
㉒ 赤灰色土（地山）

A－A'
① 淡橙灰褐色土
② 淡橙灰色土
③ 橙褐色土（灰色ブロック混）
④ 橙褐色土（赤灰色ブロック混）
⑤ 橙灰褐色土（赤灰色ブロック多量混）
⑥ 橙灰褐色土

E－E'
① 淡橙灰褐色土
② 灰褐色土
③ 赤灰色土（地山）
④ 橙褐色土（地山）
⑤ 灰色土（地山）
⑥ 橙灰褐色土（灰色土ブロック混）
⑦ 橙灰褐色土（赤灰色土粒混）
⑧ 橙灰褐色土（赤灰色土粒混・7層より暗い）
⑨ 橙灰褐色土（赤灰色土粒混・7層より赤強い）
⑩ 暗橙灰褐色土（赤灰色土粒混）
⑪ 暗橙灰褐色土（赤灰色土粒少量混）
⑫ 橙茶褐色土
⑬ 淡橙茶褐色土
⑭ 暗茶褐色土（炭化物混）
⑮ 赤灰色土（地山）
⑯ 赤灰褐色土
⑰ 淡赤灰褐色土
⑱ 淡灰褐色土（木の根）
⑲ 橙灰褐色土（木の根）




D－D'
① 灰褐色土（木の根）
② 淡灰茶褐色土（木の根）
③ 淡灰茶褐色土（灰色ブロック混）
④ 淡灰茶褐色土（赤灰色土粒混）
⑤ 茶褐色土（赤灰色土粒混）
⑥ 赤褐色土（地山）
⑦ 淡橙灰褐色土（灰色ブロック混）
⑧ 赤茶褐色土（赤灰色土粒混）
⑨ 赤灰色土（地山）
⑩ 赤茶褐色土
⑪ 橙灰褐色土（灰色土粒混）
⑫ 橙灰褐色土（灰色土粒多量混）
⑬ 淡橙灰褐色土（7層より暗い）
⑭ 橙茶褐色土
⑮ 橙茶褐色土（赤灰色ブロック混）
⑯ 赤灰色土

B－B'
① 赤褐色土
② 淡赤褐色土（赤灰色土ブロック混）
③ 淡赤褐色土（赤灰色土ブロック少量混）
④ 赤茶褐色土
⑤ 淡赤褐色土（2層より赤味強い）
⑥ 茶褐色土
⑦ 茶褐色土（6層より暗い）
⑧ 赤灰色土ブロック（地山）
⑨ 淡赤灰色土ブロック（地山）
⑩ 赤茶褐色土（地山）
⑪ 赤灰茶褐色土（木の根）
⑫ 淡灰茶褐色土（木の根）
⑬ 黄茶褐色土（木の根）

第337図　ＳＳ－２実測図

## 第３節　遺構と遺物（第335～380図・写真図版68～72、92～94）

### １　概要（第334図・写真図版67、92～94）

テラス状遺構は、合計９基を検出した。現地形で確認できたＳＳ－２の上方、比較的なだらかな斜面でＳＳ－１を、調査地北側の荒神谷山東斜面には、ＳＳ－７・８を隣接して検出した。谷地形の中間部、谷が狭くなる荒神谷山南側斜面でも急峻な斜面にも犬走状にはしるＳＳ－３～５を検出した。摺鉢状になった谷地形では北側斜面にＳＳ－６が認められたが、周辺の斜面でテラス状遺構は検出できなかった。

土坑は、合計７基検出した。谷奥部の斜面に１基、Ａ－１区の裾部周辺で４基、荒神谷山南側裾部のなだらかな台地状の地形で２基検出した。

ＳＳ－１、２、９とＳＳ－３との間の谷地形は、斜面を抉るように直線的に下り、なだらかな裾部で蛇行しながら陰田小犬田遺跡へと続いており、この谷地形の下流付近で土器溜りを１ケ所検出した。

ピット群は２ケ所を検出。Ａ－１区の北側裾部と、陰田小犬田遺跡北西部（ｄ区）に接する荒神谷山東側の裾部である。どちらも多数のピットをもつが、規則的な並びは見られないためピット群と称した。後者の付近では、井戸跡を２基検出した。

また、Ａ－１区については前述のとおり、古墳の存在が予想されたために尾根線上に、幅１ｍ、長さ５ｍ前後のトレンチを３ケ所に設定し、掘り下げたが、表土は薄く、除去すると岩質の地山が露出した。遺構、遺物が確認できなかったためさらに拡大延長した。出土遺物は、流出溝滓1399と少量の土師器片と須恵器片であった。流出溝滓は尾根の頂部付近より出土、この流出溝滓が生成された時期は、遺跡の主体的な時期である８世紀代としても差しつかえないものと思われ、その大きさから大型の製鉄炉から排出されたものであることが判断される（註１）。他の遺物もすべて表土中での出土であり、流れ込みの遺物であると判断し、遺構の検出もないため、Ａ－１区の調査を終了した。

調査地を東に走る大きな谷地形については、埋土中に大量の遺物を包含しており、ベルトを残し土層断面観察を行った。堆積状況を窺い知ることができたが、遺物包含層の最下層で青磁や備前焼の出土が見られ、包含層の形成は中世以降と判断した。

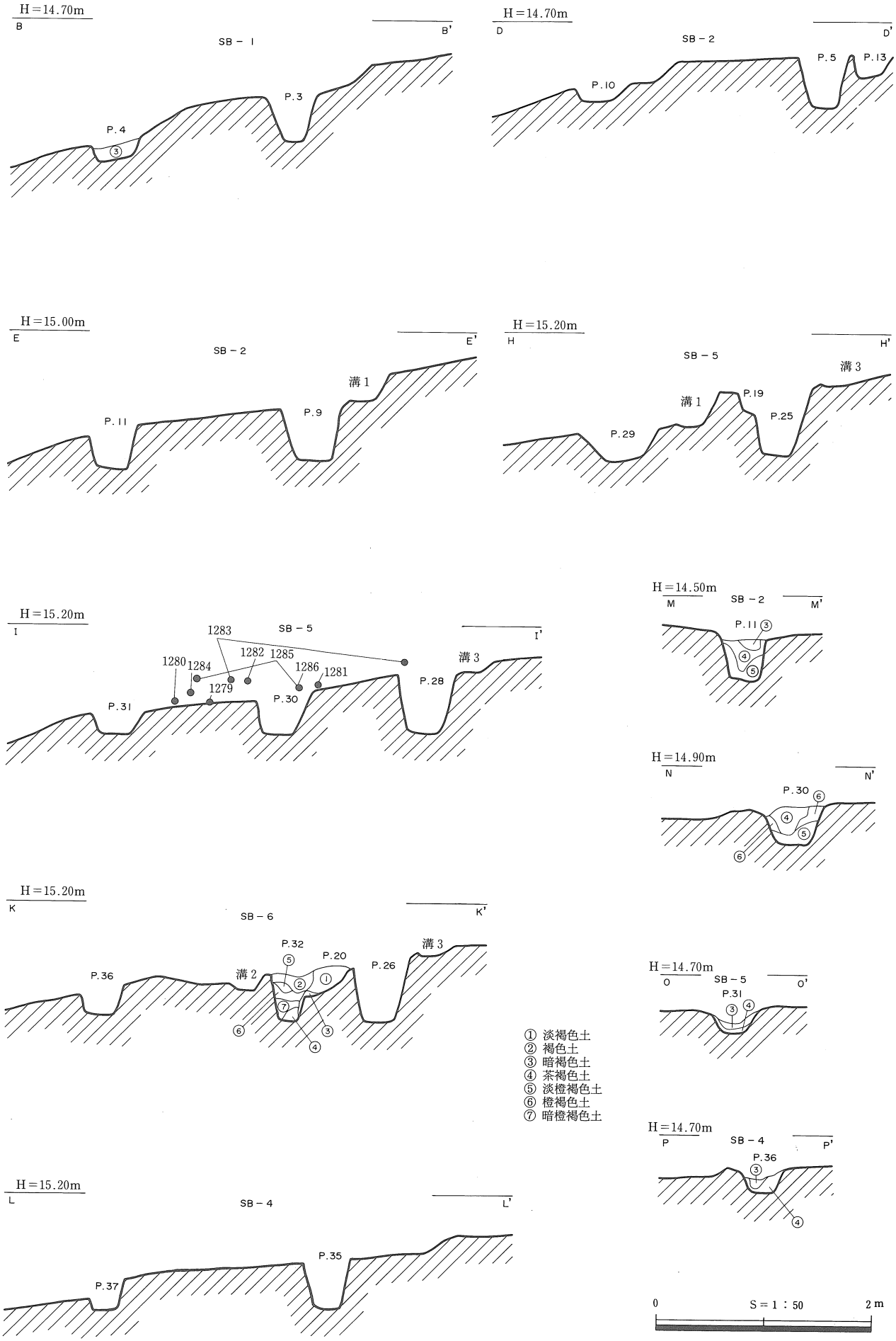
### ２　古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構（第334～359図・写真図版68～70）

テラス状遺構とは、山の斜面を断面「Ｌ」字に削平、平坦面を造成したと思われるものを基本とし、地山を検出面とした。調査は表土除去中から斜面に不自然な傾斜変化点を探し、ベルトおよびトレンチを設定、掘り下げ、検出という手順で進めていった。検出したテラス状遺構には平坦面に多数のピットが検出でき、掘立柱建物や竪穴住居などを構築していたと考えられ、構築物によっては、排水用と考えられる溝を伴うものもみられた。また遺構内の柱穴の中には、深さが非常に浅いものも多く、客土を用いて平坦面を造成したと考えられる。

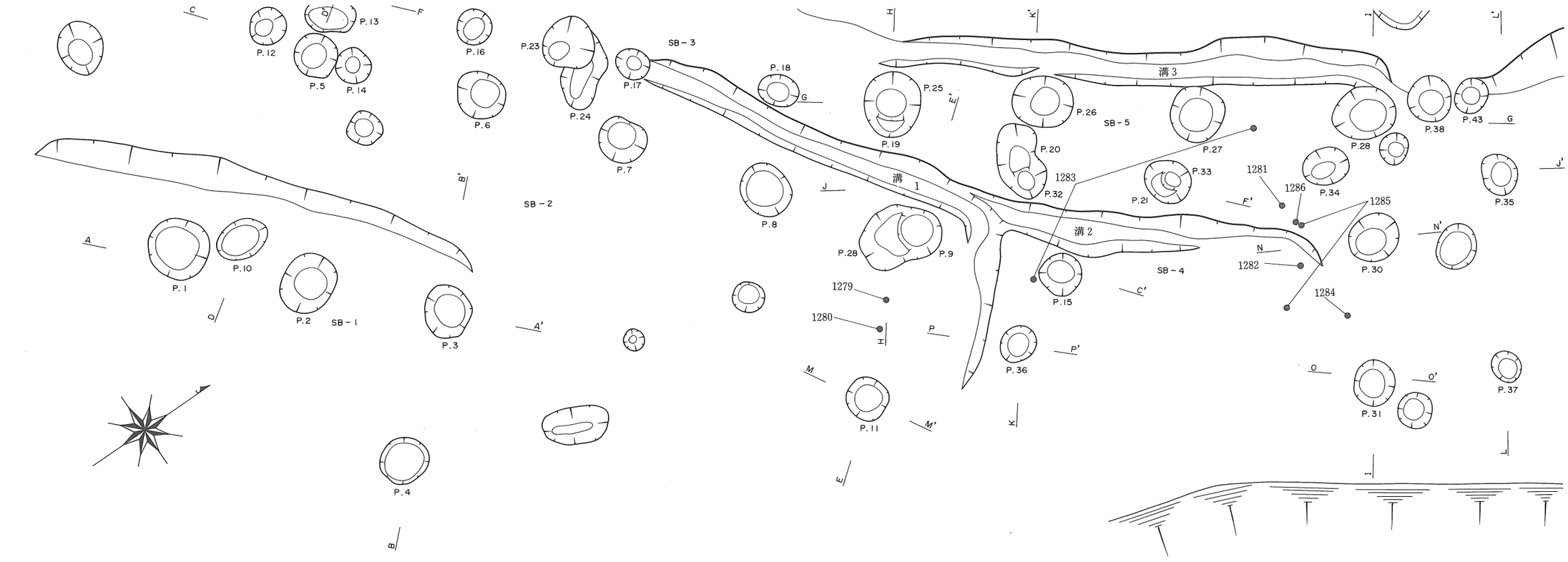
本調査地においてテラス状遺構が立地する斜面はかなり急峻で、ＳＳ－６を除き地山のいたるところに固い岩質の陰田流紋岩（註２）が露出している。施設建設に適地とは言い難い。

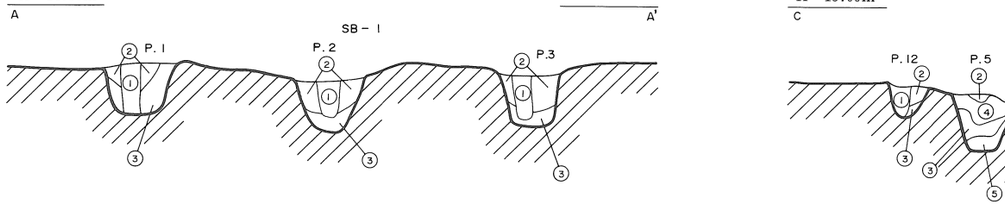
**・ＳＳ－１およびＳＳ－０**（第334～336図・写真図版68、92）

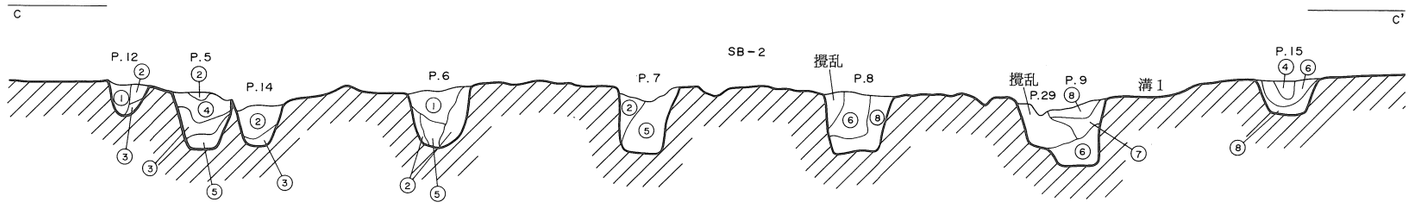
ＳＳ－１はＳＳ－２の上方、標高約19ｍで隣接している。調査地内では比較的なだらかな斜面に位置し、南北約４ｍ、東西約10ｍを測る。当遺構の中央東より東側は灰色の岩盤、西側は橙茶褐色土の地山で、残存している壁は東隅が最も高く、約１ｍを測る。岩盤部分と壁面に近い地山部分が遺存していると見られ、遺構内に逆「Ｌ」字状に並んだＰ．１～７からなる掘立柱建物跡１棟を検出、Ｐ．１～５の壁面側に溝を検出した。溝は長さ約10ｍ、幅50㎝前後、深さ約15㎝を測る。この掘立柱建物は、壁面の溝がＰ．１～５を囲うように「コ」字状を呈していることから、桁行は４間であることがわかる。梁行は２間を確認したが、南側が流失しているため２間以上になる可能性もある。Ｐ．１～４のそれぞれに対応する柱列は検出できなかった。柱穴は径50㎝前後、深さ40㎝前後を測り、埋土は橙褐色系の土で、柱穴内に遺物は見られなかった。

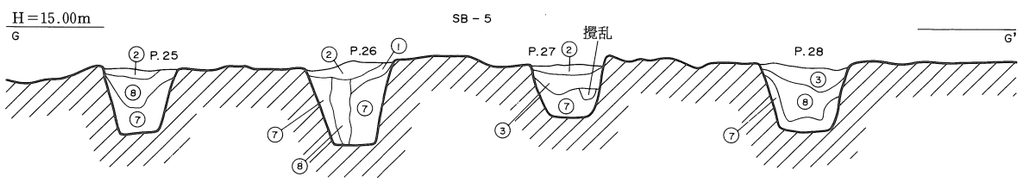


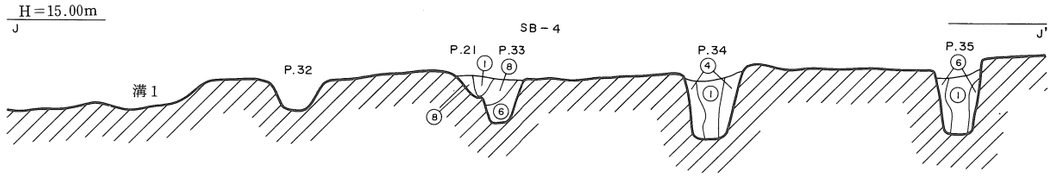

第338図　ＳＳ－２断面実測図

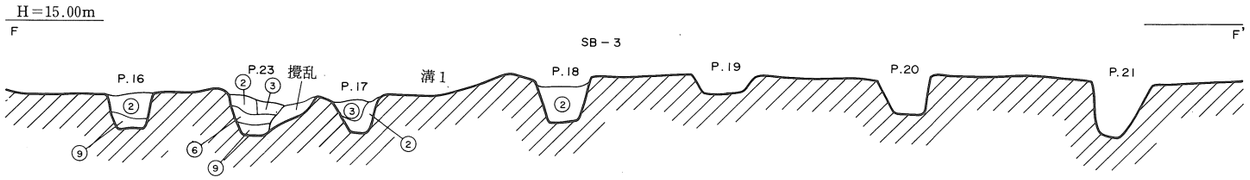


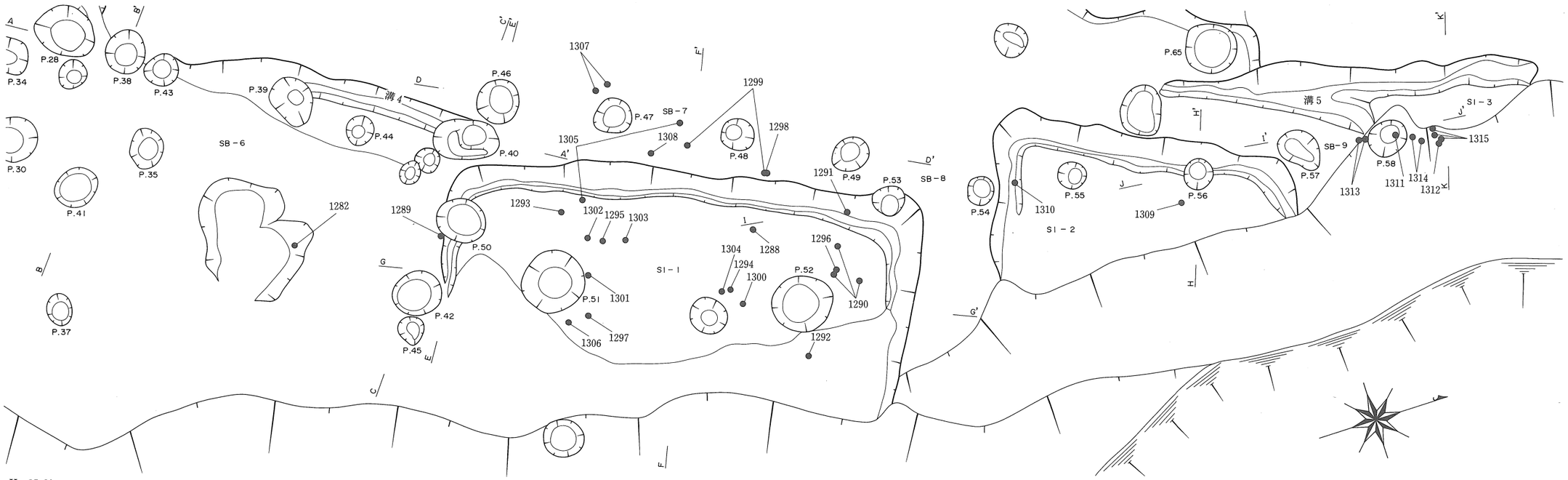



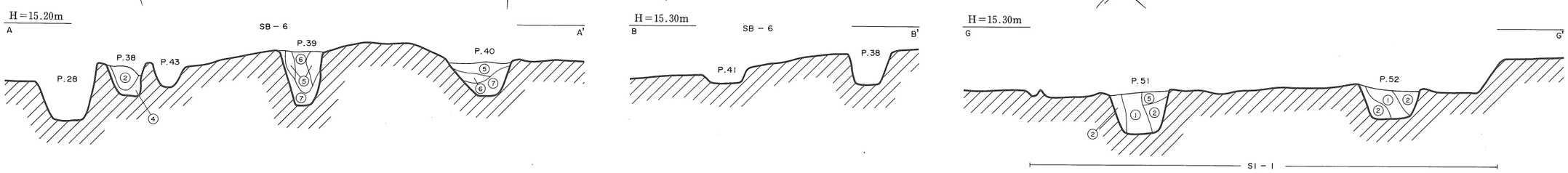



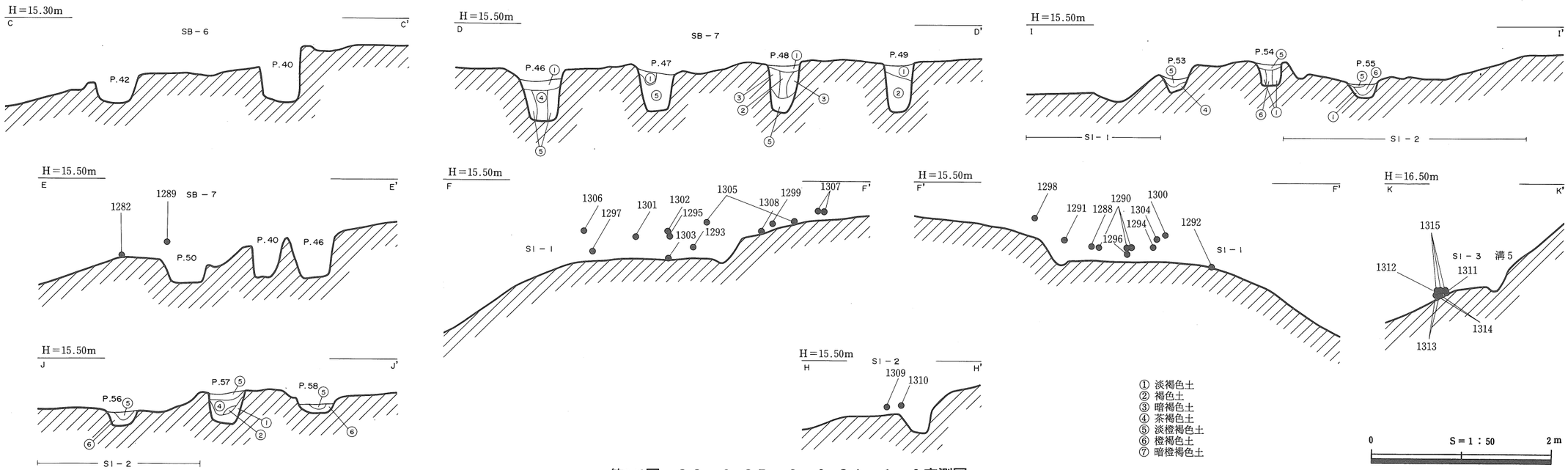

① 淡橙褐色土
② 橙褐色土
③ 橙褐色土（2層より暗い）
④ 暗橙褐色土
⑤ 暗橙褐色土（炭化物混）
⑥ 暗橙褐色土（炭化物混・5層より暗い）
⑦ 淡橙灰褐色土
⑧ 灰褐色土
⑨ 暗灰褐色土

0　S＝1：50　2m

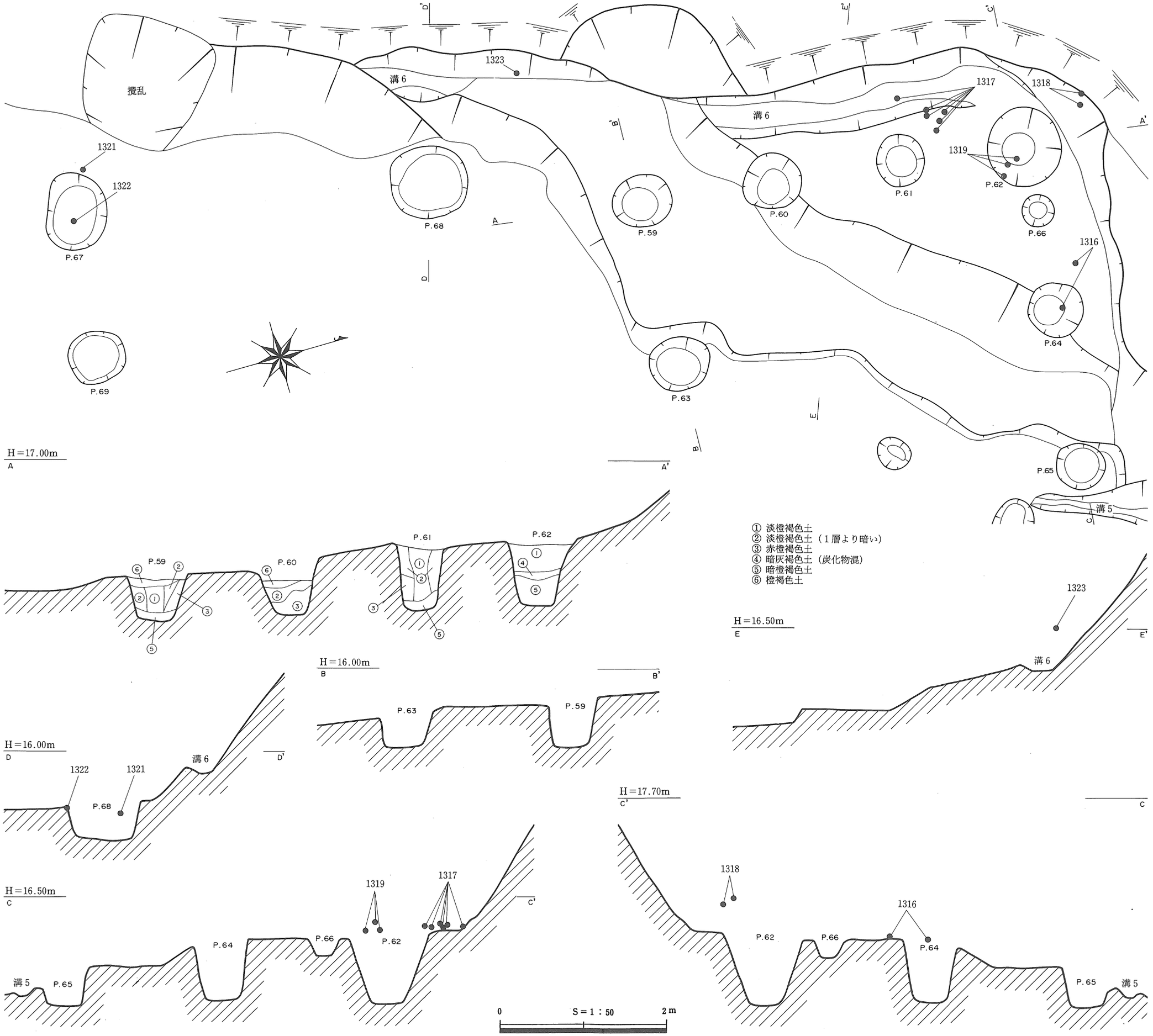
第339図　ＳＳ－2・ＳＢ－1～5実測図



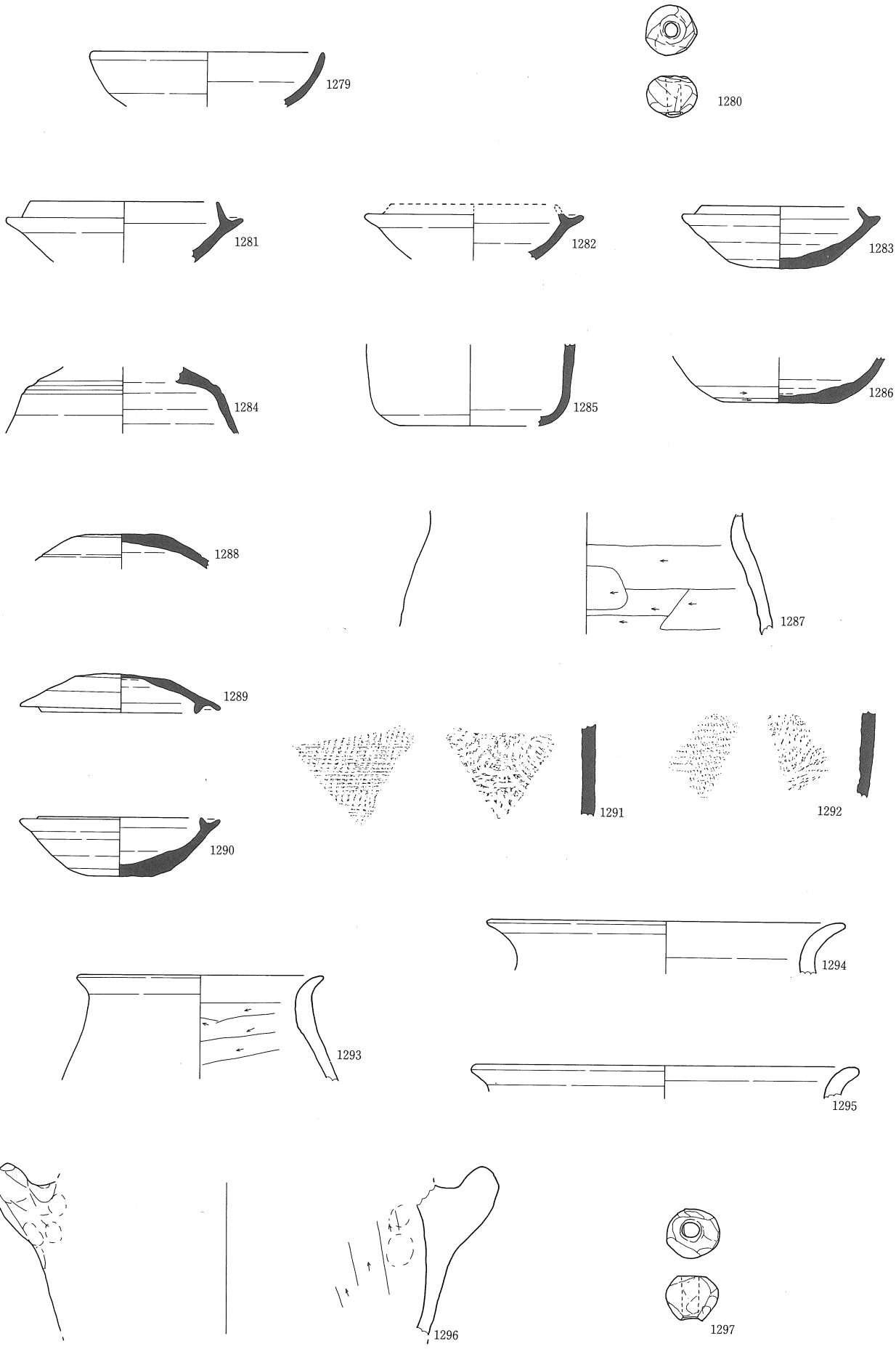



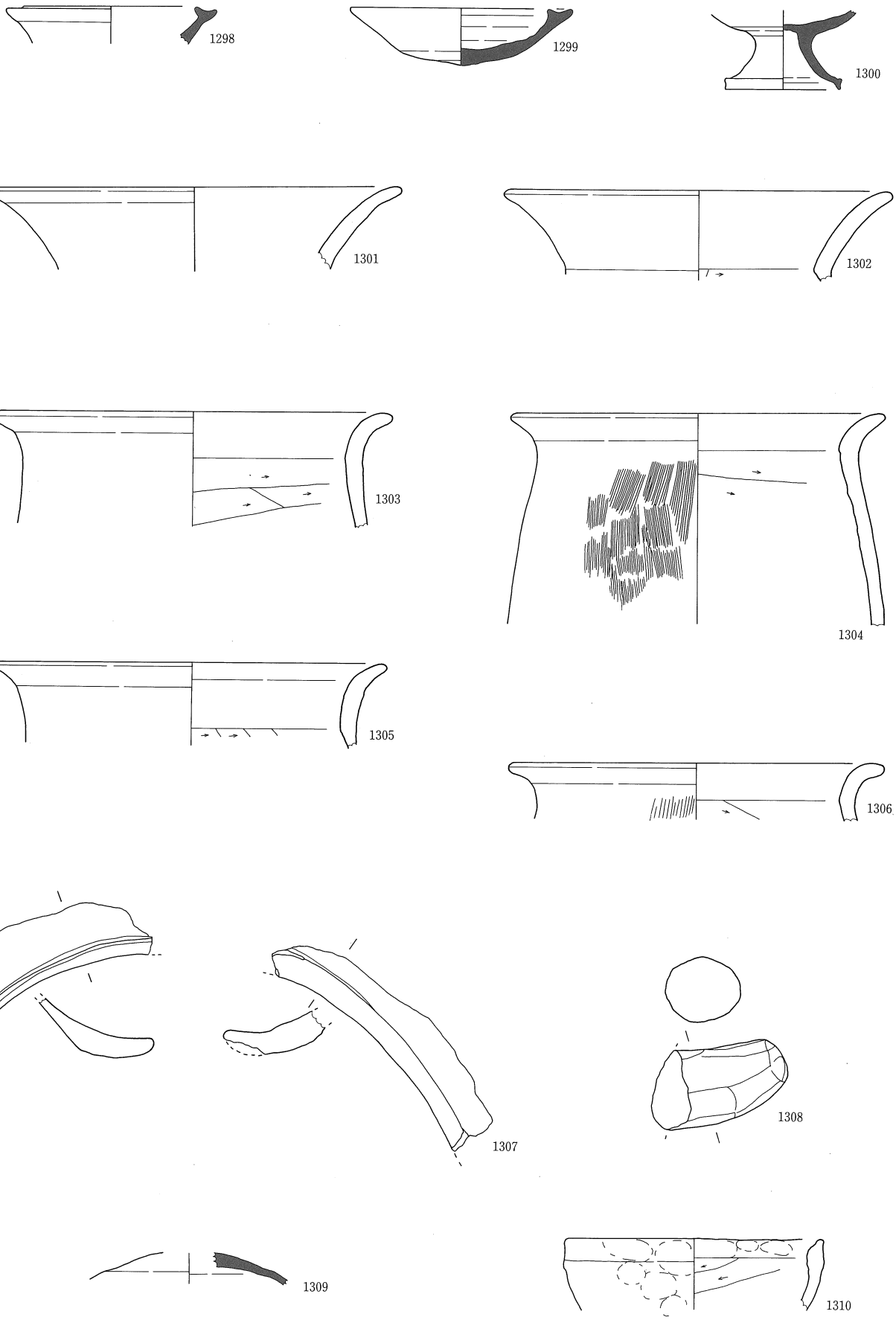

第340図　ＳＳ－２・ＳＢ－６～９・ＳＩ－１～３実測図



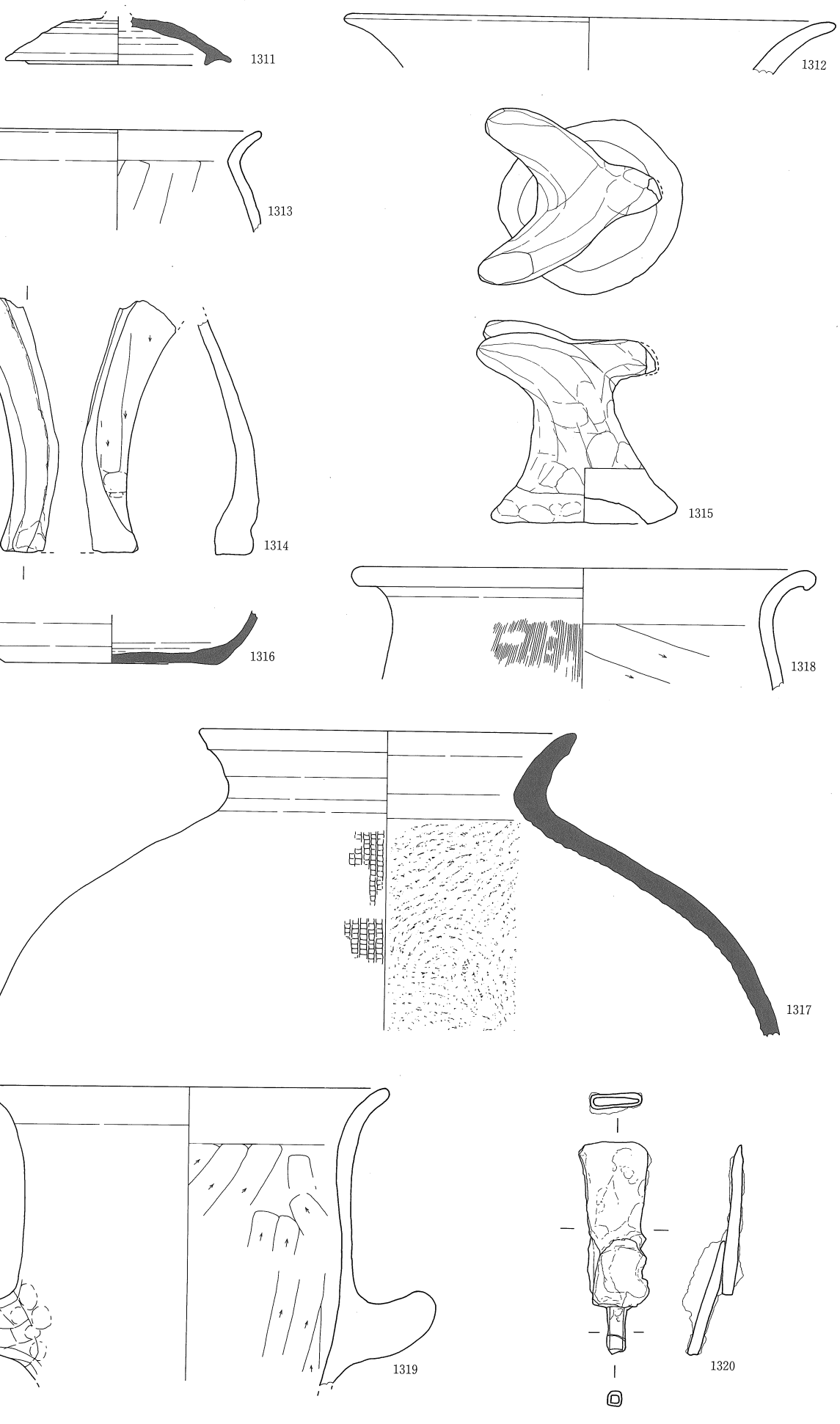

第341図　ＳＳ－2・ＳＢ－10実測図



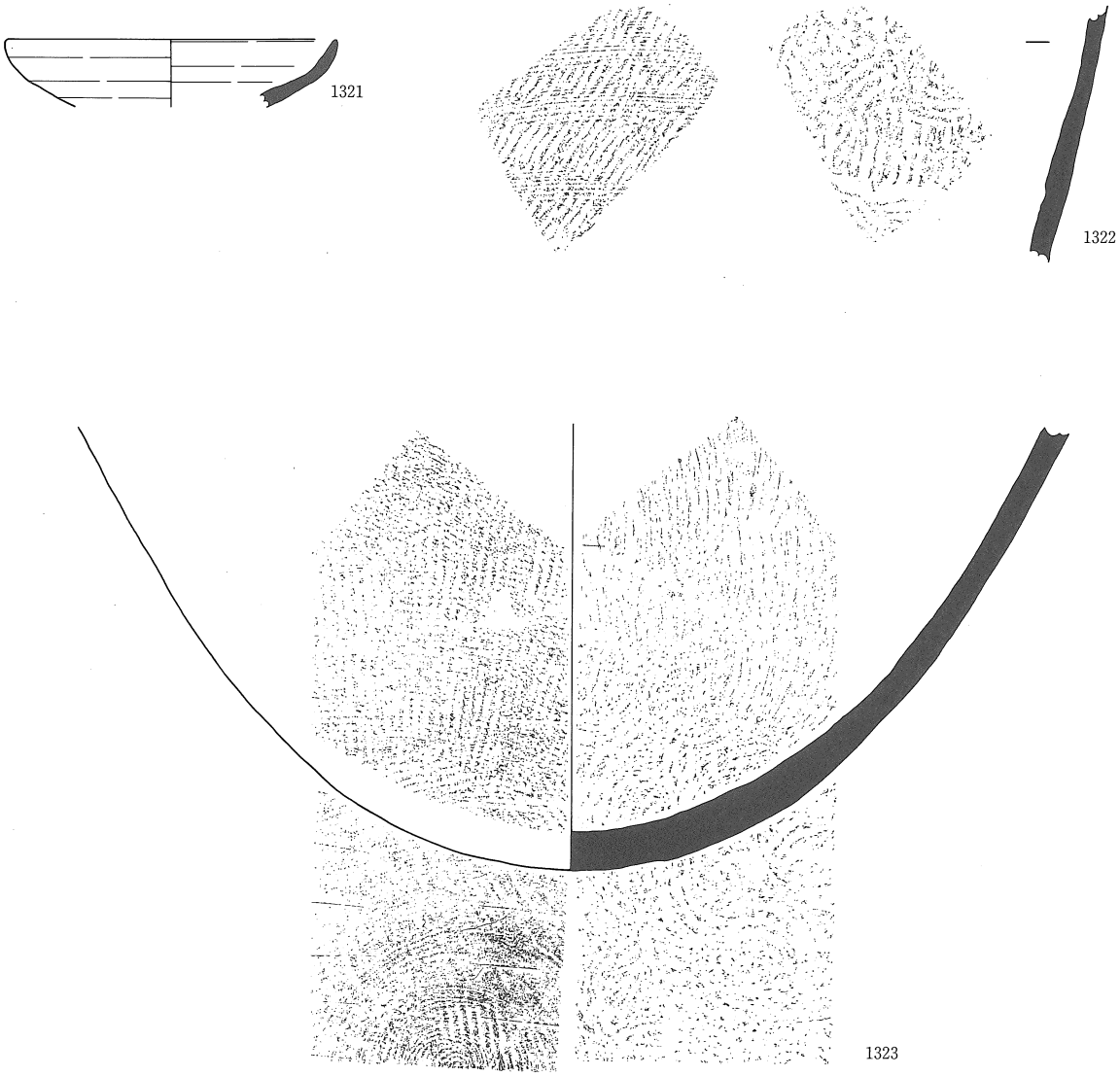

第342図　ＳＳ－２出土遺物実測図(1)



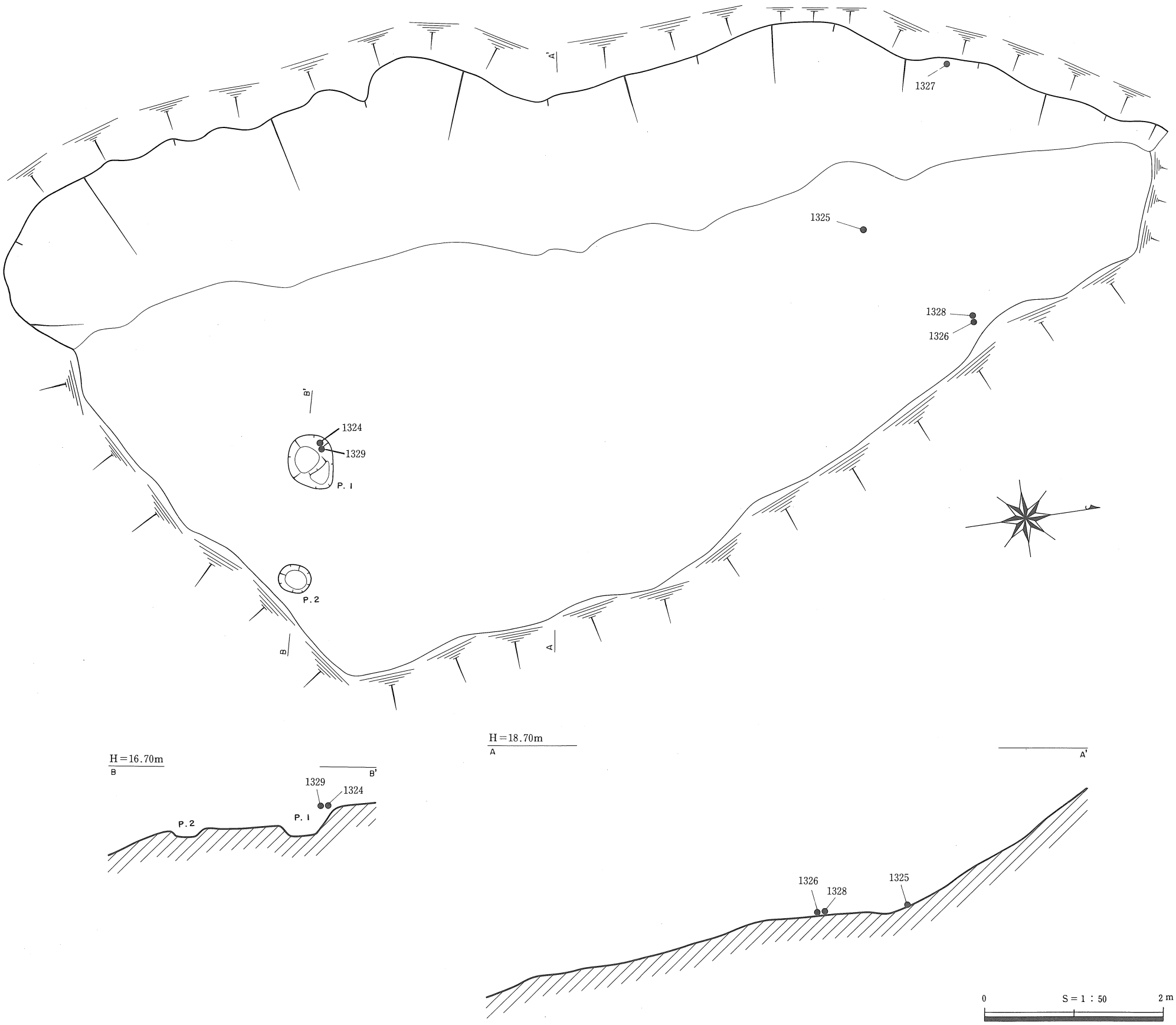

第343図　ＳＳ－２出土遺物実測図(2)



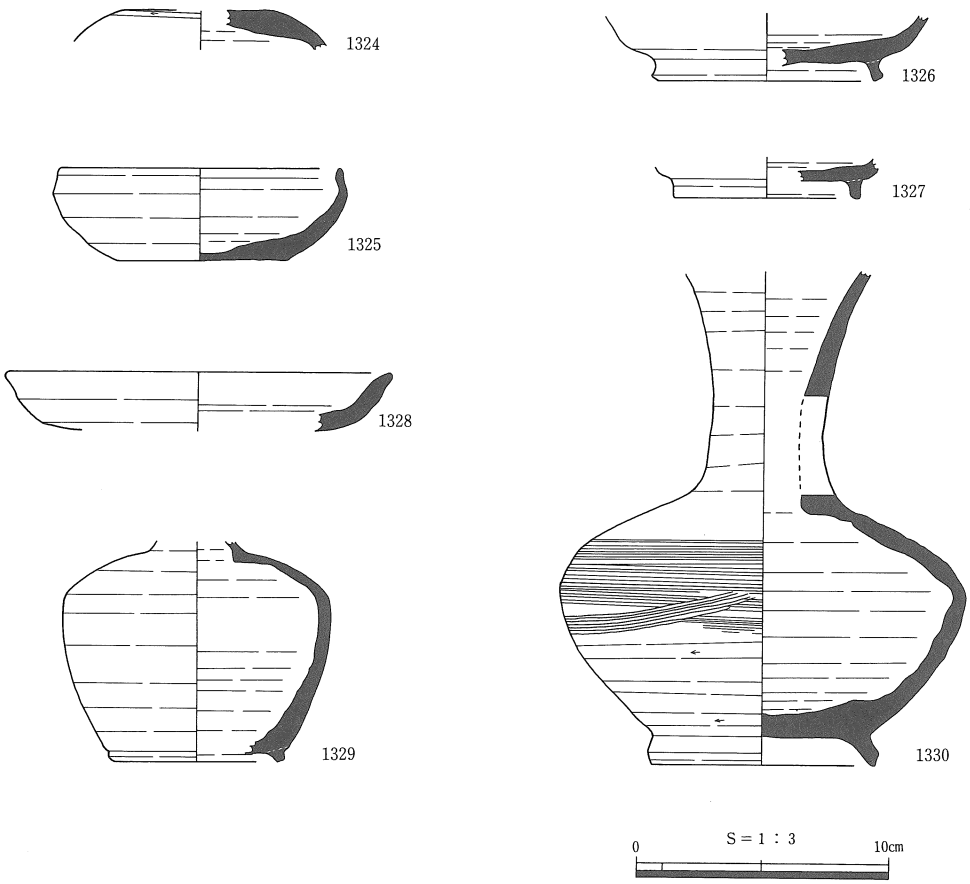

第344図　ＳＳ－２出土遺物実測図(3)




第345図　ＳＳ－２出土遺物実測図(4)




第346図　ＳＳ－３実測図




第347図　ＳＳ－３出土遺物実測図

ＳＳ－１に伴う出土遺物は須恵器1251～1259、土師器1260～1262がある。1251～1253は高台の付く坏身、1254は無台の坏身、1255は椀である。1251～1253は底部糸切り後ナデ消している。1256～1258は壷の肩部および底部、1259は円面硯である。1260～1262は甕である。このうち、1252と1257は床直上遺物である。その他の遺物は、埋土中からの出土であるが、壁面際での出土であるため、ＳＳ－１埋没の時期を示しているものと考える。1251～1253は、８世紀の前葉～中葉に比定される（註３）。

ＳＳ－１の南側は流出しており、縁辺部に向かってなだらかに下る段状になっている。ここには、上方からの流入土が堆積しており、須恵器坏蓋1263、1264、坏身1265、甕1267、土錘1268、1269、円柱状土製品1270、鞴の羽口1271、1272が混入していた。また出土遺物の中には、椀形鍛冶滓1273～1278を含め、総量約6.6kgが出土しており、中でも80×40－10cm、約4.4kgの再結合滓中に、計356.5ｇの鍛造剝片と計3.8ｇの粒状滓（写真図版92）が含まれていた。これら遺物は、ＳＳ－１の上方に鍛冶遺構の存在を示すものであり、ＳＳ－１の上方には、過去に地滑りのおきた形跡が見られることから、ＳＳ－１上方に位置していた遺構（ＳＳ－０）が、テラスごと流出した可能性を考える。1265によれば、底部糸切り後ナデ調整しており、７世紀末～８世紀初頭に比定される（註４）。このことからＳＳ－０の操業はこの前後と考える。　また、椀形鍛冶滓や再結合滓、鞴の羽口の出土は、鍛冶の操業を示唆するものである。これらは流れ込みの遺物であるため鍛冶操業の様相を明らかにすることはできないが、出土した滓の量から、単発的な鍛冶ではなく、長期にわたって操業されていた可能性が高いと考える（註５）。

また出土した鉄滓の中から６点抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いした。出土量は少ないものの、製

錬滓と判断され、製鉄操業を行っていた可能性も考えられる。

・ＳＳ－２（第337～345図・写真図版68、92）

ＳＳ－２は標高約14～15mに位置する。調査前にその存在を確認できたテラス状遺構であり、調査前の地形でも半月状の平坦面を確認できた。表土は非常に薄く、特に北側の壁面部では黒褐色の腐葉土を除去すると灰色の岩盤が露出するほどであった。

検出にあたり、東西方向に土層観察用のベルトを５本設定し、掘り下げを行った。壁面部北側はＳＳ－１から続く淡灰色の板状節理が垂直方向に走り、赤灰褐色の岩脈を挟んで南側は茶褐色系の地山である。

検出したＳＳ－２の規模は、東西約10m、南北約40mを測り、同時期のテラス状遺構の中で最も広い床面をもつ。また、壁面の高さは最大約３mを測り、遺構内に掘立柱建物跡10棟、竪穴住居跡３棟を検出した。掘立柱建物跡は柱穴が、「Ｌ」または「コ」字状に並ぶ柱穴を検出した。ＳＳ－２は、幾度かのテラスの拡張後、構築物の建て替えを行っていたようで、出土遺物からもその様子が窺える。出土遺物より７世紀前葉から中葉にかけて連続的に構築されたと考えられ、拡張は壁面を掘削しながら奥へ平坦面を広げていったと考えられる。

ＳＢ－１は、ＳＳ－２の南側に位置して、柱穴は逆「Ｌ」字状に並んだＰ．１～４のみを検出し、２間×１間の掘立柱建物跡となるが、Ｐ．１、２に対応する柱穴は検出できなかった。柱穴間距離は1.5m前後を測る。柱穴の規模は径50cm前後、深さは40cm前後を測る。ＳＢ－１に伴う溝はなく、Ｐ．１～３の西側には高さ約５cmの段がついており、ＳＢ－１に伴うものと考えるが用途は不明である。ＳＢ－１に伴う遺物はなく、時期を特定することはできないが、周囲の状況よりＳＢ－２構築以前と考える。

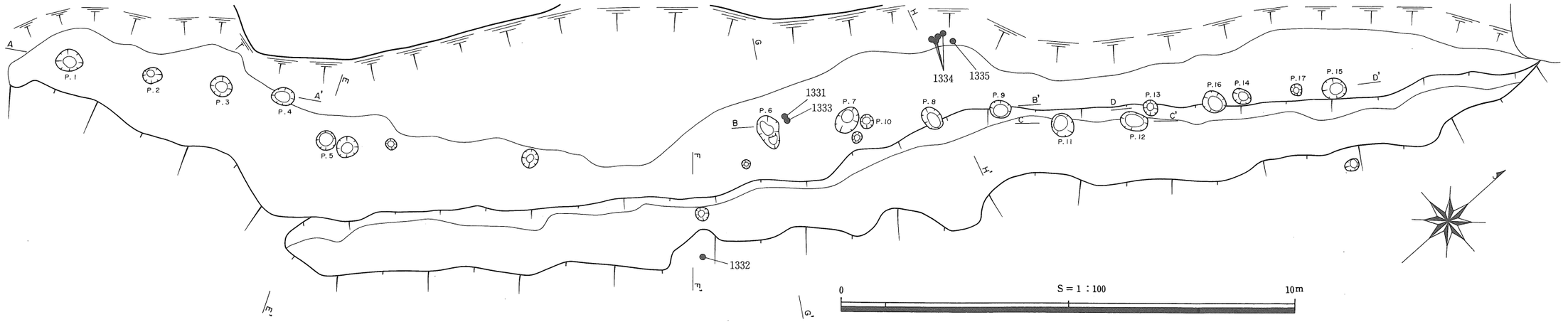
ＳＢ－２はＳＢ－１の北側に位置し、平坦面にＰ．５～11が「コ」字状に並び、掘立柱建物の構築が考えられる。柱穴の規模は径50cm前後、深さ50cm前後を測りる。柱穴間距離は1.8m前後である。ＳＢ－２は溝を伴っており、Ｐ．７の壁面側からＰ．11の北側まで建物を囲うように逆「Ｌ」字状に走る。この溝の規模は長さ約６m、幅約40cm、深さ20cmを測る。溝より壁面側は一段高くなっているが、南側で徐々に低くなり、溝は消える。出土遺物は須恵器坏身1279、土錘1280が埋土中より出土した。Ｐ．６～８に対応するピットが見られないため、ＳＢ－２は４間×２間以上であったと考える。

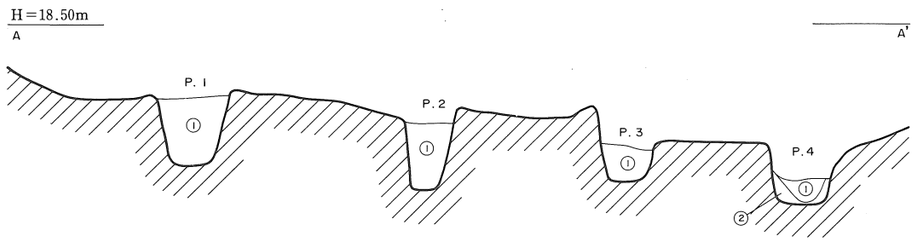
ＳＢ－３はＳＢ－２の西に位置する。付近にはいくつものピットが存在するが、Ｐ．16～21が約1.5m間隔で一直線に並ぶ。柱穴の規模は径40cm前後、深さ40cm前後を測り、岩盤にしっかりとした深さで穿ってある。遺構内に時期を示す遺物は検出されなかった。ＳＢ－３は梁行５間をもつ掘立柱建物跡であると考えるが、これらに対する柱穴は周囲に存在せず、またＰ．16～21の規模も比較的小さいことから柵列の可能性も考えられる。

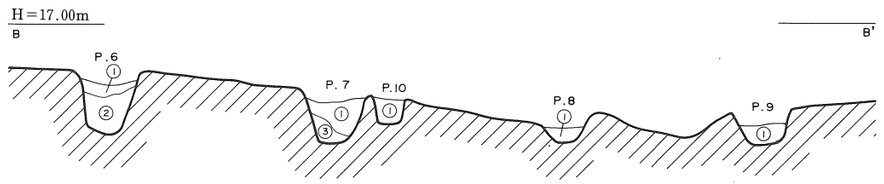
ＳＢ－４、５は、それぞれＰ．32～37、Ｐ．25～31で構成される掘立柱建物跡である。ＳＢ－４の桁行は、３間であるが、Ｐ．33、34に対応する柱穴が見られないため、梁行は２間以上となる可能性がある。柱穴は径40cm前後、深さ50cm前後を測り、Ｐ．34、35で淡橙褐色の柱痕を見ることができた。柱穴間距離は２m前後を測る。ＳＢ－５の柱穴は径50cm前後、深さ50cm前後、柱穴間距離は1.7m前後を測り、Ｐ．26には灰褐色の柱痕を見ることができた。またＳＢ－５は壁面側に溝を伴っており、長さ約5.5m、幅約50cm、深さ約20cmを測る。ＳＢ－４、５に伴う遺物は須恵器1281～1286を検出した。1281～1283は立ち上がりの有る坏身、1284は台付椀の脚台部、1285は椀、1286は壷底部である。このうち1281はＳＢ－４に、1283はＳＢ－５に伴うものであり、いずれも陰田編年（註６）の５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。

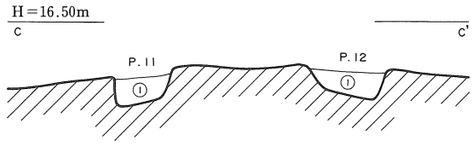
ＳＢ－６はＳＩ－１の南側に位置する。周囲には多数のピットを有するがＰ．38～42からなる掘立柱建物跡であると考える。柱穴は径50cm前後、深さ60cm、柱穴間距離は２m前後を測る。ＳＢ－６に伴う遺物として土師器甕1287、かえりをもつ須恵器蓋1289がある。それぞれ縁辺部または埋土中の出土である。

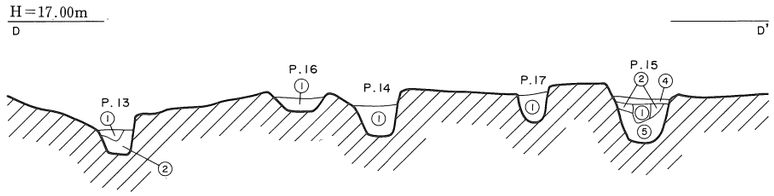
ＳＢ－７はＳＩ－１の西側に検出したＰ．46～50からなる掘立柱建物跡である。柱穴は径50cm前後、深さ60cm前後を測り、柱穴間距離は1.3mを測る。現状で３間×１間であるが、東側が流失しているため梁行が１間以上であると考える。ＳＢ－７に伴う遺物は、須恵器甕1291、立ち上がりをもつ坏1298、1299、高坏1300、土師器甕1295、1301、1302、1304～1306、竈1307、把手1308である。陰田編年の７式（７世紀中葉）を示しており、遺構



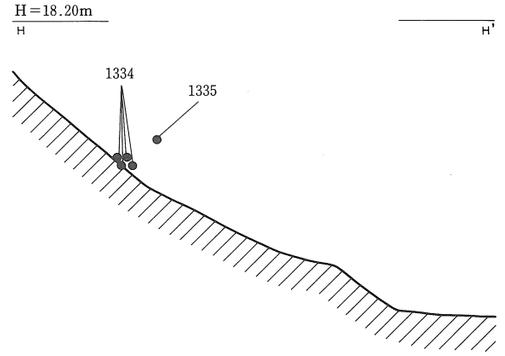



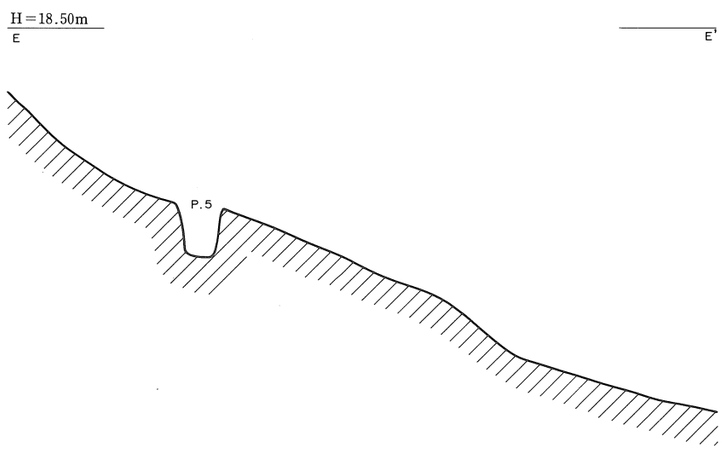



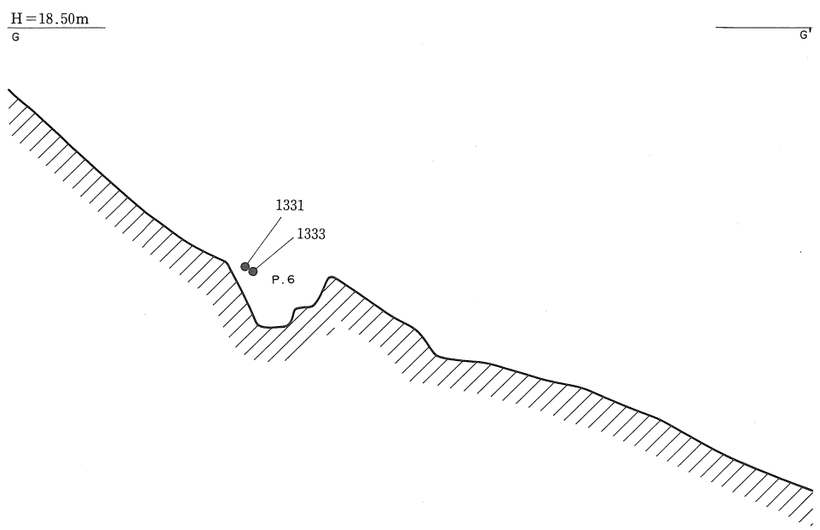



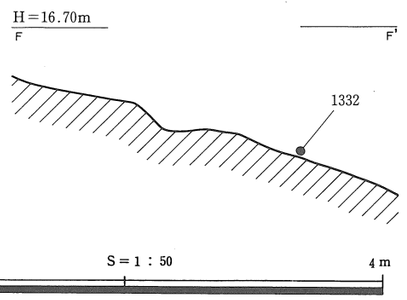




① 淡橙灰褐色土
② 橙灰褐色土
③ 灰褐色土
④ 淡灰褐色土
⑤ 橙灰褐色土（灰色ブロック混）

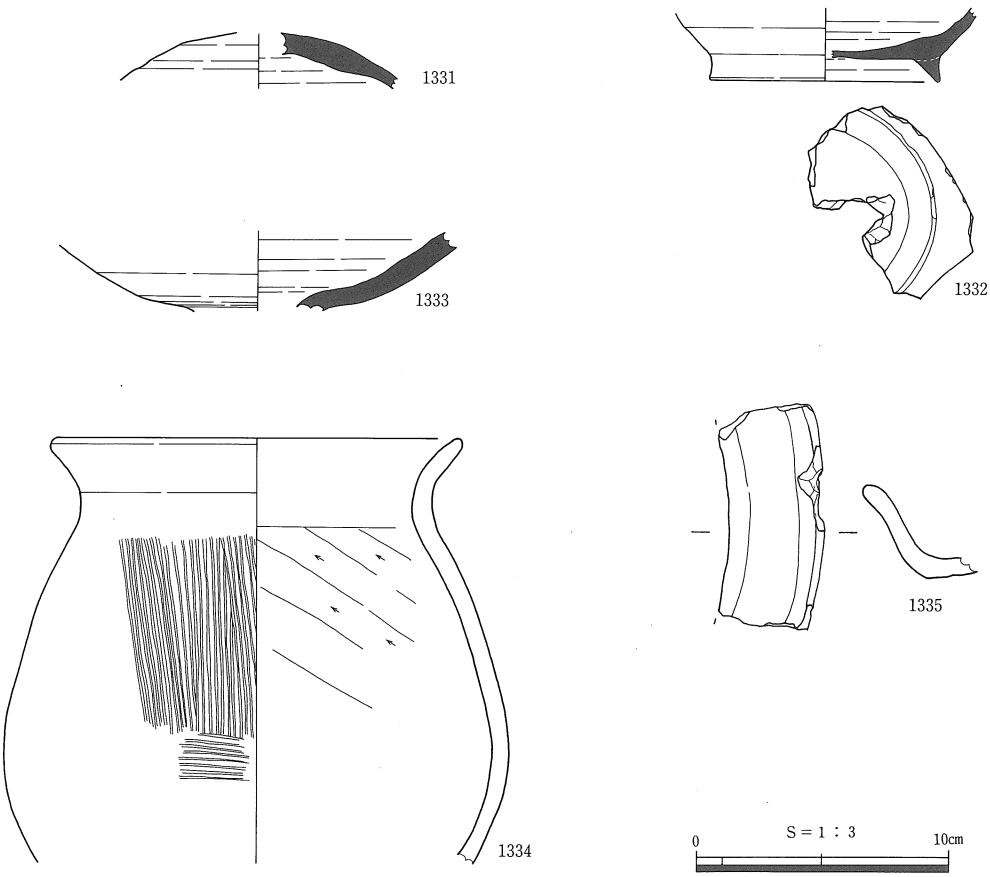



第348図　ＳＳ－４実測図



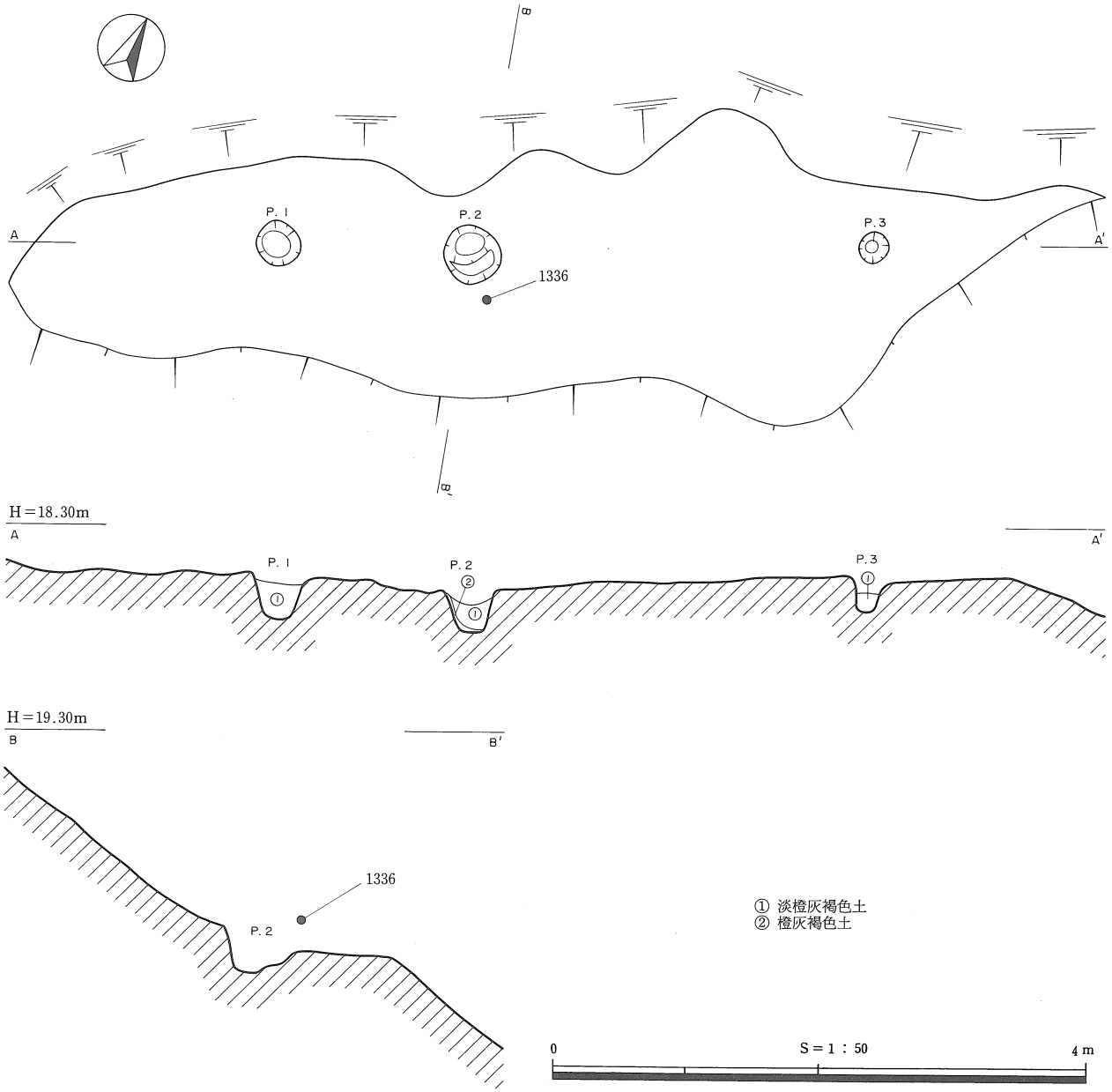

第349図　ＳＳ－４出土遺物実測図

の時期もこのころの構築と考える。

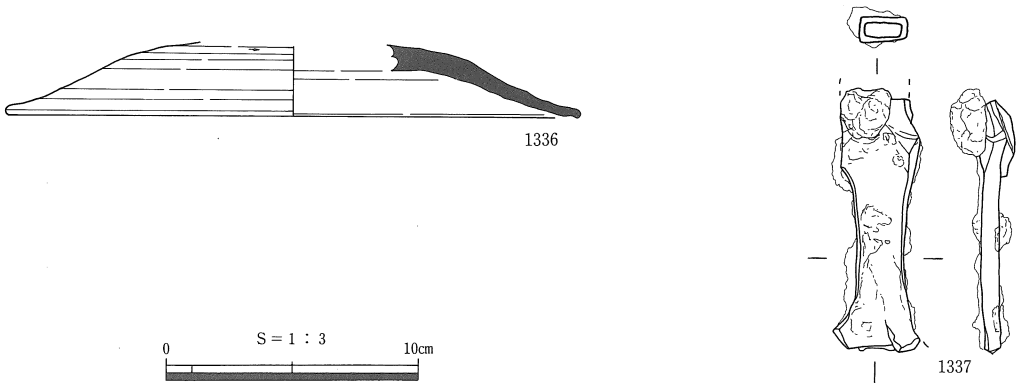
ＳＢ－８、９は、それぞれＰ．53～55、Ｐ．56～59からなる掘立柱建物跡と考える。柱穴は径30cm前後、深さ40cm前後、柱穴間距離は１ｍ前後を測る。両者とも、対応する柱穴が検出されなかったこと、他の掘立柱建物跡と比べて柱穴が小さく、柱穴間距離が短いことから、柵列の可能性も考えられる。出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、Ｐ．53はＳＩ－１完掘後に検出されたことからＳＩ－１構築以前のものと考える。

ＳＢ－10はＳＳ－２の中でも最終段階の掘立柱建物跡であると考える。ＳＢ－10構築以前のＳＳ－２は、ＳＢ－３～９の柱穴を結ぶ奥行き約８ｍのテラス状遺構であったと考える。その後北側の壁面を大きく削り取り、ＳＢ－10を構築したものと考える。ＳＢ－10はＰ．59～65からなり、Ｐ．59～61に対応する柱穴を検出できなかったが、３間×２間以上の掘立柱建物跡と考える。柱穴は径70cm前後、深さ80cm前後を測る。このＳＢ－10は、壁面側に溝を持ち、Ｐ．59付近で流失しているが、Ｐ．68の壁面側まで続いている。またＳＢ－10の南側は平坦面が広がっており、Ｐ．67～69を検出したが、掘立柱建物跡となるように柱穴を検出することはできなかった。このＰ．67～69周辺の岩盤は非常に硬い岩脈であり、削平し柱穴３個を穿ったものの、この場での掘立柱建物の構築をあきらめ、北側を削平、ＳＢ－10を構築したものと考える。

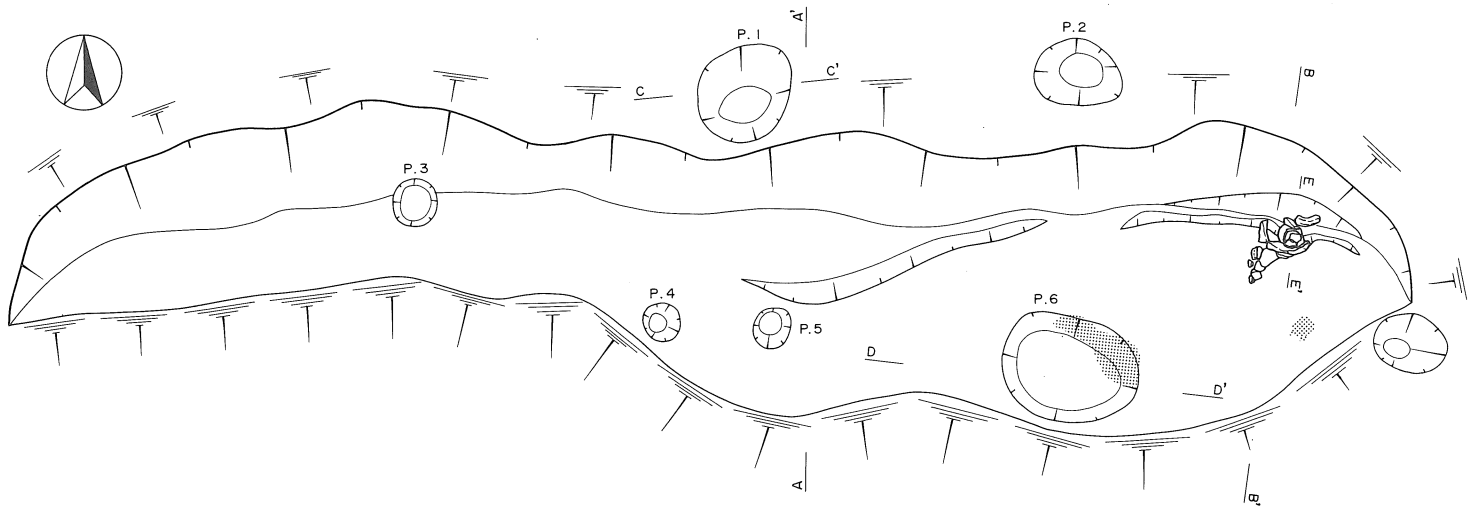
出土遺物は須恵器1316、1317、1321～1323、土師器甕1318、甑1319、鉄鏃1320がある。1316は壷、1317、1322、1323は甕、1321は高坏である。1320は２個体が錆着したものである。1318、1323を除き、ほぼ床面直上遺物である。

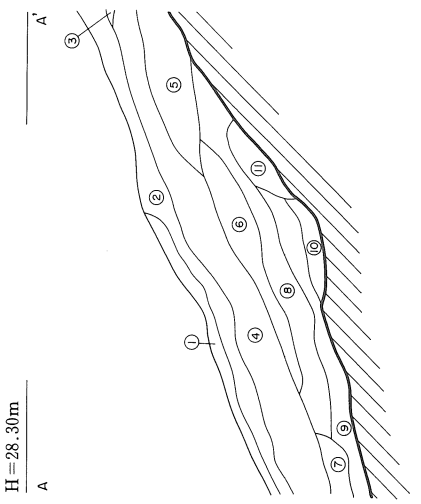


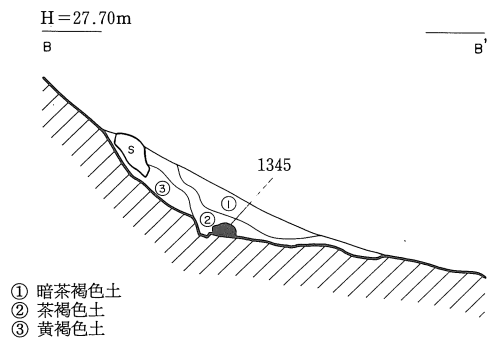

第350図　ＳＳ－５実測図

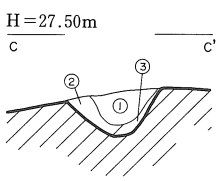


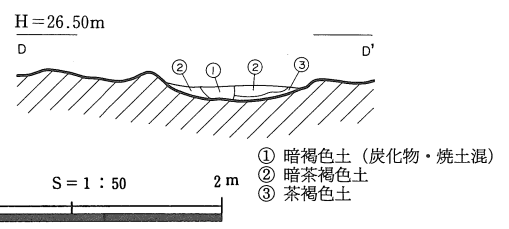

第351図　ＳＳ－５出土遺物実測図

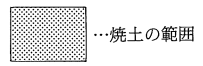


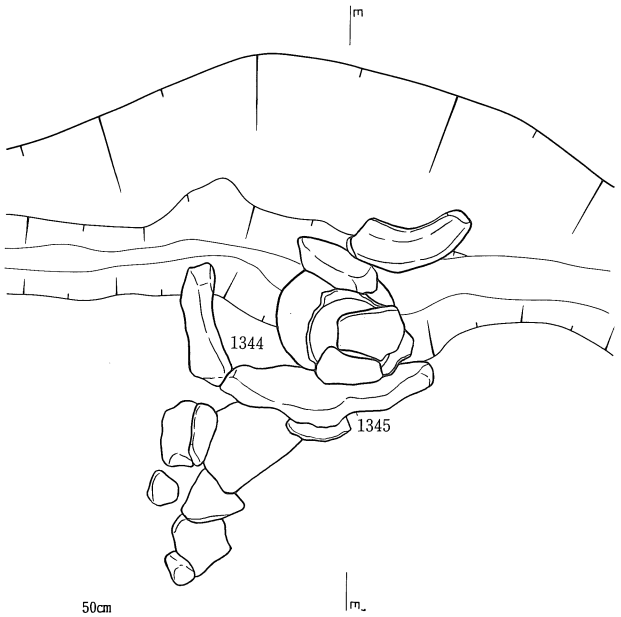



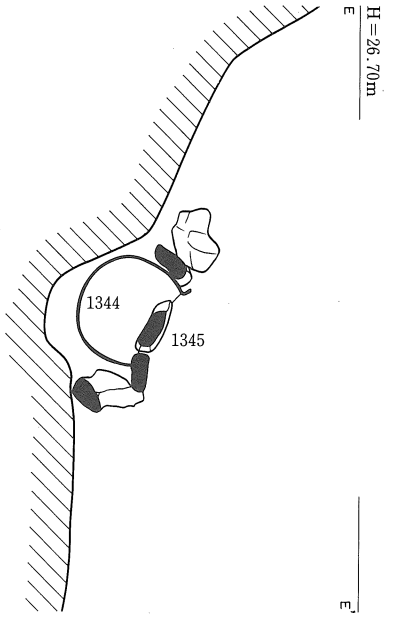



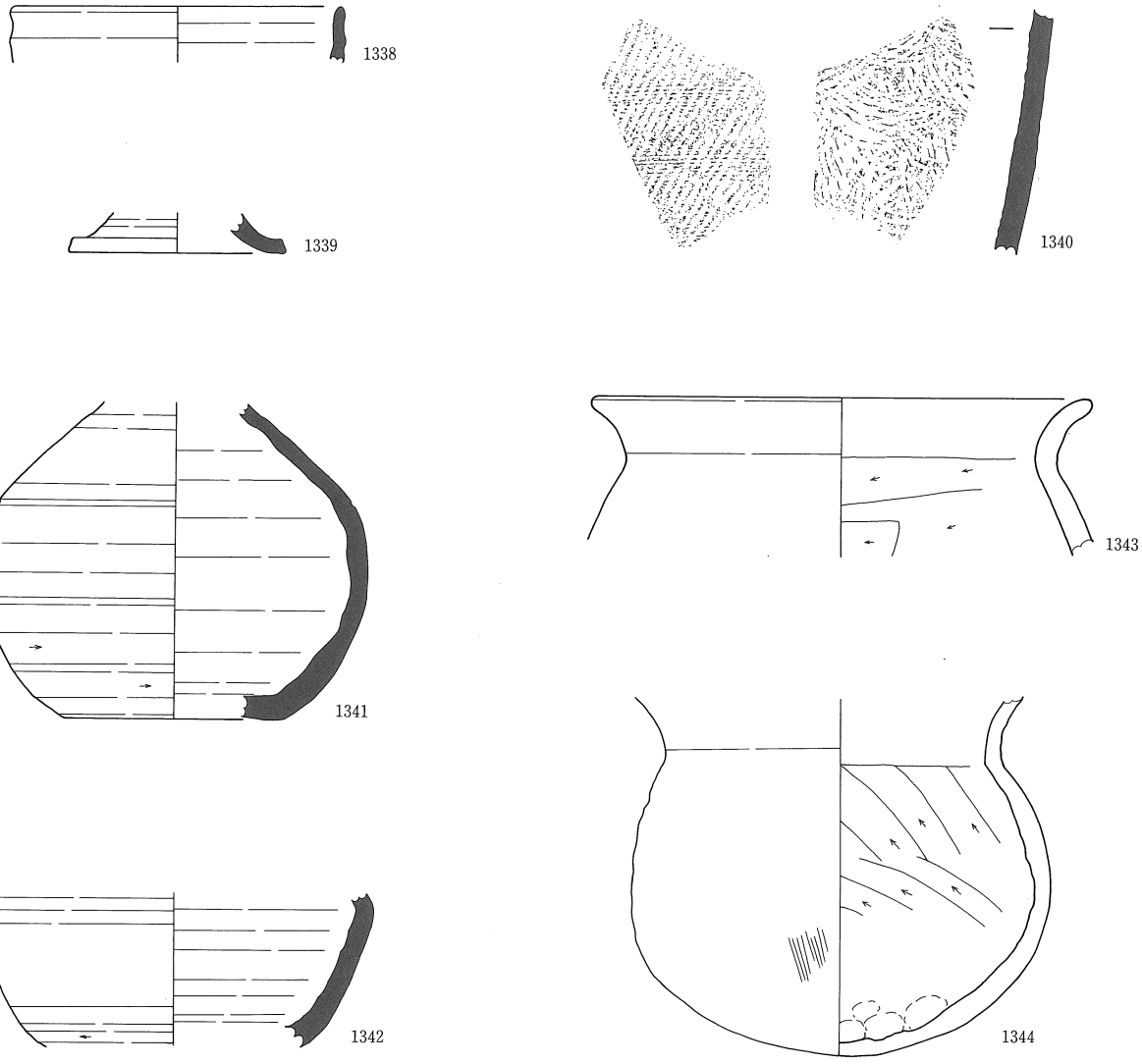



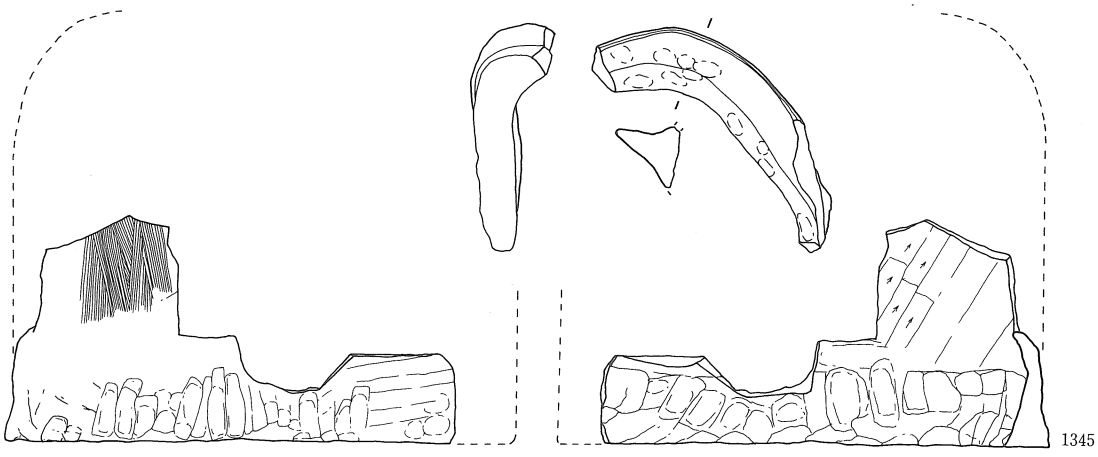



第352図　ＳＳ－６実測図




第353図　ＳＳ－６出土遺物実測図

ＳＩ－１はＳＢ－７の東側に位置する方形の竪穴住居跡である。東側を流失しており、残存する規模は東西約３m、南北約５mを測り、床面の周囲に幅約10cm、深さ約５cmの溝をもつ。柱穴はＰ．51、52を検出し、柱穴間距離は約３mを測る。４本柱と考えるが、東側は流失のため遺存していなかった。出土遺物は須恵器坏蓋1288、坏身1290、甕1292、土師器甕1293、1294、1303、甑1296、土錘1297である。1290は陰田編年の７式（７世紀中葉）に比定される。土層の断面観察よりＳＩ－１廃絶後、ＳＢ－７を構築したものと考える。

ＳＩ－２はＳＩ－１の北側で検出した竪穴住居跡である。東側が流失しており、東西約1.5m、南北約３mを測る。壁面に側溝がめぐり、ややいびつな隅丸方形の竪穴住居であったと考える。柱穴となるピットは検出されなかった。出土遺物は須恵器坏蓋1309、土師器椀1310がある。ＳＩ－２の埋土は単層で、ＳＩ－１の埋土の第１層と同じものであったため、ＳＩ－１廃絶後の構築と考える。

ＳＩ－３は、ＳＳ－２の北側に位置している。縁辺部の崩落が激しく、西側の側溝のみを検出した。側溝は長さ約４m、幅約40cm、深さ約５cmを測り、硬い岩盤にしっかりと穿ってある。遺物はつまみをもつ須恵器坏蓋1311、土師器甕1312、1313、竈1314、支脚1315がほぼ床直上で出土しており、遺構の時期を特定できるものと考える。1311は、陰田編年の７～８式（７世紀中葉～後葉）に比定される。

ＳＳ－２では、計約１kgの鉄滓が出土している。いずれも遺構南西部、ＳＳ－１直下の埋土中から出土しており、上方に位置していたＳＳ－０からの流れ込みと判断する。このうち２点を抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いし、製錬滓と判断された。

・ＳＳ－３～５（第346～351図・写真図版68、93）

ＳＳ－３～５は、調査地内で最も急峻な斜面の標高17～19mに隣接して立地する。ＳＳ－３は、北東に向かって地形が張り出し斜面が緩やかになる場所に掘り込まれたテラス状遺構で、規模は東西約4.5m、南北約12mを測り、比較的奥行きの広いテラスとなっている。残存している壁面の高さは約1.3mを測る。遺構は灰色の岩盤に立地しており、床面は凹凸が激しい。床面に２個のピットをもち、規模は径約40cm、深さ15cmを測る。遺構内に２個の柱穴間距離は、約1.4mを測るが、周囲に対応するピットがみられない。ＳＳ－３は明確に建物を構築していたピットを検出することがなく、一連のテラス状遺構とは形態が異なるように思えるが、床面は硬い岩盤であり、壁面部と縁辺部には高低差が約1.5mあることから客土を用いた可能性もある。出土遺物は、須恵器蓋1324、坏身1325、高台の付く坏身1326、1327、皿1328、水瓶1329、長頸壺1330がある。1325、1326には底部に回転糸切りが観察される。1327の調整は不明。遺物は陰田編年10式（８世紀後半）に比定される。

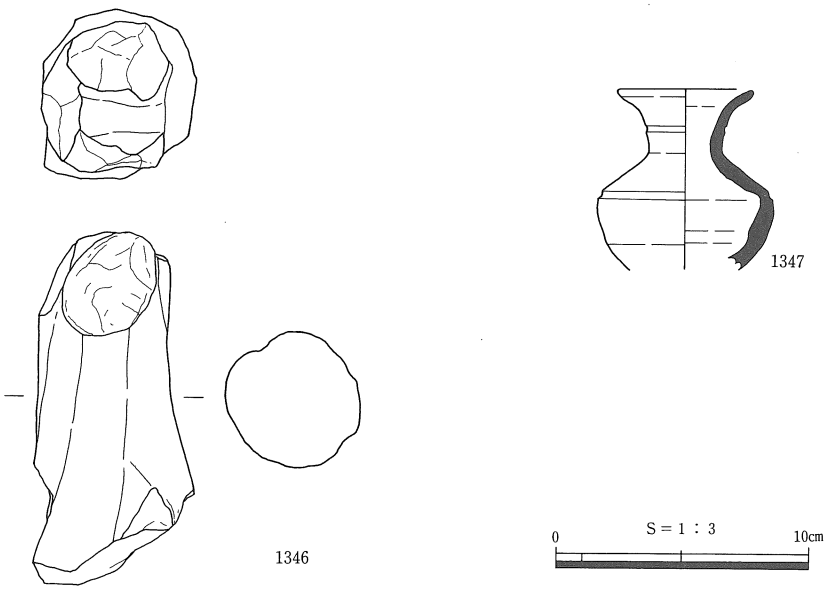
ＳＳ－４は、東西約32m、南北約６mを測る狭長な形態を呈している。犬走状の本遺構の床面は、南側で流失が激しく、壁面部と縁辺部とは高低差が１m前後を測る。遺構内に24個のピットをもち、そのうちＰ．１～４からなるＳＢ－１、Ｐ．６～９からなるＳＢ－２、Ｐ．13～15からなるＳＢ－３を検出した。いずれも対応する柱穴が流失しているが、柱穴間距離が1.8～2.0mを測り、一直線上に並ぶことから掘立柱建物跡であると考える。柱穴は径40cm前後、深さ50cm前後を測り、硬い岩盤にしっかりと穿ってある。出土遺物は須恵器蓋1331、高台の付く坏身1332、器種不明の土器1333、土師器甕1334、竈の庇1335がある。1332の底部には静止糸切りが観察される。これら遺物は陰田編年９式（７世紀末～８世紀初頭）に比定される。

ＳＳ－５は、南側を流失するが、東西約８m、南北約1.5m、壁面の高さ約１mを測るテラス状遺構である。遺構内に３個のピットを持つが、明確に掘立柱建物跡となる柱穴は検出できなかった。出土遺物は、須恵器蓋1336、鉄製鑿状工具1377がある。1336は陰田編年９式以降と考える。

・ＳＳ－６（第352、353図・写真図版68、69、93）

谷奥部の荒神谷山南側斜面、標高約24.7mに立地するＳＳ－６は、橙褐色の地山を造成したテラス状遺構である。南側が流失しているが、東西約９m、南北約1.5mの狭長な床面を検出。壁面東側には、長さ約４mの溝が遺存している。遺構内に７個のピットを持つが、建物の構造は不明である。Ｐ．６の北東側は火を受けた形跡が見られ、埋土中に炭化物および焼土を含んでいる。遺構内北東隅の溝より、土師器甕1344と竈1345が折り重なるように出土した。壁面のほぼ床直上遺物ではあり遺構に伴うものと考えるが、周囲に火を受けた形跡はない。こ

第354図　ＳＳ－７実測図




第355図　ＳＳ－７出土遺物実測図

の他、須恵器坏身1338、脚台1339、甕1340、壷1341、1342、土師器甕1343が埋土中より出土している。また遺構内より10点、合計約150ｇの鉄滓が出土した。内２点を抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いし、２点とも製錬滓と判断された。

ＳＳ－６が立地する周囲は、谷部が比較的なだらかな摺鉢状になっており、この斜面上に同様の遺構の存在が考えられたが、他にテラス状遺構を見ることはなかった。前述のとおり、谷部の包含層より出土した大量の遺物を考えると、かつてここにテラス状遺構を造成していたと思われるが、地滑りによりテラスごと流失したと考えられる。

・ＳＳ－７（第354～355図・写真図版69、70）

ＳＳ－７は、灰色の硬い岩盤を穿って立地する、本遺跡の中で一番低い位置にあるテラス状遺構である。標高は約９ｍ、西側はＳＳ－８、東側はピット群１と隣接する。黒色系の非常に薄い表土を除去すると、東西約２ｍ、南北約14ｍの犬走状の狭長な床面を検出した。縁辺部の流失が考えられる。残存している壁面の高さは約２ｍを測り、大掛かりな造成作業を行ったことが窺える。遺構内にピット21個をもち、径50㎝前後、深さ60㎝前後を測る。このしっかりと穿ったピットは直線上に並び、この内Ｐ．３、４、８、13、16、21からなる５間の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡の柱穴間距離は２ｍ前後を測るが、対応するピット列は検出できなかった。また壁面裾部に延べ約6.5ｍの溝を検出した。この溝は構築物に伴う、排水用のものであると考える。埋土中より支脚1346、須恵器小型壷1347を検出した。

・ＳＳ－８（第356図・写真図版69、70）

ＳＳ－８は、ＳＳ－７の上方標高約11ｍ付近に隣接する。表土を除去するとすぐに犬走状の狭長な遺構面にあたり、検出したテラス状遺構の規模は東西約３ｍ、南北約15ｍを測る。床面は、高低差が大きく、壁面部と縁辺部で約１ｍと緩やかな斜面となっている。残存している壁高は約1.6ｍを測る。遺構内に12個のピットをもつが、そのほとんどが南側に集中している。北側は明確なテラス状遺構とはいえないが、床面を凸凹させながら削平した平坦面が続く。Ｐ．１～Ｐ．８で３間×１間の掘立柱建物を構築していたと考える。Ｐ．１～Ｐ．８の埋土は淡橙灰褐色土の単層が主であり、規模は径30㎝前後、深さは20㎝前後を測る。ピットが浅いこと、床面の凹凸が

はげしいことから客土を盛っていたと考えられる。柱穴間距離は桁行で2.5m前後、梁行で1.2m前後を測る。

## 3　中世以降のテラス状遺構（ＳＳ－９）（第357～359図・写真図版68）

ＳＳ－９はＳＳ－２の下方、標高約10mに位置している。中程で緩やかな段をもち北側が若干低くなるが、東西約７m、南北約50mの長大なテラス状遺構を呈している。壁面の高さは約５mを測り、上方に存在するＳＳ－２の縁辺部を削り、かなり大掛かりな造成作業であったことがわかる。

表土は薄く、除去するとすぐに赤橙灰色の遺構面にあたる。

遺構内には55個のピットを検出したがすべて南側に集中しており、ピットの規模はさまざまで径15～40cm、深さ10～40cmを測り、前述のＳＳ－１～８のもつそれより極めて小さい。

また掘立柱建物になるような規則性をもった並びは見られなかったが、縁辺部のピットは、柱穴間距離は不規則ながら縁辺部に沿うように穿ってあり、柵列となる可能性があるが用途は不明である。

テラス上より摺鉢1348、銅銭1349、1350、五輪塔1351が出土しており、1348はＶＡ期（16世紀前半）に比定される備前焼である。1349は「元豊通宝」（北宋・初鋳1078年）と読める。五輪塔は空輪と風輪が一つになったものである。

## 4　土坑（ＳＫ－１～７）（第360～367図・写真図版70、71、93）

・ＳＫ－１（第360図・写真図版70）

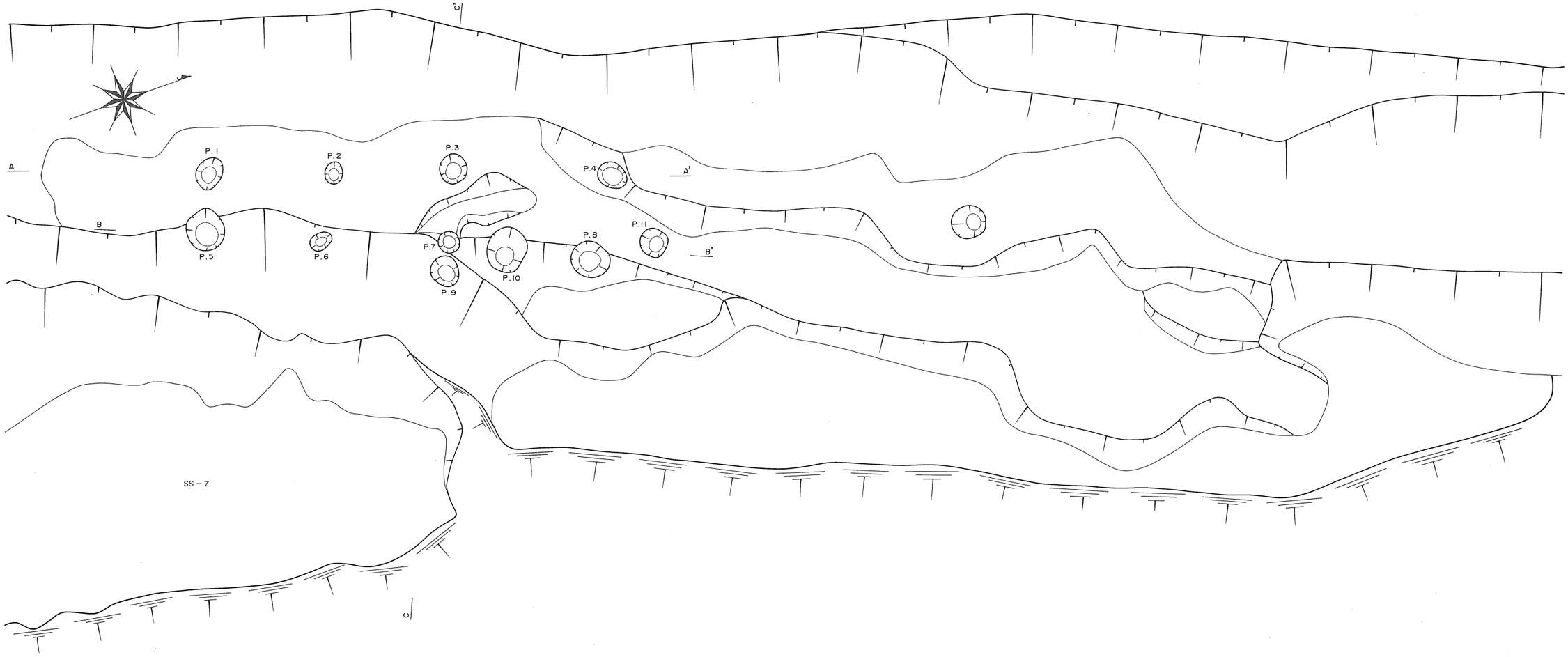
ＳＫ－１は、摺鉢状になった谷奥、標高約25mのなだらかな斜面に位置する。形態は検出面、底面とも不正な楕円形を呈しており、規模は長軸約0.8m、短軸約0.7m、残存する深さは約0.2mを測る。埋土は４層に分けられる。検出面で炭化物を多く含む黒褐色土が広がっており、鍛冶遺構に伴う製炭窯の可能性を考えたが、遺構の周囲、壁面及び底面に焼成を受けた形跡はみられず、流入したものと判断した。埋土中に遺物はなく、時期および性格は不明である。

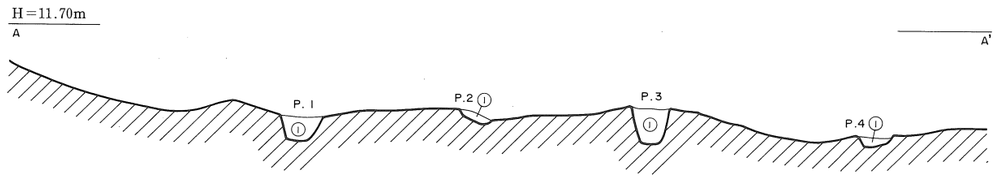
・ＳＫ－２～４（第361～363図・写真図版70、71）

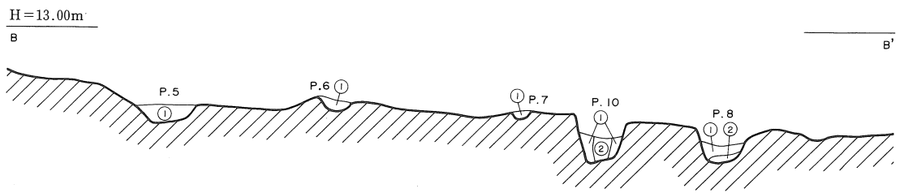
ＳＫ－２～４は、Ａ－１区東端付近、標高5.8～6.4mの低湿地に位置する。ＳＫ－２の形態は、検出面で不正な五角形、底面は隅丸の方形を呈し、西側に狭い段をもつ。規模は、東西・南北とも約1.5mを、残存する深さは最大約0.15mを測る。ＳＫ－３の形態は、検出面、底面とも不正な円形を呈している。規模は、東西・南北とも約1.1mを測り、残存する深さは最大約0.15mである。ＳＫ－２、３の埋土は灰色ブロックが混じる黒褐色粘質土の単層で、埋土中に須恵器および土師器の小片が出土したが、遺構の時期を特定できるものではなかった。これら遺構から北へ約10m下ったところに、陰田小犬田遺跡より検出したＳＫ－１～３が存在する。位置的にも近く、立地条件も似ており、また埋土も類似することから、ＳＫ－２、３は、陰田小犬田遺跡より検出したＳＫ－１～３と時期的に近いものであると考えるが、性格は不明である。ＳＫ－４は、ＳＫ－２、３とは形態が異なっており、灰褐色の岩盤に掘り込まれている。形態は、不正な四角形を呈し、さらに底面に楕円形のピットが穿ってある。規模は、検出面で東西約1.3m、南北約1.5m、底面のピットは長軸約0.7m、短軸約0.3mを測る。埋土は黒褐色であるが、粘質土ではなくヘドロ状の、極めて流動性の高い泥が流入している。埋土中に遺物もなく、時期、性格とも不明である。

・ＳＫ－５（第364図）

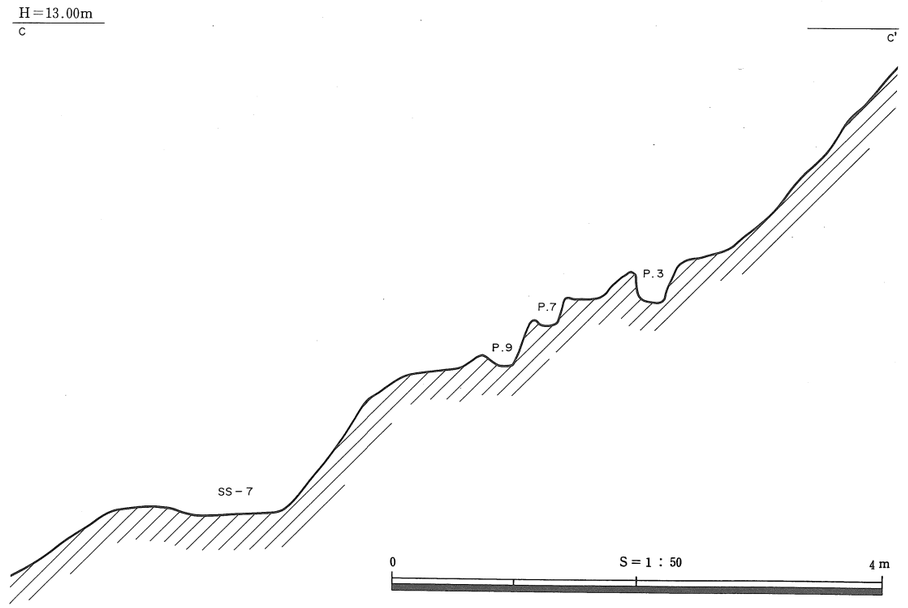
ＳＫ－５は、Ａ－１区の北側裾部で検出した。南側に隣接するピット群２よりなだらかに下る標高約８mの台地状の地形に位置している。東側は流失しており、西側を残すのみの検出であったが、遺存部分から隅丸の四角形、もしくは長方形になると考えられる。規模は、長辺約1.2m、短辺約0.6mを測り、遺存している深さは約10cmである。埋土は灰茶褐色土の単層であり、埋土中に遺物はなかった。



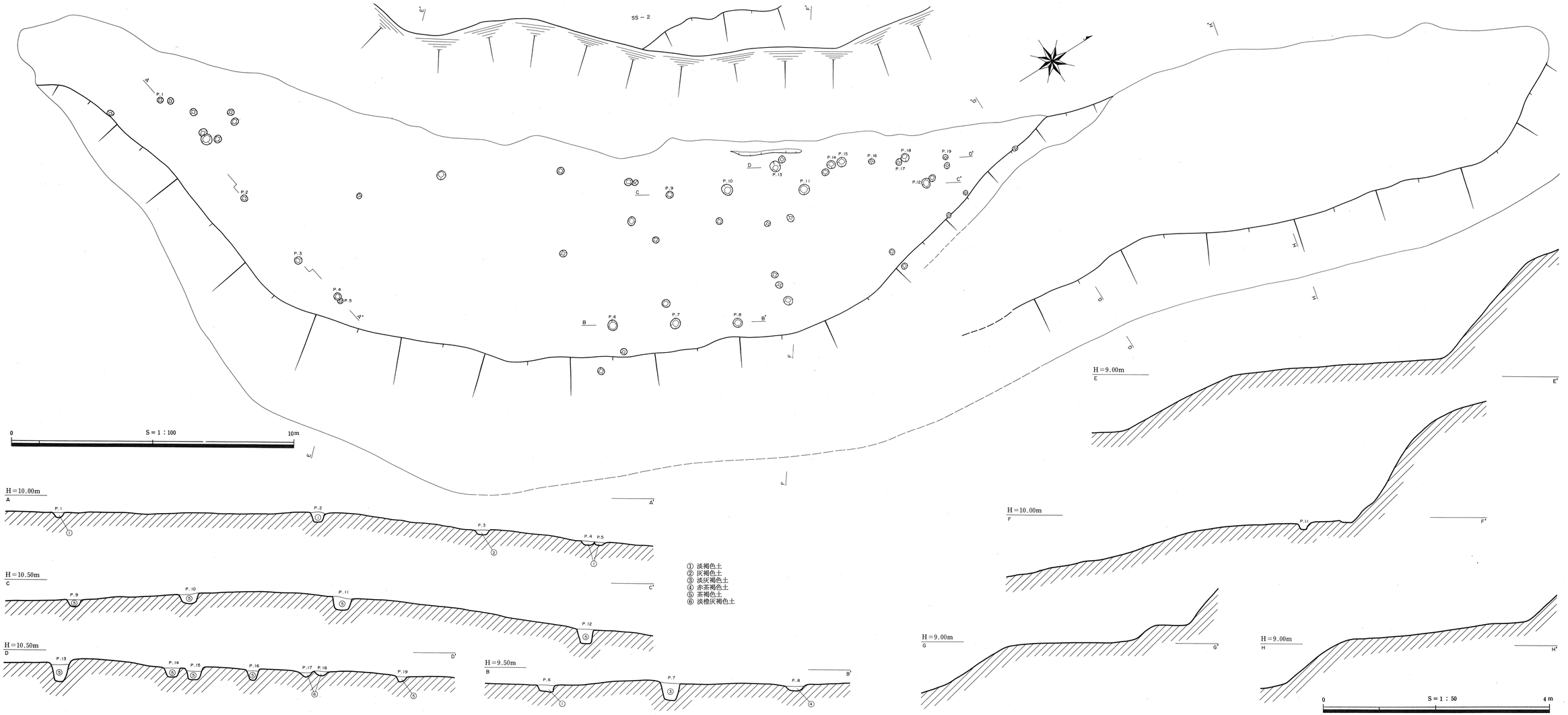



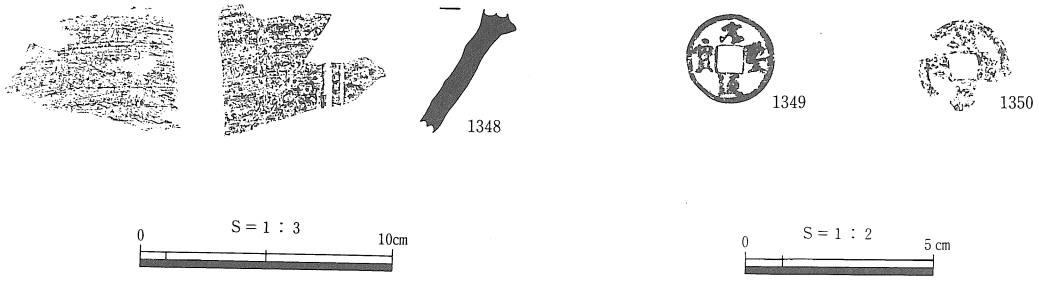

① 淡橙灰褐色土
② 橙褐色土




第356図　ＳＳ－８実測図




第357図　ＳＳ－９実測図

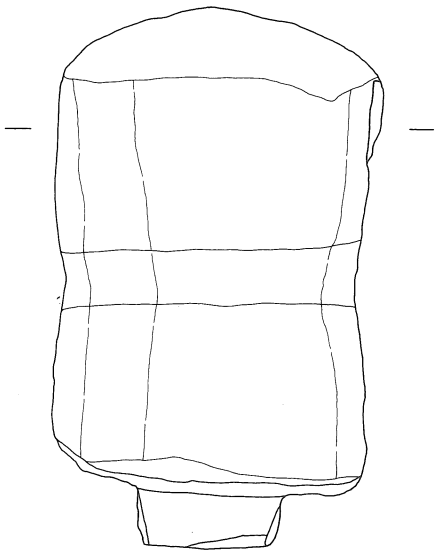



第358図　ＳＳ－９出土遺物実測図(1)

・ＳＫ－６、７（第365～367図・写真図版93）

ＳＫ－６、７は、ＳＳ－３と９の中間、荒神谷山南西裾部の南へなだらかに下る段丘上に立地している。ＳＫ－６は標高約9.8mに位置する。形態は検出面、底面とも不整な円形を呈し、規模は、径約2.7mを測り、遺存している深さは約50cmである。埋土は２層に分層できる。埋土中に遺物は見られなかった。

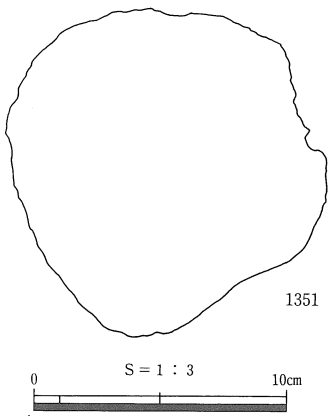
ＳＫ－６より北へ約８mのところに、ほぼ同規模のＳＫ－７が隣接する。形態は検出面、底面とも不整な楕円形を呈しており、規模は、長軸約3.2m、短軸約2.4m、遺存している深さは約30cmを測る。埋土は５層に分層できる。遺構内より備前焼の摺鉢1352、1353を検出した。ⅣＢ期（15世紀後半～16世紀初頭）に比定される。また規模、埋土が比較的よく似ていることからＳＫ－６とＳＫ－７は同時期のものと考えるが、性格は不明である。



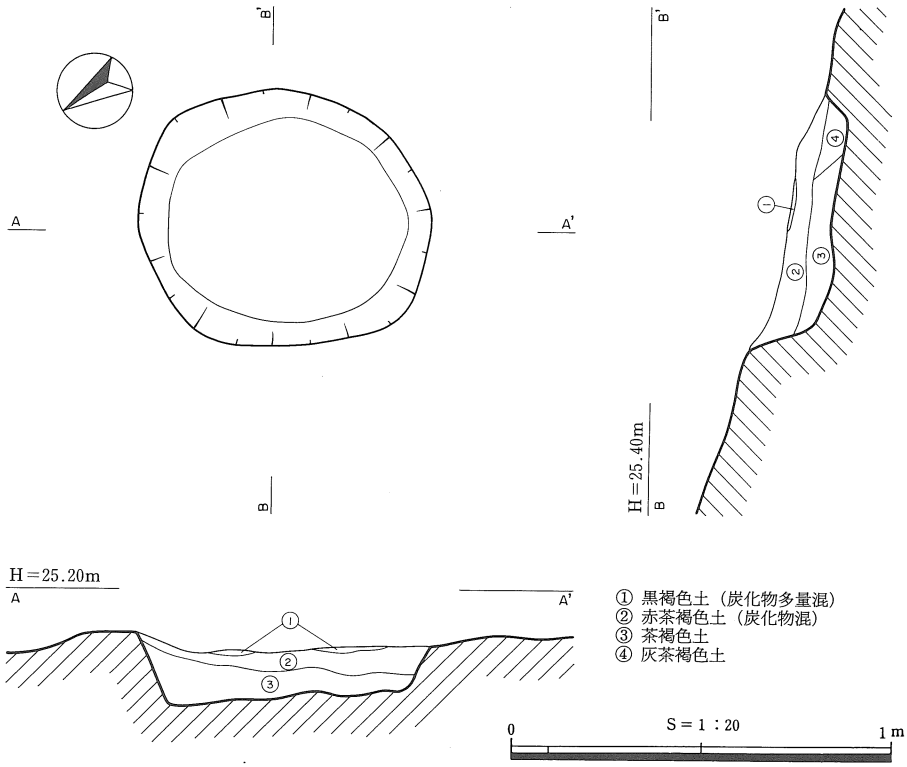
## 5　土器溜り（第368、369図・写真図版71、94）

ＳＳ－１西側の谷地形の堆積土中、標高約６m付近で土器溜りを検出した。遺物は、硬く締まった灰褐色の堆積土中に折り重なるように出土した。図化できた遺物は1354～1366の13個体の土師器である。

1354～1361は甕である。出土した甕は、基本的に口縁部は内外面ともナデ、体部は内面ヘラケズリ、外面ハケ調整を施している。1354～1357は、口縁がほぼ直線的にのび、端部を内に肥厚させている。1356には、把手の剝離痕と考えられる痕跡がみられる。1358は、口縁がわずかに内湾しながら外反し、端部は丸く収まる。1360は、底部を一部欠くがほぼ完形で出土しており、球形の胴部にやや内湾しながら外反する口縁部をもち、端部を内側に若干肥厚させる。体部内面下半に指押さえをみることができる。1359、1361は、肩部のみを検出したが、1361には、頸部内面に指押さえをみることができる。1358、1360、1361には外面にススが付着している。1362は小型壷で、体部下半が欠損している。口縁部は内外面ナデで調整し、直線的に外反し、口縁部径は体部最大径に近い。体部は外面ハケメ調整後ナデ消しており、内面はヘラケズリで調整している。




第359図　ＳＳ－９出土遺物実測図(2)




第360図　ＳＫ－１実測図

1363～1366は高坏である。1363は口縁部が直線的に外方へのび、口縁端部でやや外反する。1363、1366は外面をハケメで調整、内面は風化のため調整不明である。1364は口縁部が直線的にのび、端部丸くおさめている。1365、1366は、短い脚部に大きく開いた裾部をもち、円形の透かしをもつ。

これら土器については、いずれも布留式土器併行期と考えられ、古墳時代中期にまでさかのぼる時期と考える。遺物の出土状況より、上方からの流れ込みとは考えにくく、出土地点の付近で、何らかの祭祀的行為を行った後、一括して廃棄されたものと考えるが、本遺跡内において、これ以外に同様の遺物を検出することもなく、同時期の遺構も存在しない。

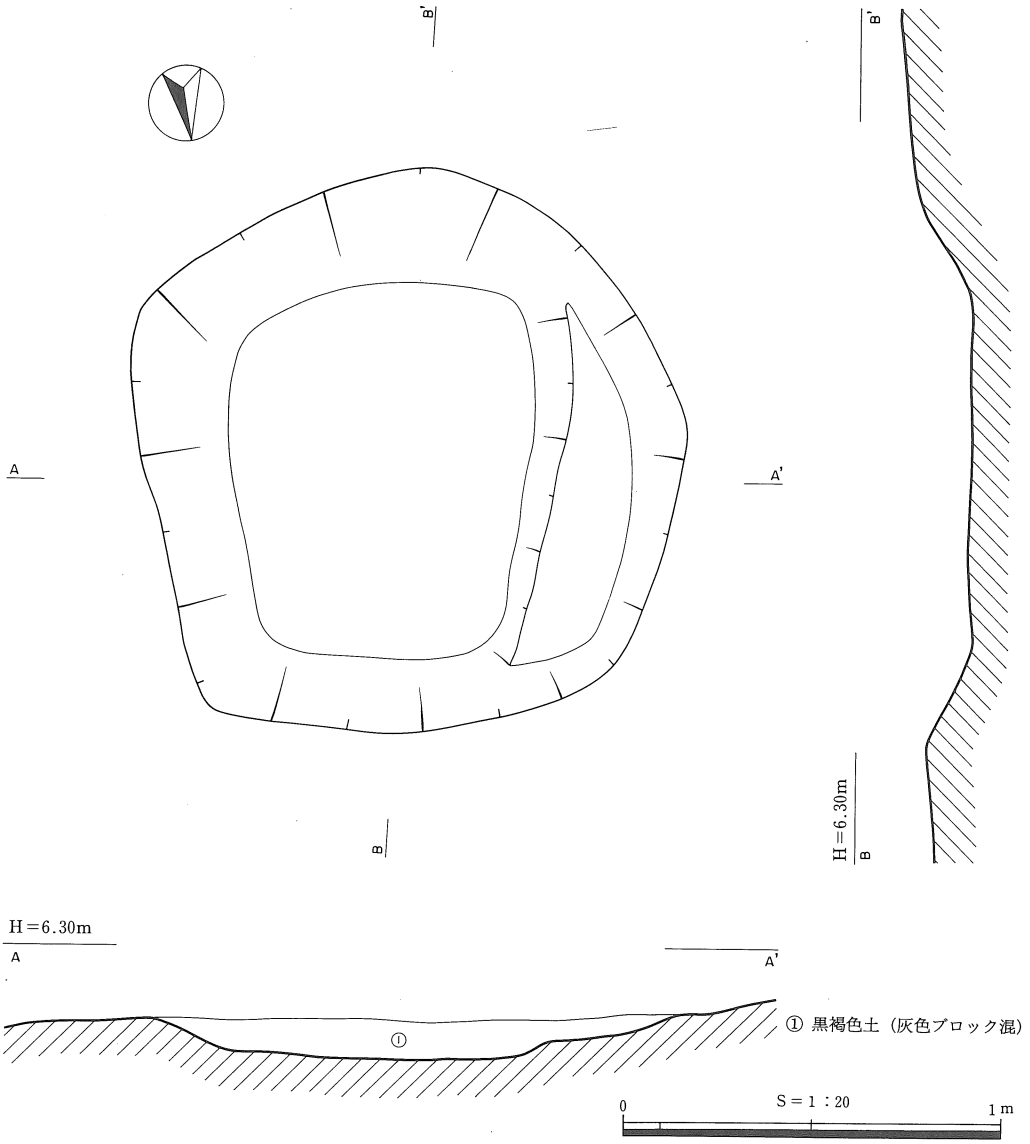
## 6　ピット群（第370～371・図写真図版69）

**・ピット群１**（第370図）

ピット群１は、ＳＳ－７、８の東側に位置し、標高約6.7～7.2mの台地状の地形に合計24個のピットをもつ。調査前でも台地状の地形は確認でき、東へ向かってなだらかに下る地形は、陰田小犬田遺跡へと続いている。ピットは茶褐色系の埋土を中心に様々で、ピット内に遺物は見られなかった。ピットの規模も様々で、統一性、規則性は見られなかった。

**・ピット群２**（第371図・写真図版69）

ピット群２はＡ－１区の急峻な北側斜面と、谷部に挟まれるように位置している。東側にはＳＫ－５が隣接する。標高約8.5mを最高部にして半月状になだらかに下る台地に、大小合計25個のピットを検出した。調査前でも尾根の裾部に広がる台地状の地形は確認できた。当遺構は、テラス状遺構とよく似ているが、尾根の斜面を削った形跡も見られず、台地も自然地形であると判断し、当遺跡中のテラス状遺構とは構造・性格の異なるものと考える。ピットの埋土は、いずれもよくしまった淡灰茶褐色土の単層で一連するものと考えるが、ピットの規模




第361図　ＳＫ－２実測図

は様々で、径20～60cm、深さ20～60cmを測る。埋土中に遺物は見られなかった。ピットの並び方には規則性は見られなかった。

## 7　井戸（ＳＥ－１、２）（第372～374図・写真図版72）

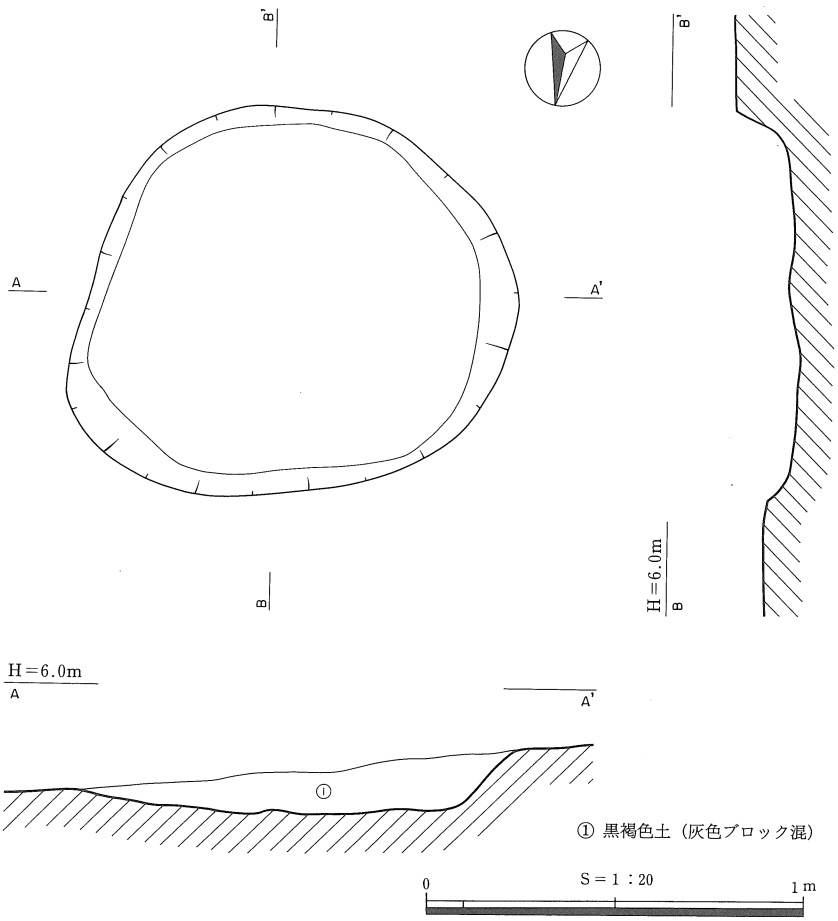
ピット群１が広がる荒神谷山北東の裾部では、２基の井戸（ＳＥ－１、２）を検出した。

・ＳＥ－１

ＳＥ－１は、ＳＥ－２から約７ｍ離れた斜面上部に位置し、直径約1.4m、深さ約１ｍを測る素掘りの井戸である。荒神谷山の地山層に掘り込まれ、側面部および底部は固く締まっている。第372図Ａ－Ａ'ラインの土層断面には枠らしき痕跡が見られる。遺物は出土していない。

・ＳＥ－２

ＳＥ－２は、調査区域の東端を流れる水路付近に検出した、樽を転用した井戸である。直径約65cm、深さ約40cmを測る。遺存状態が良く、ほぼ原形をとどめた状態で検出した。底板は、直径約55cm、厚さ約2.5cmを測り、




第362図　ＳＫ－３実測図

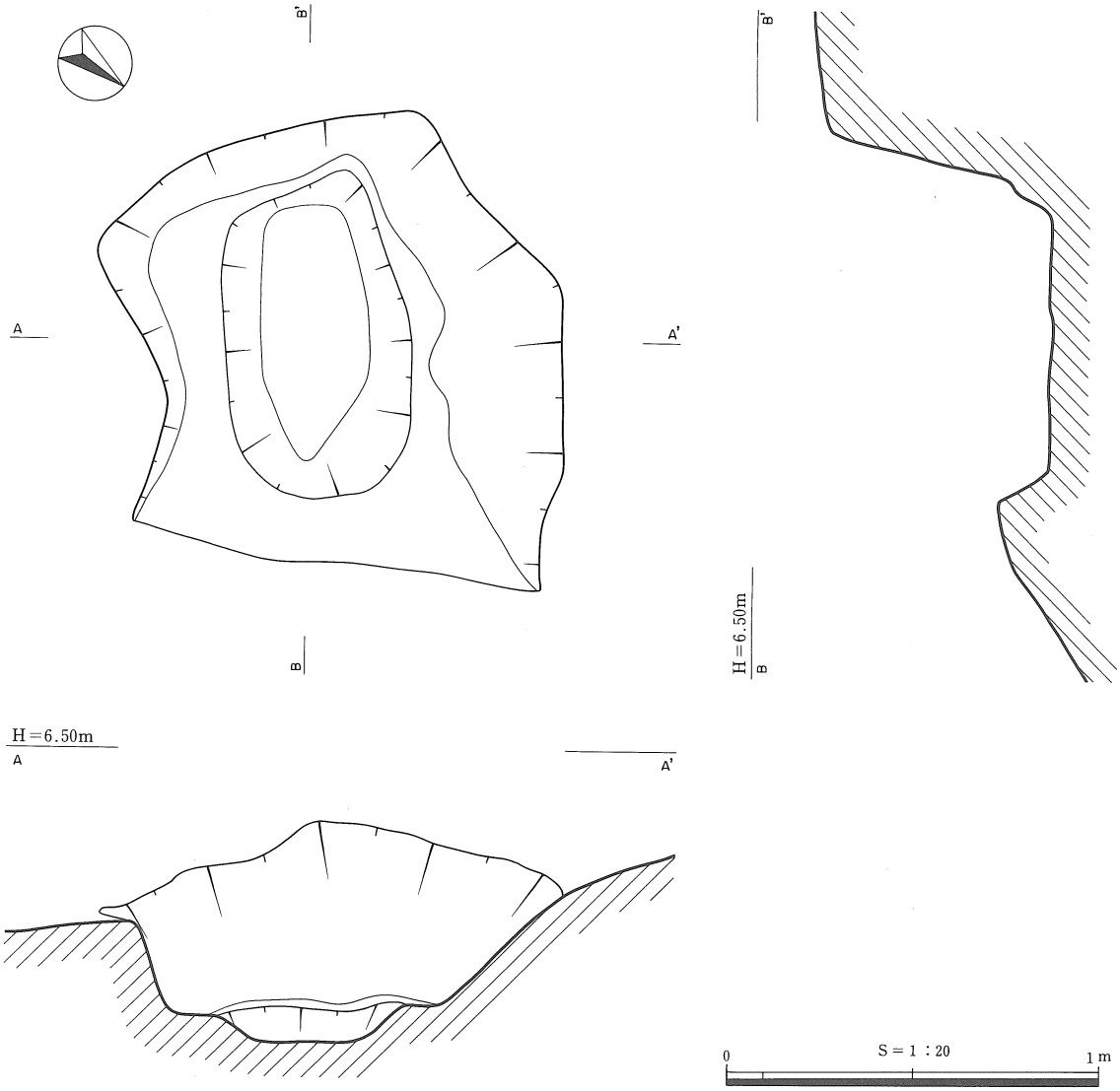
表面中央には直径約２cmの小孔を25箇所で確認した。底板の直下には敷石を検出した。第374図Ｂ－Ｂ'ラインの土層断面から、遺構面下に河川跡が確認でき、これが地下に水脈を形成していたと推測される。この水脈からの湧水を、底板直下の敷石および底板の小孔を経由させて木枠内に溜め込み、用水としていたと考える。またＳＥ－２は、埋土の堆積状況から、人為的な埋め戻しは確認できなかった。

ＳＥ－２北東側の肩部付近には、その遺構検出面より下層に瓶の欠片と思われるガラスの破片が出土しており、このことから、ＳＥ－２は明治以降に構築されたものと判断した。

また、ＳＥ－２の西側肩部には、最長約70cmを測る長短４本の杭を検出した。そのうち３本は比較的遺存状態が良く、実測可能であった。これらの検出状況から、ＳＥ－２には覆いが設けられていたと推測されるＳＥ－２の埋土中からは木片が検出されており、覆いの一部と考えられるが、明確に判断するには至らなかった。

## 8　遺構に伴わない遺物（第375～380図・写真図版94）

1367～1385は須恵器である。1367は立ち上がりの有る坏身である。陰田編年の５式（６世紀末～７世紀初頭）相当と思われ、当遺跡出土須恵器の最古の段階にあたるものである。1368は高台の付く坏で、９世紀代に比定される。1369は底部糸切りの坏で、底部に墨書があり、「十田□」と読める。天地が不明であり、「□田十」である可能性もある。陰田編年の10式（８世紀後半）に相当しよう。1370は鉄鉢形土器であろう。1371は底部糸切りの皿、1372は脚台である。1373、1374は高台付きの壷の底部で、1373は内面にタタキがみられる。1375は円面硯である。脚台に幅広の透かしがはいる。1376～1378は甕である。1376の頸部と1377の肩部にヘラ記号がみえる。1379～1385は坏の底部である。７～８世紀代に比定されるが、底部に穿孔のあるもの、あるいは穿孔されている



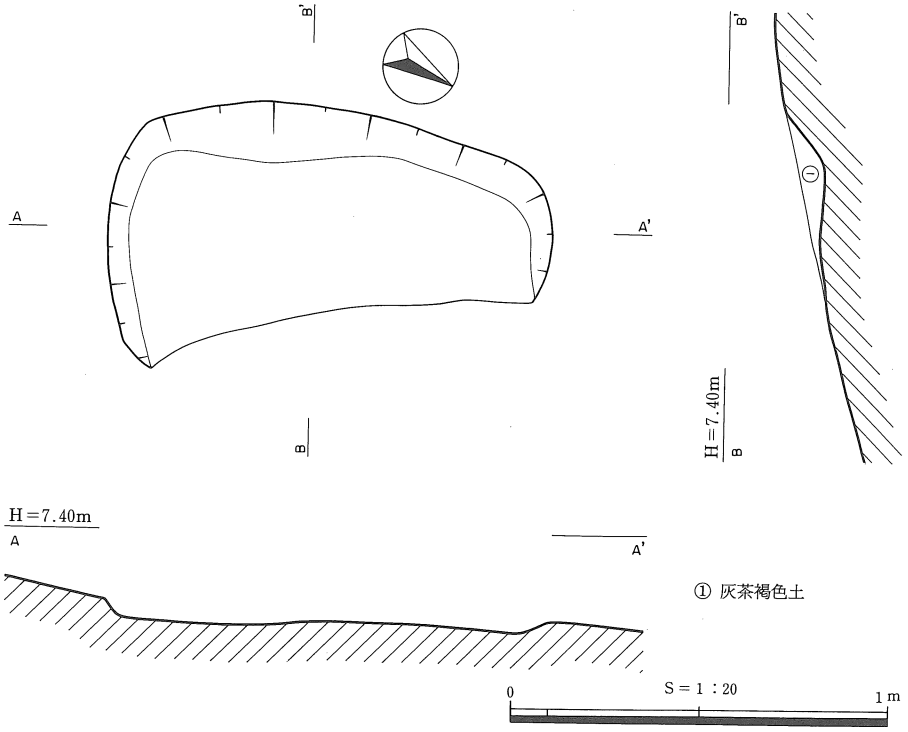

第363図　ＳＫ－４実測図

可能性の高いものを集成している。破砕断面の向きによって、1380と1385は外面から、1381～1384は内面から敲打していると判断した。1379については判断できなかった。これらの土器については、偶然の産物である可能性についても留意されるところだが、祭祀後に穿孔して廃棄したものとの解釈も捨て切れない。

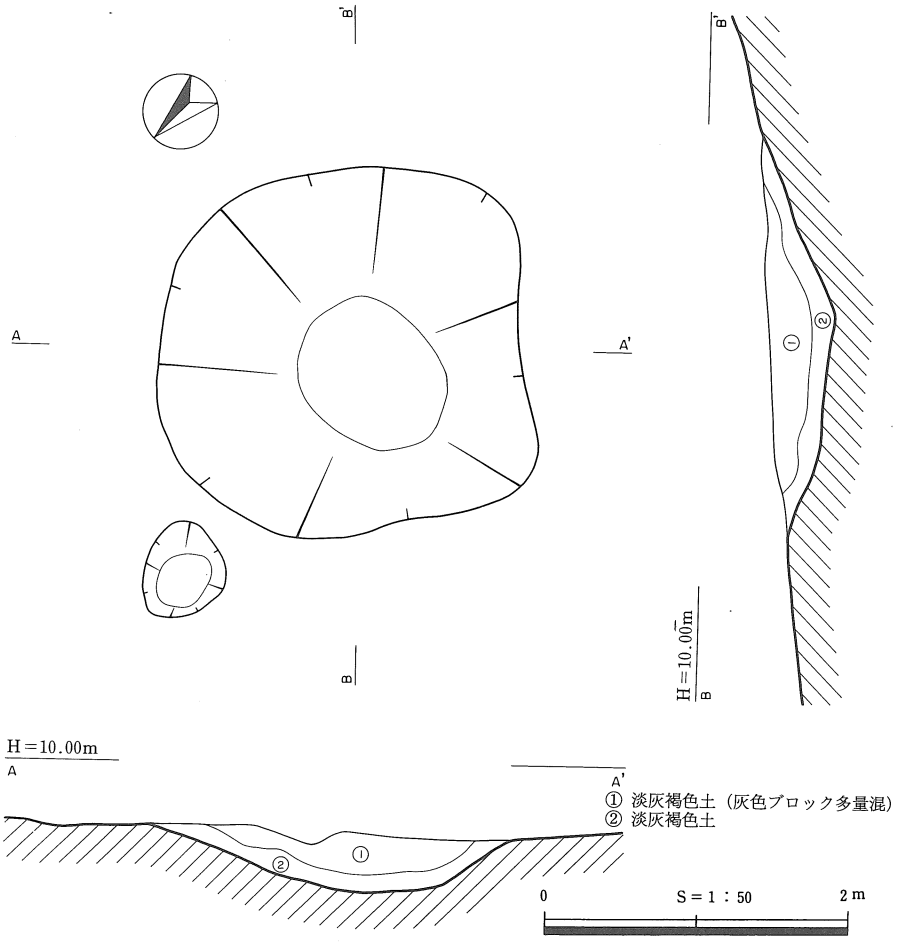
1386～1390は土師器である。1386～1388は丹塗り土師器で、1386は蓋形で、「回転台土師器」等と呼ばれるものである。1387、1388は皿である。1389、1390は手捏土器である。1391は、内面に布目痕がみえる製塩土器である。1392は土錘である。

1393～1398は、中、近世の遺物である。1393は国産の白磁椀の高台部で、円盤形土製品と呼ばれるものである。1394は16世紀前半に比定される輸入青磁椀である。1395は瀬戸・美濃の皿で、大窯Ⅲ期（16世紀後半）に比定される。1396は国産の青磁椀である。1397は瓦質土器で、擂鉢である。1398は銅銭で、「開元通寶」（唐・初鋳621年）である。

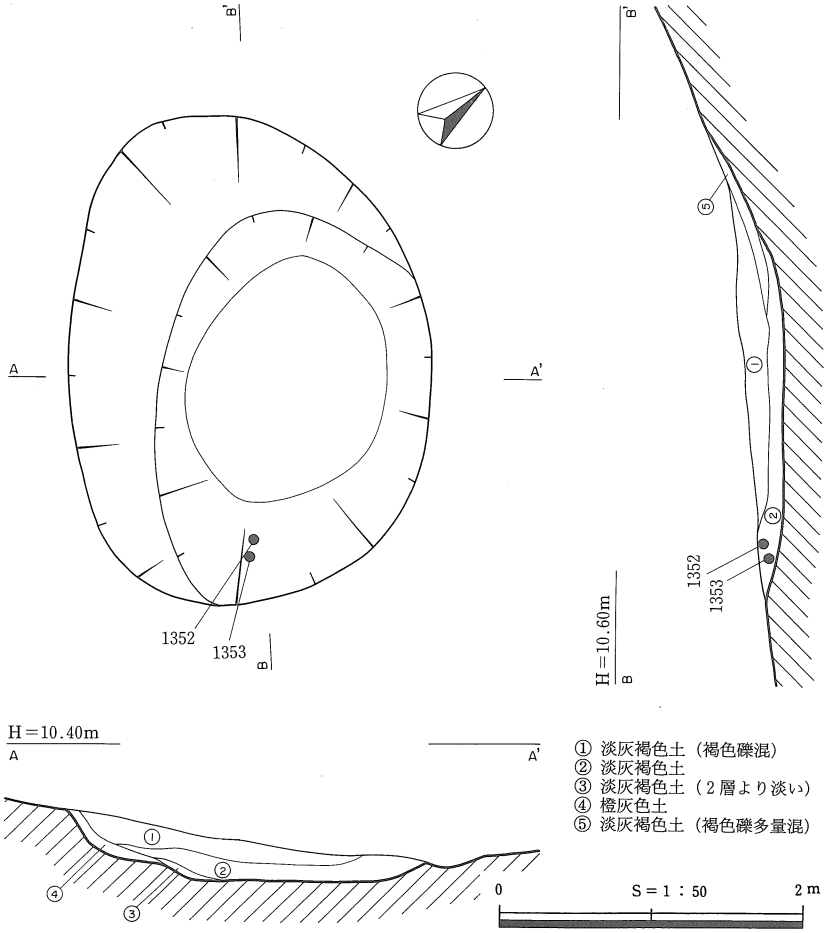
1399～1403は製鉄、鍛冶関連遺物である。1399は流出溝滓である。流出溝滓とは製鉄炉の炉底に近い炉壁の排滓孔より流れ出た滓であり、本資料は、排滓孔内から排滓溝にかけての滓（資料上部）と孔内の滓（資料下部）がくっついた状態で出土しており、製鉄操業中に、炉の排滓孔を１度開け直していると見られる。１度目の排滓



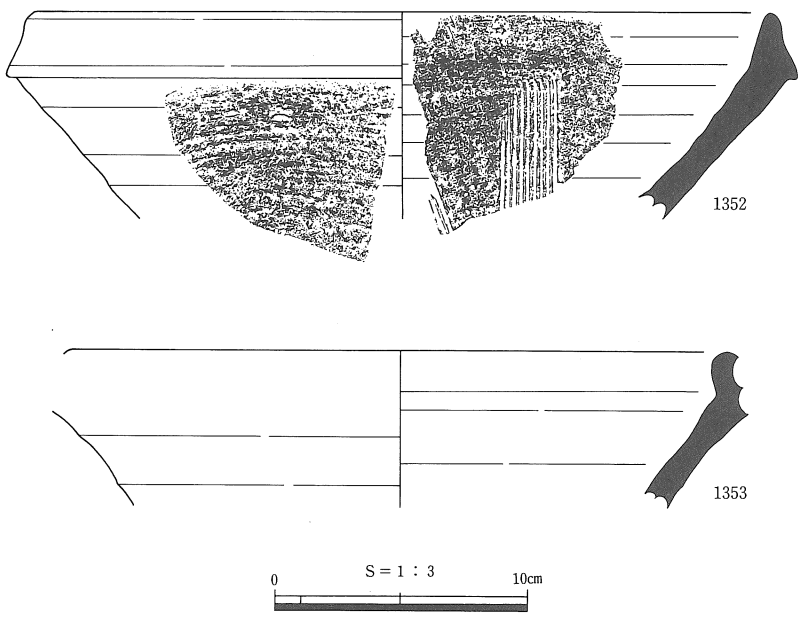

第364図　ＳＫ－５実測図



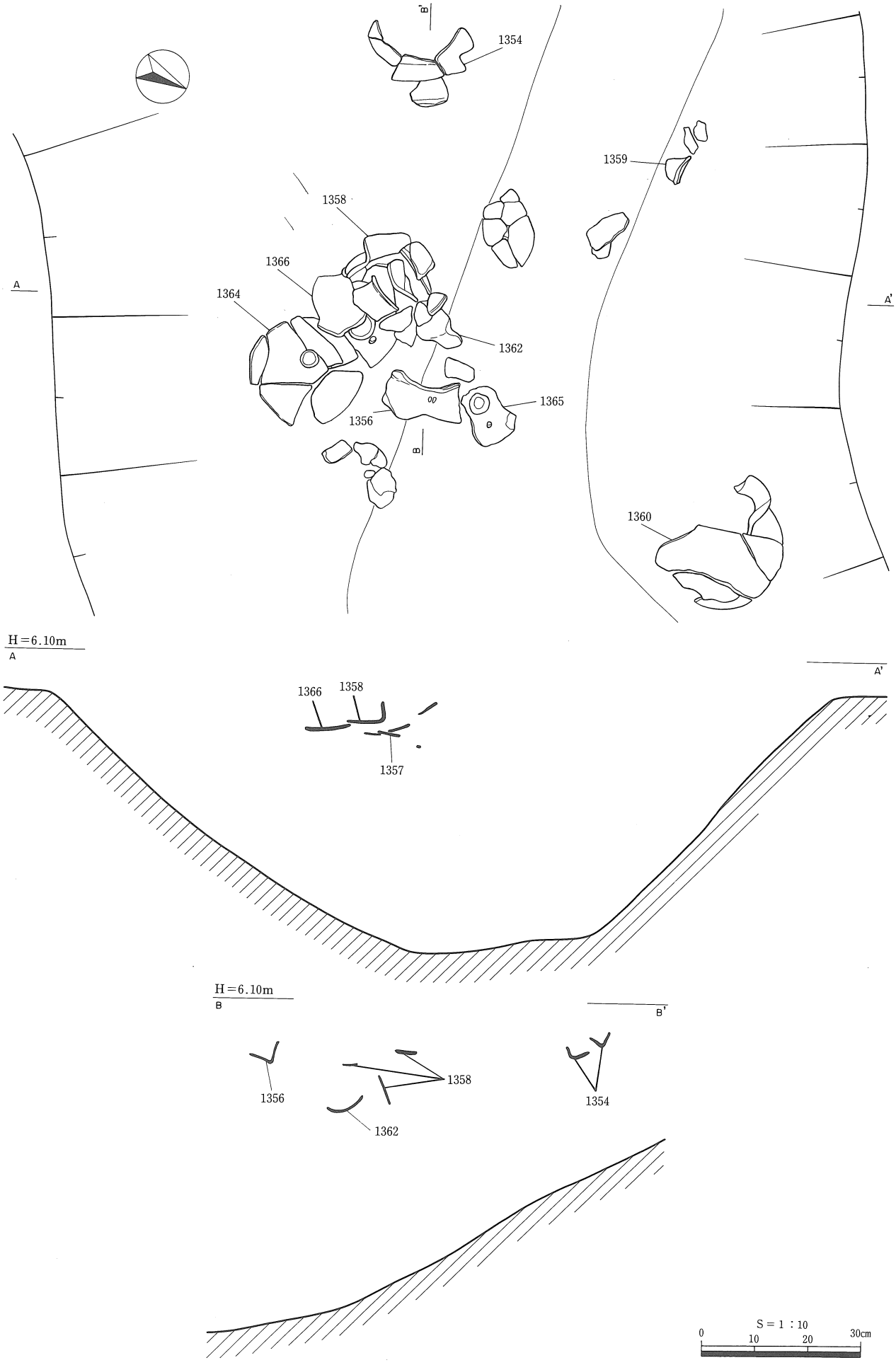

第365図　ＳＫ－６実測図



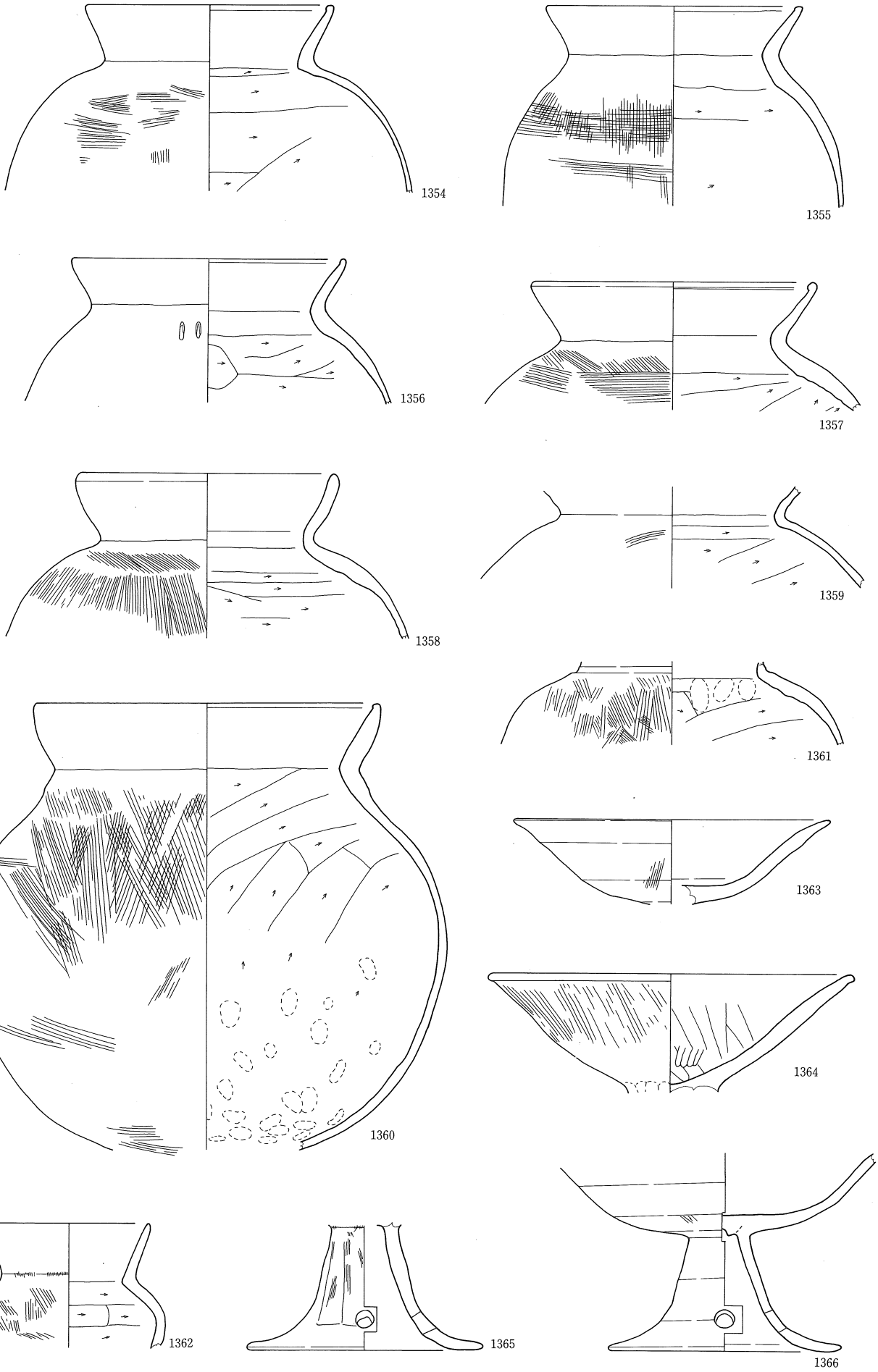

第366図　ＳＫ－７実測図



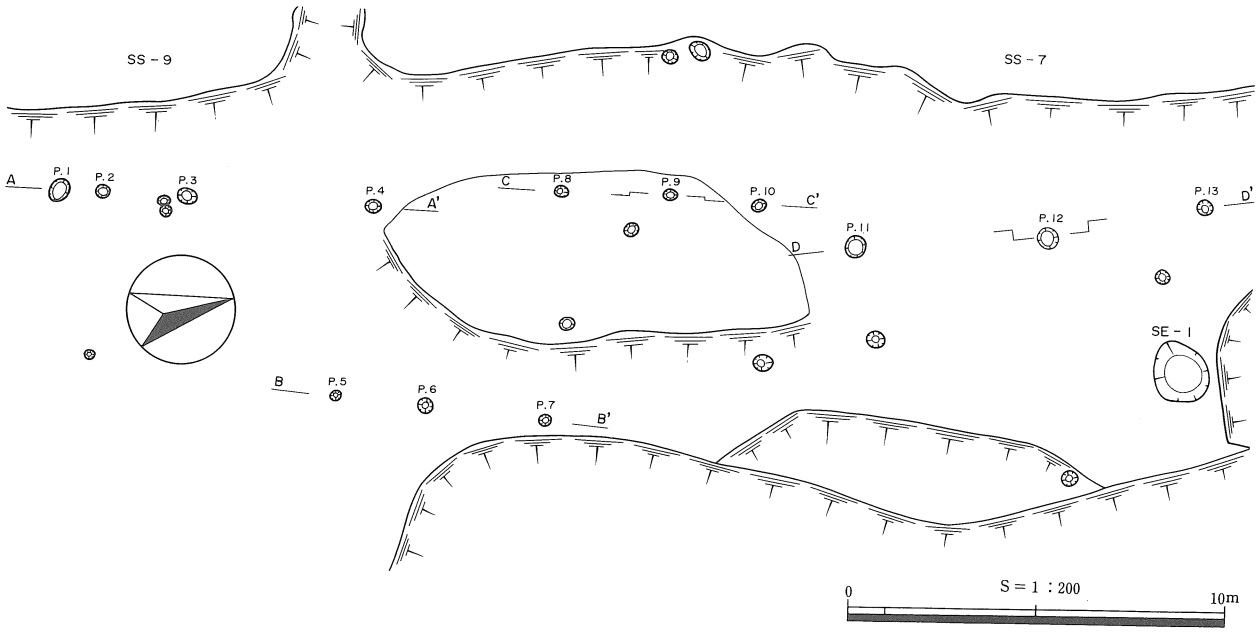

第367図　ＳＫ－７出土遺物実測図

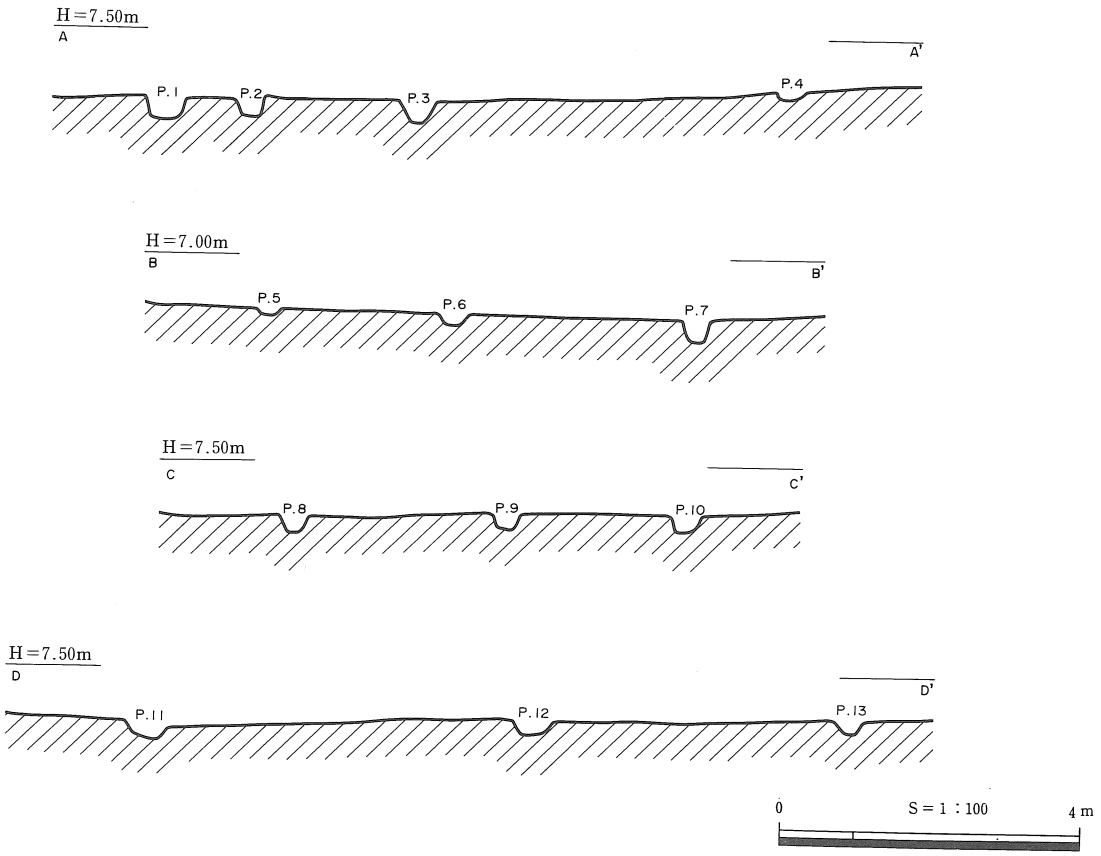



第368図　土器溜り１実測図

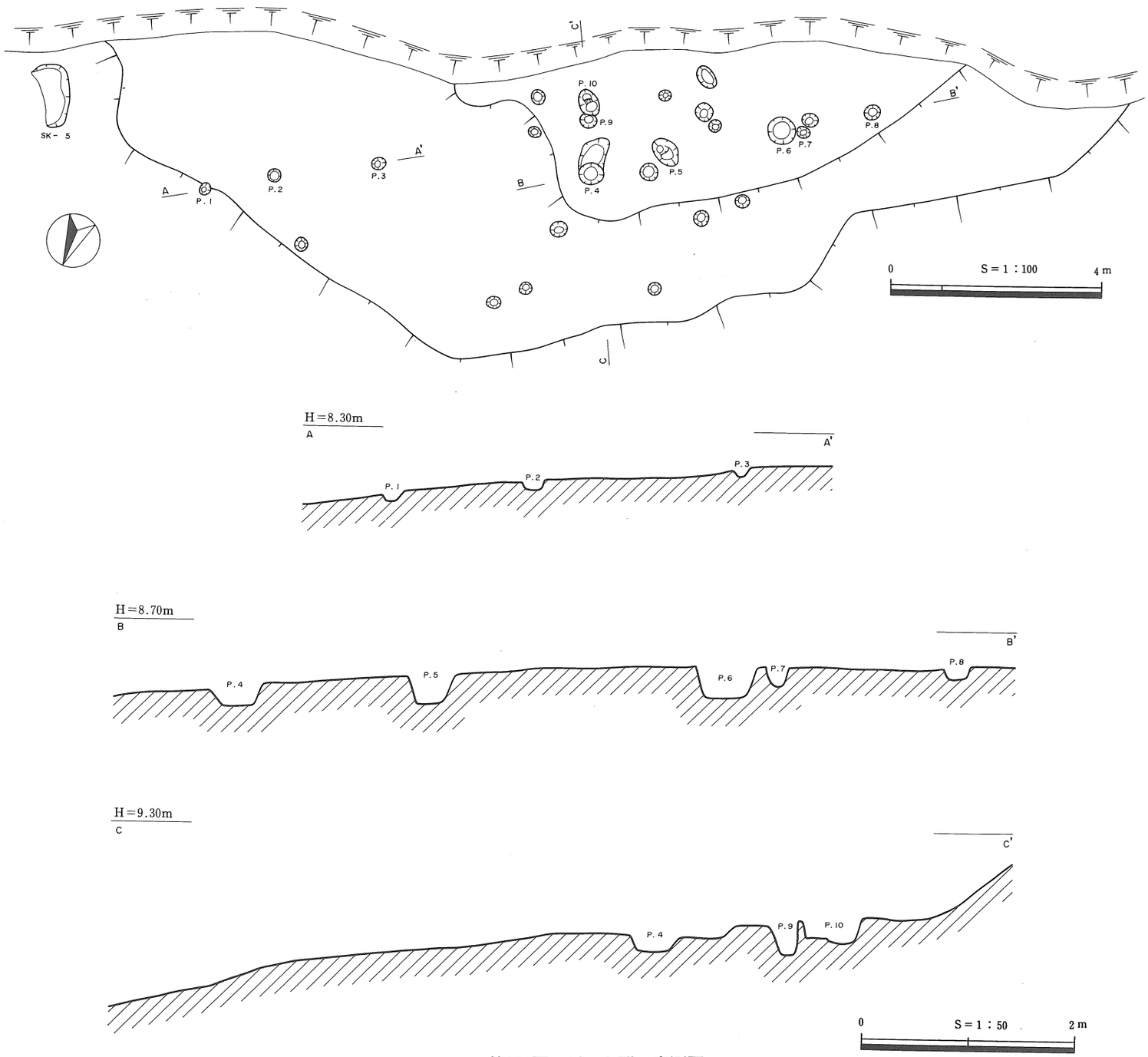



第369図　土器溜り１出土遺物実測図

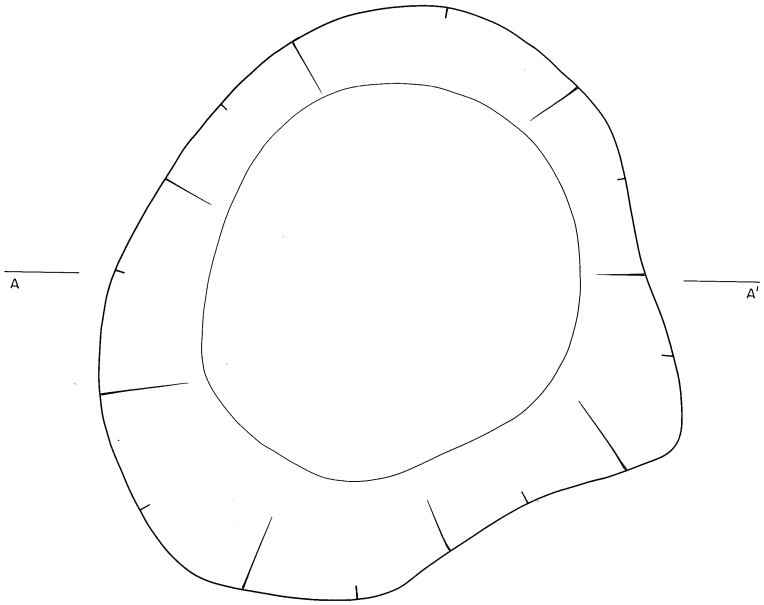


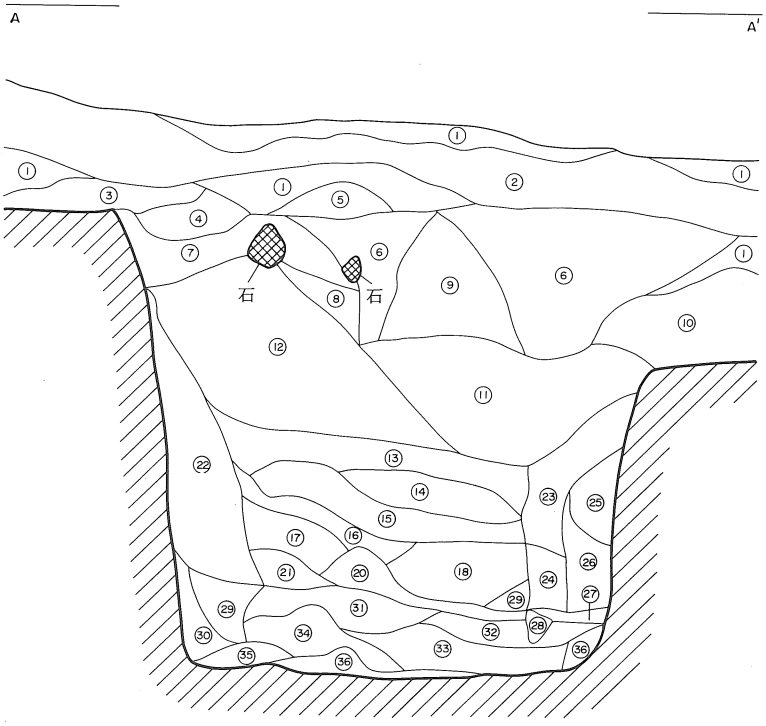




第370図　ピット群１実測図

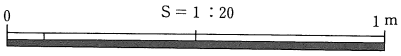



第371図　ピット群２実測図

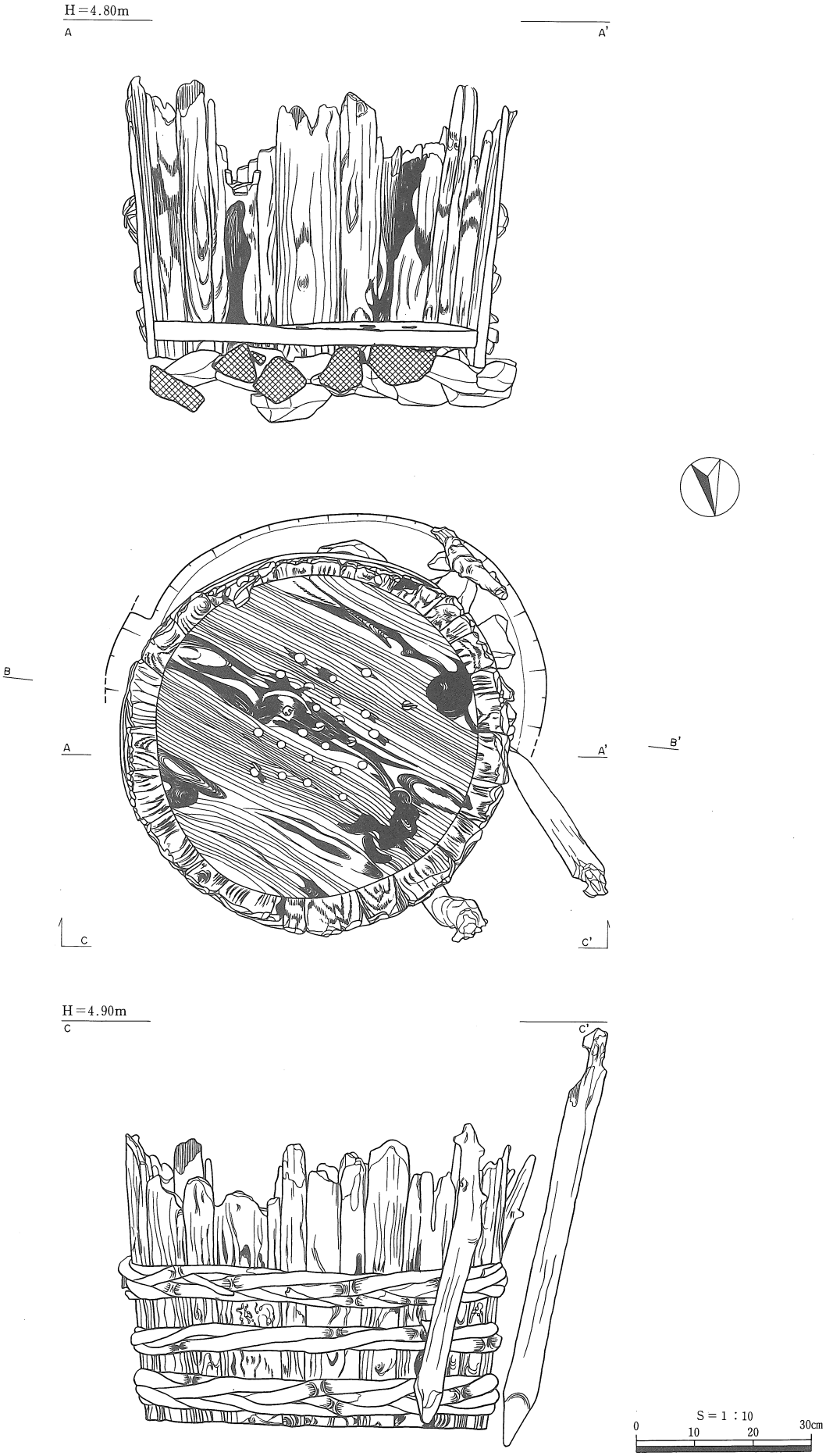





① 暗灰褐色土
② 灰褐色土
③ 暗灰褐色土（１層より暗い）
④ 暗灰褐色土
⑤ 灰褐色土
⑥ 黒褐色土
⑦ 暗灰褐色土（灰色礫混）
⑧ 黒茶褐色土
⑨ 黒茶褐色土（灰色礫混）
⑩ 黄褐色土
⑪ 黒茶褐色土（灰色礫混）
⑫ 黒茶褐色土
⑬ 暗茶褐色土
⑭ 青灰色土・褐色土混在（砂粒混）
⑮ 暗茶褐色土
⑯ 暗茶褐色土（黒色土混）
⑰ 暗黄褐色土（青灰色土・褐色土混）
⑱ 暗茶褐色土
⑲ 暗茶褐色土
⑳ 青灰色土・褐色土混在
㉑ 暗黄褐色土
㉒ 暗黄褐色土
㉓ 暗黄灰褐色土
㉔ 暗灰色土
㉕ 青灰色土・褐色土混在
㉖ 暗黄褐色土
㉗ 暗黄褐色土（砂粒混）
㉘ 暗灰色土
㉙ 暗黄褐色土
㉚ 青灰色土・褐色土混在
㉛ 青灰色土・褐色土混在
㉜ 暗灰褐色土（灰色礫混）
㉝ 暗灰褐色土（１層より暗い）
㉞ 黒灰褐色土
㉟ 黒灰褐色土（黒色土混）
㊱ 青灰色土・褐色土混在



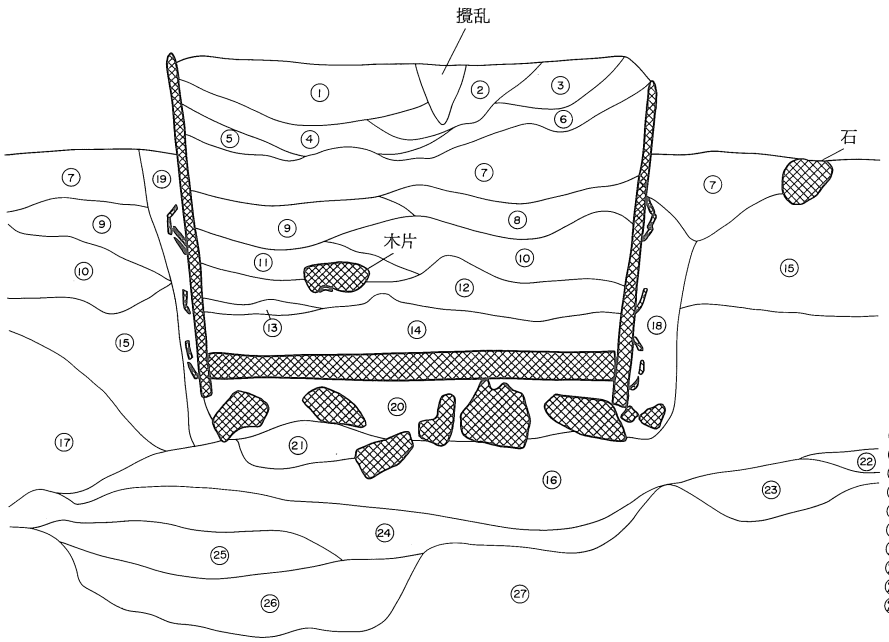

第372図　ＳＥ－１実測図




第373図　ＳＥ－２実測図(1)

H＝4.80m
B

B'




① 灰褐色粘質土
② 暗灰褐色粘質土
③ 灰褐色粘質土（細砂混じり）
④ 黒灰褐色粘質土
⑤ 黒茶灰色粘質土
⑥ 灰褐色粘質土（細砂混じり）
⑦ 灰色粘質土（礫混じり）
⑧ 暗灰褐色粘質土（黒灰色粘質土混じり）
⑨ 暗灰褐色粘質土
⑩ 暗灰褐色粘質土
⑪ 暗灰色粘質土
⑫ 暗灰色シルト混じり砂
⑬ 腐植土
⑭ 黄灰褐色シルト
⑮ 黒褐色土（暗茶褐色土混じり）
⑯ 黒褐色土
⑰ 黒灰色粘質土
⑱ 黒褐色土
⑲ 黒褐色土
⑳ 空洞
㉑ 淡茶灰色土ブロック
㉒ 黒茶褐色粘質土
㉓ 黒灰色砂
㉔ 暗灰褐色砂
㉕ 黒色シルト（灰色シルト混じり）
㉖ 灰色砂（茶褐色シルト混じり）
㉗ 淡青灰色シルト（黄褐色土混じり）

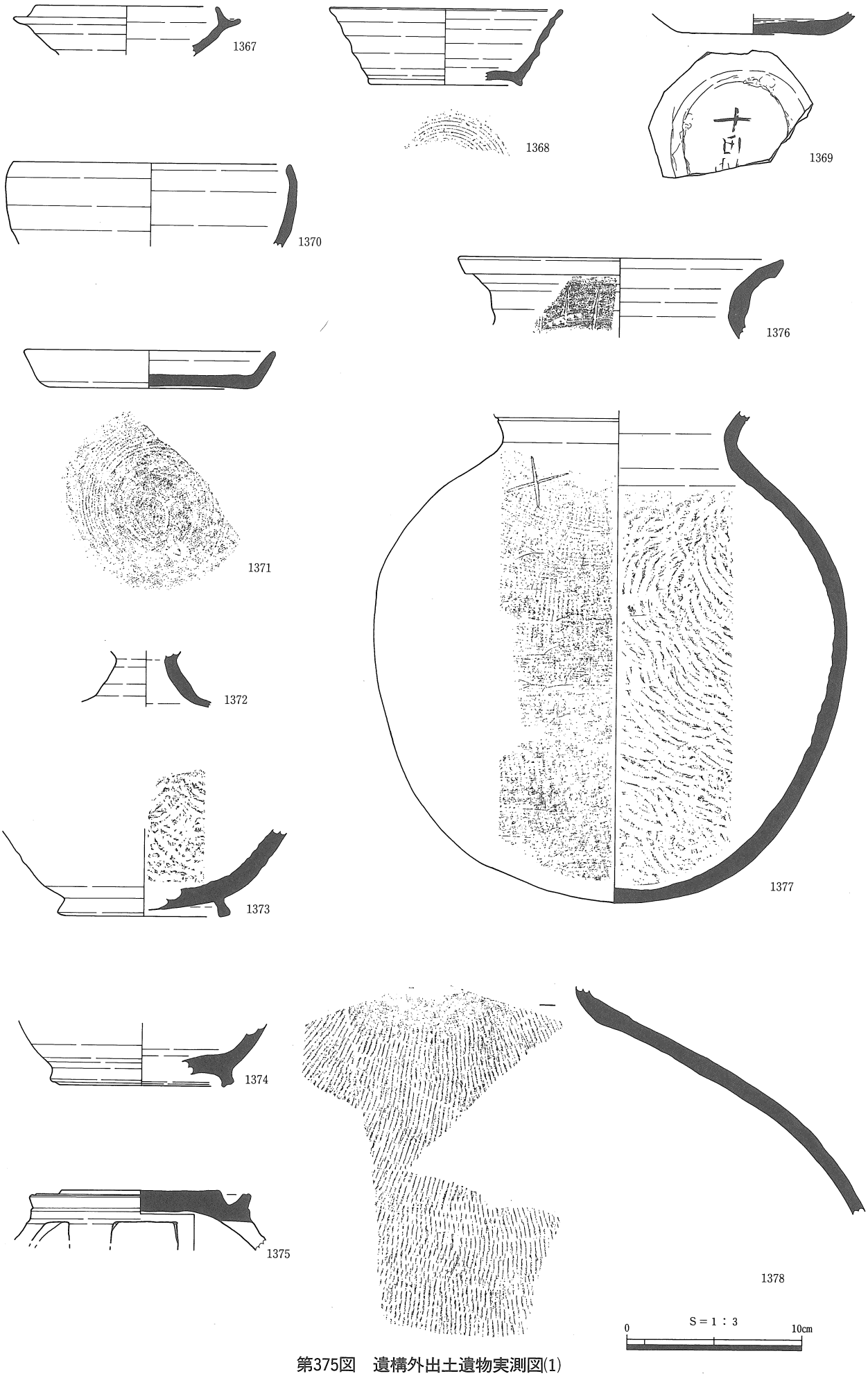
S＝1：10
0 10 20 30cm

第374図　ＳＥ－２実測図(2)

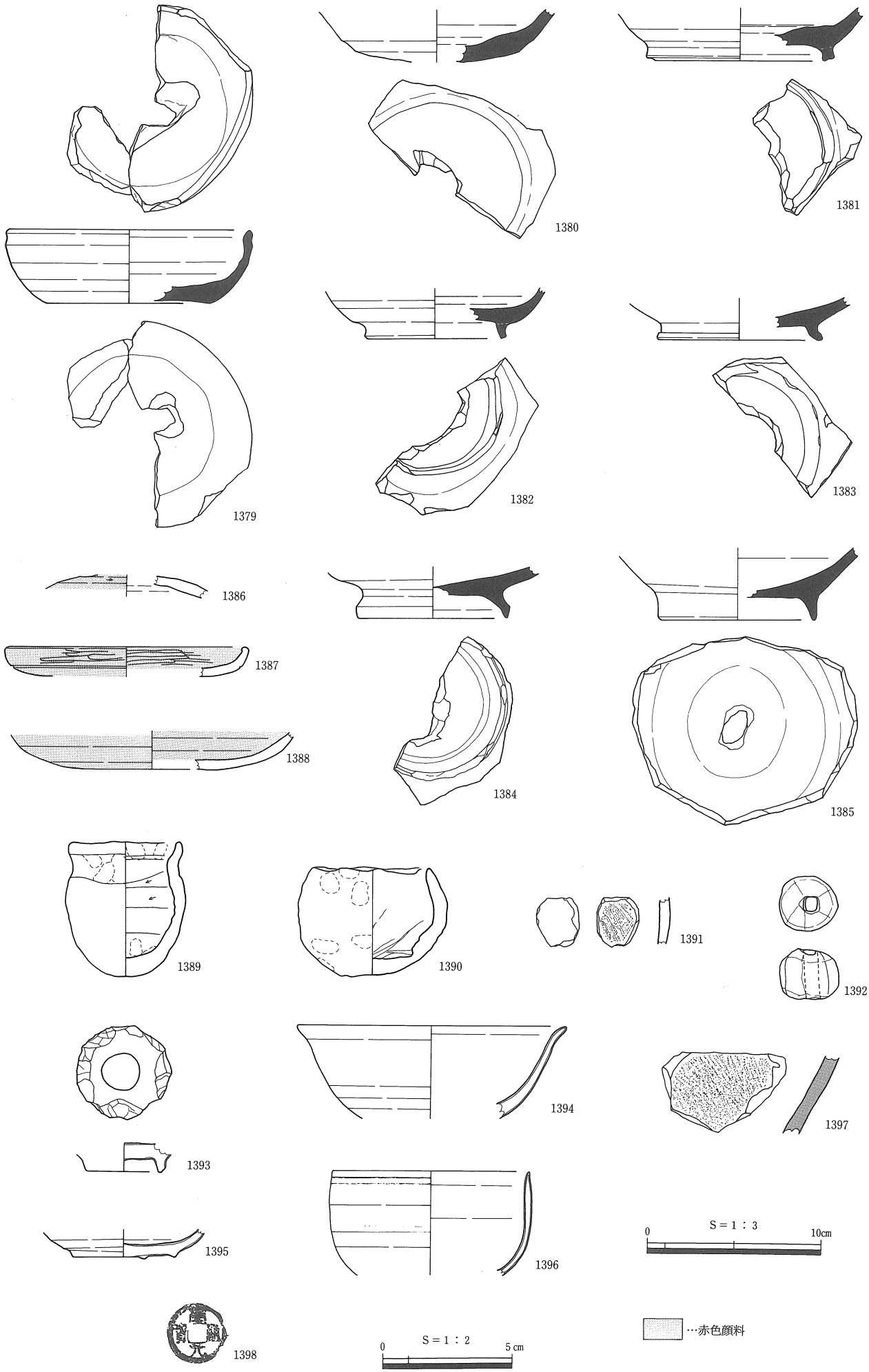
孔より資料下部の滓が流れ、孔が詰まったためこの上部に、新たに排滓孔を開けて、２度目の排滓をしている。２度目の排滓の時、径３cm前後の棒状の工具で排滓を促したようで、上部の流出溝滓には明確な工具痕が見られる。上部の滓は、孔内側で気泡の露出跡が見られ、排滓溝側は滑らかである。本資料の大きさより大型の製鉄炉より排出されたものと判断し、生成された時期は、出土した陰田荒神谷遺跡の主体的な時期である８世紀代と矛盾しないものと考える。1400、1401は鞴の羽口の先端部破片である。1401の外面には椀形鍛冶滓が付着している。1402は椀形鍛冶滓である。椀形鍛冶滓は、鍛冶操業中に鍛冶炉炉底にたまる滓である。本資料の上面は橙褐色に酸化しており、下面は黒灰色を呈し、全体に小さな気泡が見られる。1403は製錬滓である。製錬滓は製鉄工程で生成される滓である。本資料は全体に橙灰色から赤茶けた色を呈し、炉壁と思われるものが付着している（註７）。

1404～1409は石製品（註８）である。1404～1406は台石で、いずれも表裏ともに敲打痕が観察できる。点網部は擦痕を表す。1405、1406は部分的に熱を受けている。これらは鍛冶の際に使用された鉄砧石と思われる。1404、1405は花崗斑岩製、1406は細粒黒雲母花崗岩製である。1407、1408は砥石である。いずれも砥面は１面である。1407はアプライト製、1408は優白質細粒花崗岩製である。1409は黒曜石製のスクレイパーである。

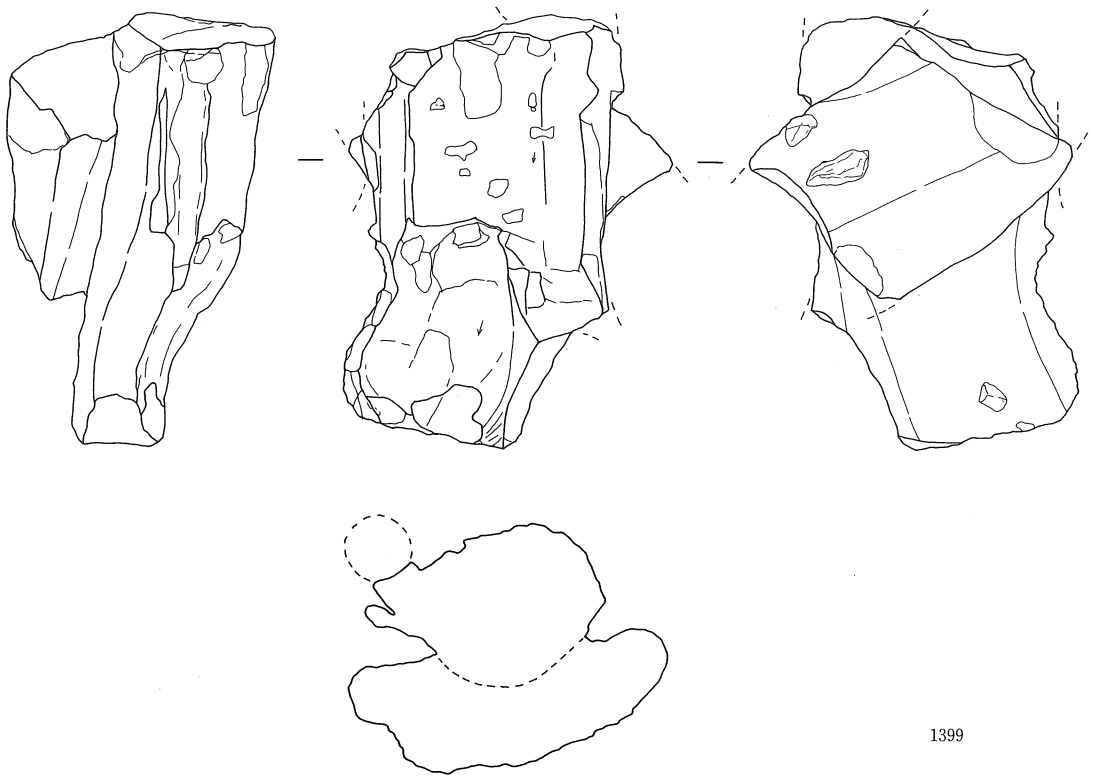
註１　房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。
註２　鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示いただいた。
註３　柳浦俊一　「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』　第３号
註４　前掲註３
註５　房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。
註６　萩本勝・佐古和枝　「第４節；須恵器について」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年
註７　房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。
註８　石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

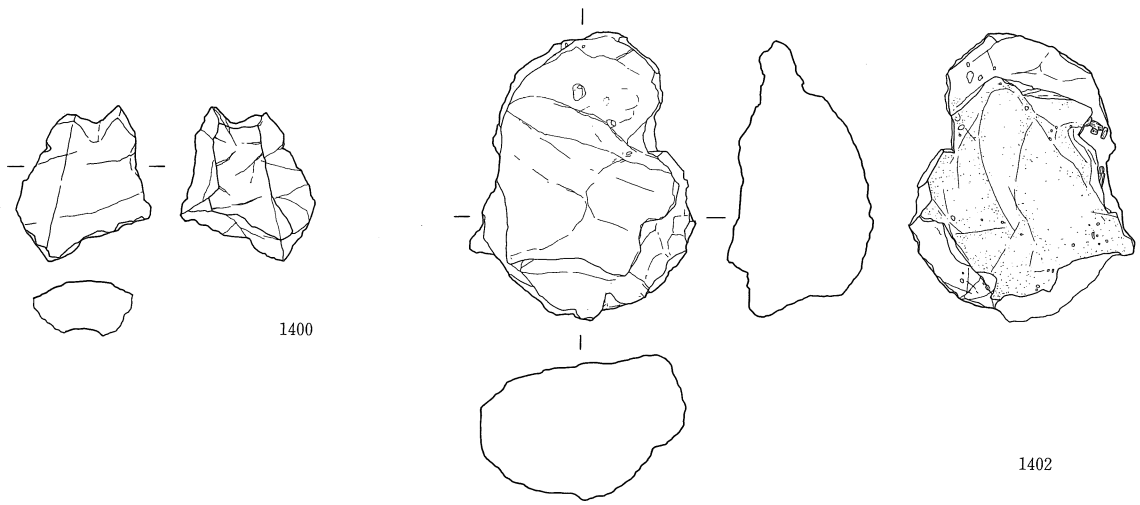


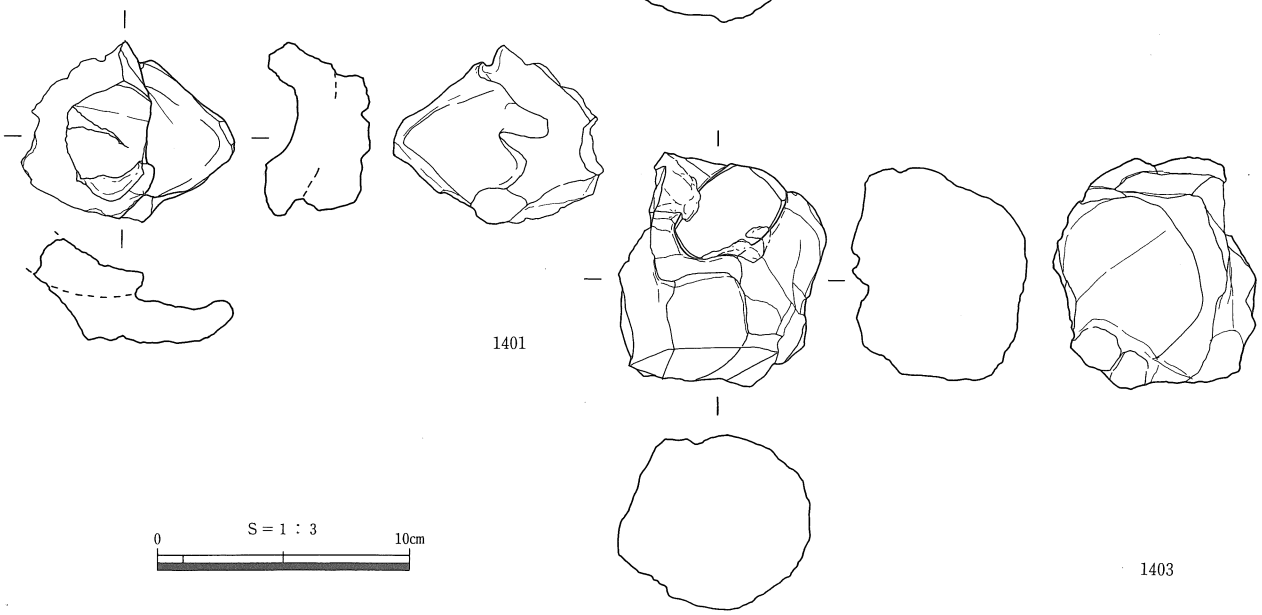

第375図　遺構外出土遺物実測図(1)



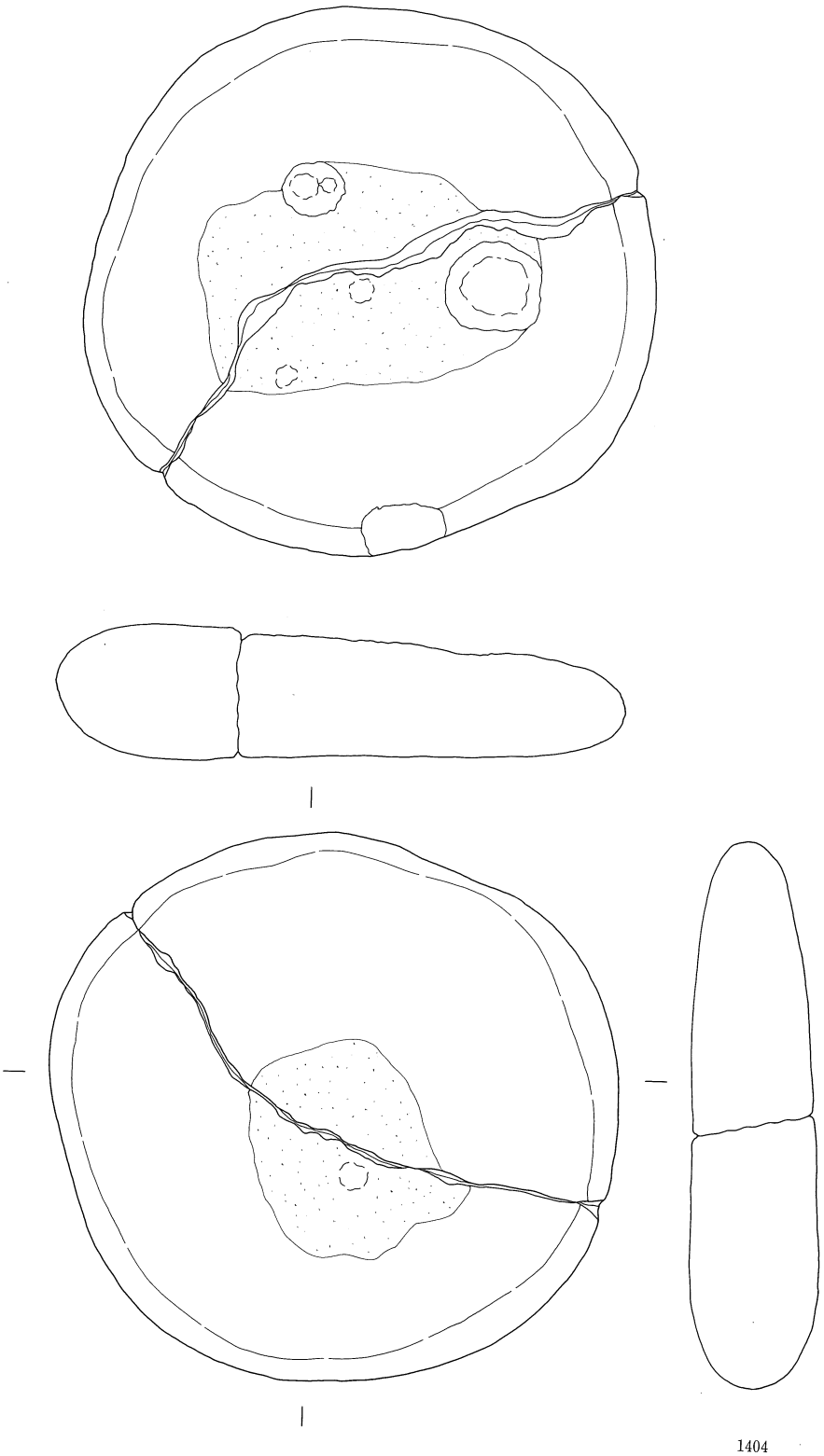

第376図　遺構外出土遺物実測図(2)



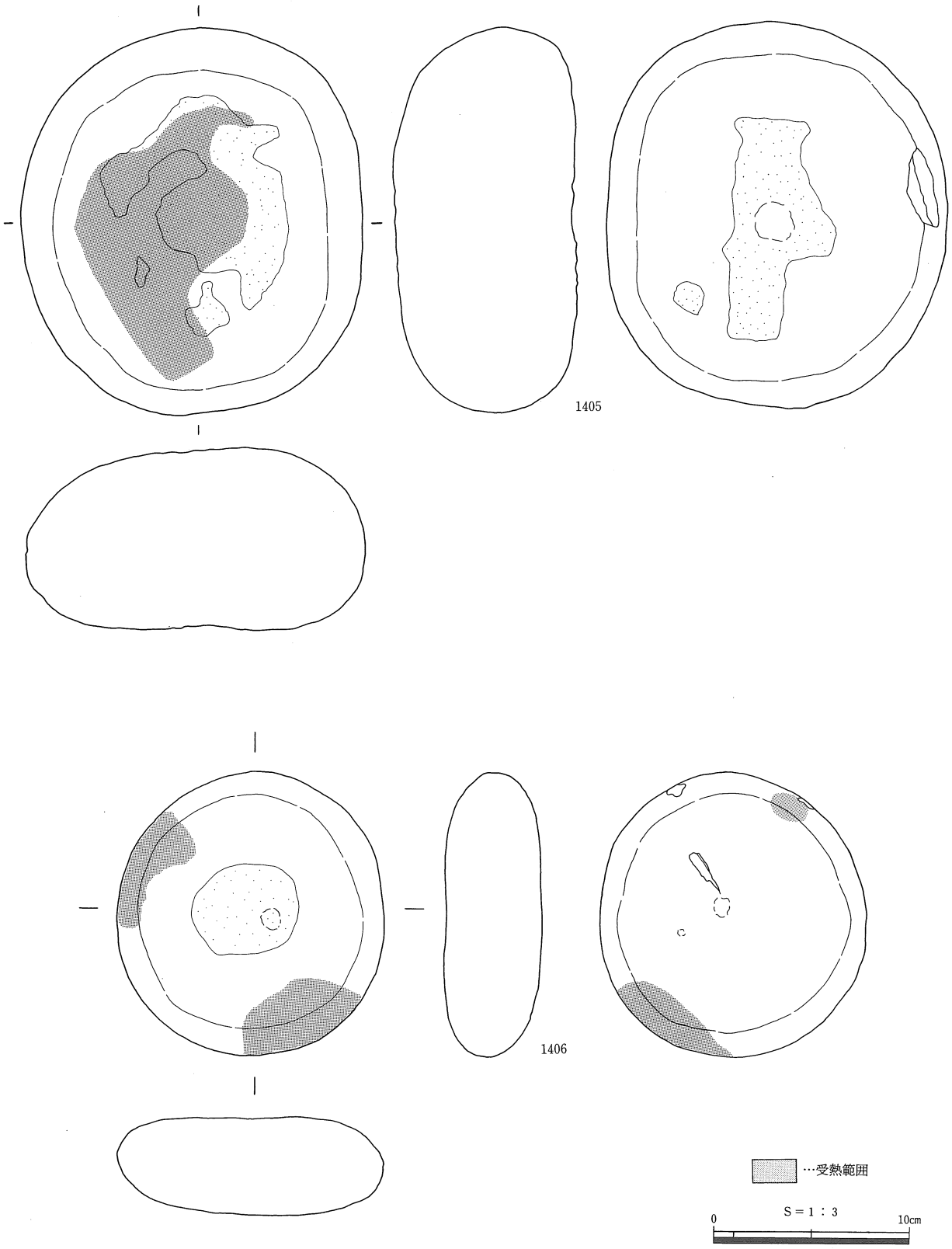



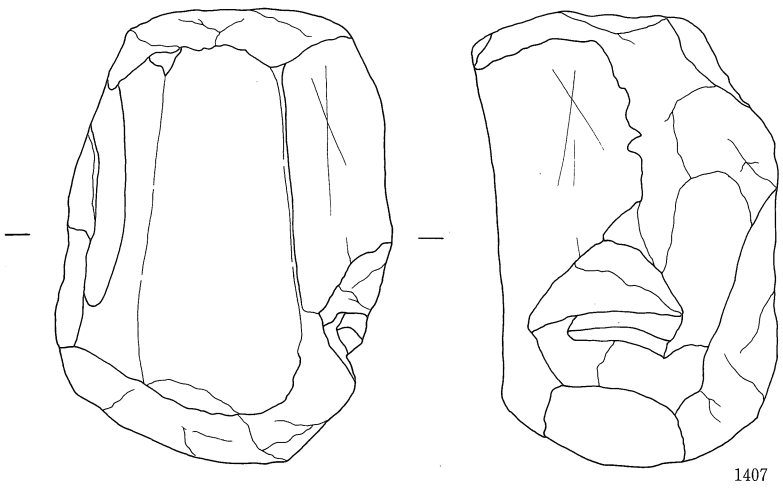

第377図　遺構外出土遺物実測図(3)

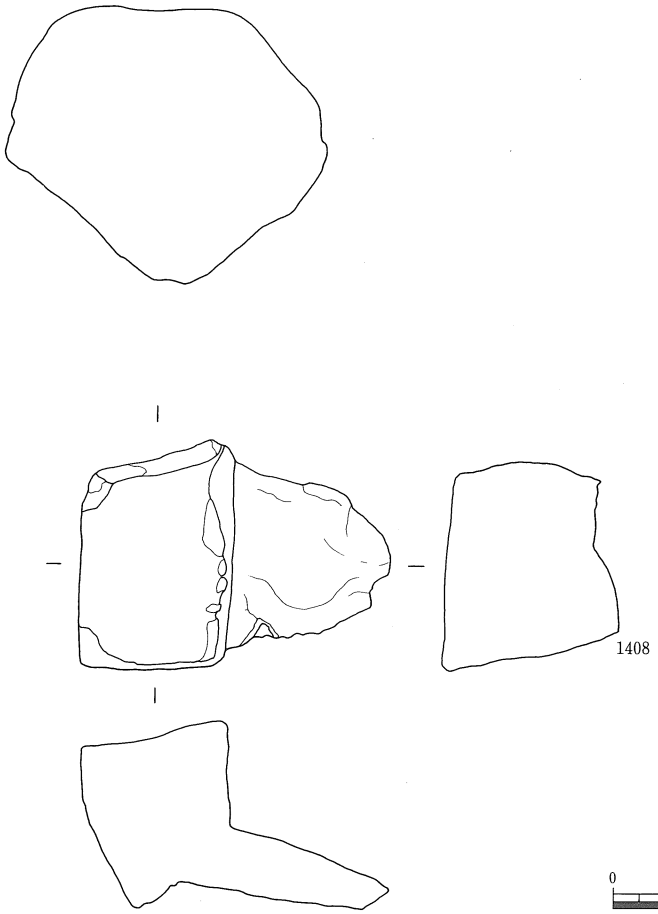


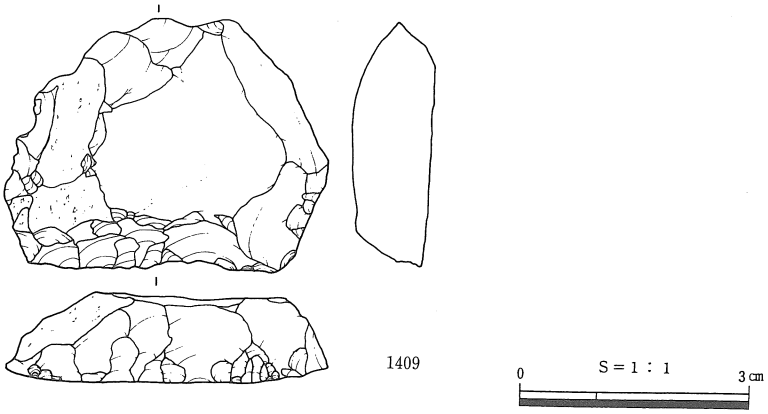

第378図　遺構外出土遺物実測図(4)




第379図　遺構外出土遺物実測図(5)




第380図　遺構外出土遺物実測図(6)